

ざるが如く、老い衰へゆくかなしみをいへる也。

林霧校聲鶯不老。岸風論力柳猶強。同前。

この詩は上と同じ也。第四句也。都べて、我が身の老い衰へたる心也。上句は我が生は晩春の鶯の聲よりも老いたる心也。霧によすることは、咽霧山鶯とあるよせ也。下句、年老いて、力弱きこと、弱柳よりも猶まされりといふ也。或る説にいふ。菅三品の兄、雅規朝臣の云ふ。強の字誠強云々。三品いふ。又、何れの字をか用る侍るべき。雅規朝臣、つらく案じて誠になかりけりとなんいひけると云々。

醉對落花心自靜。眠思餘算淚先紅。同前。菅雅規

この詩、上と同座の會也。上句は醉のうちに花の散るを見れば若き時の様にいさむ心もなくつれづれ也。かく、心の老い果てたるは、いくばくの年になりたるごと、靜に餘命を數ふれば、纔に末近き故、涙も紅なりといふ也。眠とは靜かなる心也。

ます鏡そこなる影にむかひるて見るときにこそ知らぬ翁に逢ふこゝちすれ。躬恒

躬恒家集、并に拾遺集の歌也。この歌の見る時にこそといふに始めて驚きたる心あり。うつらくと年月を送り來て我が老をも知らざりしに、今、鏡の影を見て昔の面影もなく衰へかはりたれば、わが顔ともおほえず、驚きたる心哀れ深きにや。

いづくにか身をばよせまし世の中に老をいとはぬ人しなければ。爲頼

誰れしも老人は厭ふ世なれば、いつかたに我が身をよせんかたもなしと嘆く心也。人しのしは助字也。

和漢朗詠集註 卷第九 終

和漢朗詠集註 卷第十

交友

琴詩酒友皆拋我。雪月花時最憶君。寄殷協律。

この詩、文集二十五、寄殷協律とあり。註に、叙江南舊遊とあり。殷協律と、もと、江南にて遊びしことを思ひ出で、別れて後に送られたる詩也。上句は白居易は琴詩酒の三を友とせし也。これを北窓の友といひき。年若き時は、常にこの三に携はれば友も自からありしに年老いぬれば、其の詩酒の友も、皆我れを見すてたれば、拋我といふ也。されば、雪月花の面白き折節には最も舊遊せし殷協律のことをのみぞ思ひ出づると下句にいへり。

陽春曲調高難和。淡水交情老始知。報張十六員外以新詩見寄。

この詩、文集二十三にあり。張十八員外が新詩の卷の後に題して元微之に寄せたる詩也。上句、陽春曲調といふは、郢中の歌の曲也。郢といふ所は、楚國の都にて、歌を好み歌ふ所也。依つて歌をば郢曲といふ。始め下里巴人といふ曲は和するもの數千人也。陽阿、薤露と云曲は和する者數百人也。陽春白雪の曲は和するもの數十人にすぎず。是れ其の曲愈々高くして和すること愈々寡しと文選にあり。高難和とはこの心をいうて張十八が詩の及びがたきことをほむる心也。下句、淡水交情といふは本文也。君子の交りは淡くして水の如し。小人の交りは甘くして醴の如し云々。言ふ心は、水はいつとなく淡き味にてかはることなき也。君子は人と語らふこと常に同じ様

なる也。醴は限なくあまけれども、後には必らず味のかはる也。小人のたしきは其のやうに始めはこくして後には必らずうとくなる也。然れば淡水の契なりけりとは老の後にぞしらるゝ、年老いぬれば萬の人のうとくなるに、君のみこそ昔しのまゝにておはしませばといふ也。是れは元微之へ云へるなるべし。

昔年顧我長青眼 今日逢君已白頭

贈三狎衛一 許渾

此の詩、上句は阮籍と云ひし人、親しき人を見るには青眼を以て見、疎き者を見るには白眼を以て見し也。世説、并に、晋書に見えたり。此の意を以つて作れるか。或はいふ。しからず。青眼といふは少き姿也云々。下句、我が身の年老いて昔の友に逢へる心也。

蕭會稽之過古廟託締異代之交

張僕射之重新才

推爲忘年之

友

交友序 後江相公

これは交友の序也。上句、蕭會稽とは會稽の太守にて蕭氏といひし人也。吳の季札といひし人の賢なりしことを慕ひて其の墓に行いて遊びなどせし人也。異代交とは世は異なれども志を同じうして交を結ぶ心也。下句、張僕射とは僕射は大臣の官也。張公といひし大臣也。此の人、才ある人を重くして、濟陽の江惣といひし人、才賢かりしかば友とせし也。新才とは江惣は年少くして才にとめりしかば新才といふ也。忘年とは張公は年老いて相似ざれども年を忘れて相ともなひしと也。

裴文籍後聞君久

菅禮部孤見我新

菅篤茂

この詩は、渤海といふ國より裴文璆といふ人この國に來れりけるに、篤茂朝臣のおくれる詩也。上句は、昔この

裴文璆が父の裴文籍が、この朝に渡れりけるに、篤茂が父菅丞相、詩を作りて送り給へることありき。其の事を思ひて、裴文籍の後さる人おはすときこえわたりて久しくなりぬと云ふ也。下句、菅禮部とは父の菅丞相を作り奉れり。禮部とは治部卿の唐名。禮部尙書といふ也。裴文籍の來りし時、菅家治部卿におはしけるにや。丞相亡せ給ひて後、我が身みなしごにて君に始めて見えぬるといふ也。

きみとわれいかなることを契りけん昔の世こそ知らまほしけれ。村上細製

この歌、親友の交りのあさからぬをよめり。とかく慕ひていひかたらふもいかなる前世の契約あるらん。知らまほしきと也。新千載集には題しらすよみ人知らずとありて戀の部に入りたり。いかなる事をちぎりけんなど、あるゆるなるべし。

誰をかも知る人にせんたかさこの松も昔の友ならなくに。藤原興風

高砂は山の惣名也と家長の説也。榮雅いふ、たれをか昔の知る人にせんと思ふに、高砂の松ならで昔の物なし。されど、それはのこりても友にてなければかひなしと舊友を慕ふ由也。古今集雜の歌也。

懷舊

昔の世を忍び思ふをいふ也。

黃壤誰知我

白頭獨憶君

唯將老年淚

一灑故人文

白氏文集二十一、題故元少君遺文二之詩。

この詩は文集の二十一にあり。上の遺文三十軸と同時に、故元少君が文集の後へに悲しみの心をのべて、二首の詩を作り給ひし其の一也。初句に、黃壤とは黃泉也。冥途をいふ。左傳にいふ、天玄地黄、泉在地下中、故言黃

泉云々。今、言ふ心は我れはこの元少尹のうせたるを戀ひしのべども黄泉にては我がかく思ふことをも知らじといふ也。次の句は我れのみ獨かく老いて君が事を慕ふといふ也。文集には、白頭徒憶君とあり。次句はただ老の涙をもて遺文の上にそぐのみを事とするにてあるといふ也。

長夜君先去。殘年我幾何。秋風滿袂淚。泉下故人多。同。

この詩は文集三十一にあり。微之、敦詩、晦叔といふ三人の友相次いでうせたるを傷みて、二首の詩を作れりし其の一也。初の詩にいふ。併失鸚鵡侶と云々。此の詩の心は生死長夜のうちに君達は先き立ちて去りにき。我れ獨り残り留まりて残りの命とてさのみいつまでかあらんといふ也。秋風滿袂淚とは秋風のうち吹く比は、一しほ物悲しく、涙止めがたきに、昔の友を數ふれば其の數多くなくなりたりといふ也。泉下も黄泉といふと同じ心也。

往事渺茫都似夢。舊遊零落半歸泉。

贈微之十七韻。白。

この詩、文集第十七にあり。樂天の友、元稹に澧水の邊にて別れて、後五年して夷陵といふ所にて遇ひて、三宿語り明かして別れに送れる也。上句、若くさかりなりし昔の事はかすかにして夢のやうに覺ゆといふ也。下句はもとあそびなれたりし人々多くは方々におち散り別れて、半は、又、黄泉にゆきうせたりといふ也。渺茫はかすかなる心。零落はおちぶれたる也。

蘇州船故龍頭暗。王尹橋傾雁齒斜。

問江南景物。白。

この詩、文集二十七にあり。上句は白居易、もと、蘇州の刺史となりてふねにのりて至りし其の舟、今は舊りはて、それとも見えぬことを、龍頭暗といふ也。龍頭鵠首など、舟をいふ也。次の句は王尹は橋ある所の名也。

雁齒は橋の名也。橋板のならびつらなれること雁の齒に似たればいふ也。橋傾といふ傾の字、妙なり。是れも古くなりしさま也。

金谷醉花之地。花每春旬而主不歸。南樓翫月之人。月與秋

期而身何去。

右大臣報恩願文。菅三品。

これは右大臣報恩の願文也。上句金谷といふは金谷園也。晋の石季倫といひし人の花樹を多くうゑて愛せし園也。今、言ふ心は花は散りても、春を迎へば再び咲き旬へども、主は長く去りて、又と歸ることなしといふ也。金水の流れ出づる谷なれば云ふとぞ初學記に見えたる。次の句は瘦亮字は元規といふもの、南樓をたて、月を翫びし也。今、言ふ心は月は秋毎にかはらねども、ながめし人は影も見えずといふ也。石宗瘦亮によせて、今のことをいひて、かやうに生死無常の世なれば、早く榮耀を捨て、菩提におもむくべしと也。

王子晋之昇仙。後人立祠於緱嶺之月。羊太傅之早世。行客墜

安樂寺廟序。源相規。

この序、筑紫の安樂寺菅相丞の御廟にて、作文侍りけるに、肥後の守源の相規がかける序也。文粹第十一にあり。上句、王子晋が事上にあり。此の人、仙を得て去りて後、緱氏山に歸り來て、笙を吹きたりし所に、後の人、かれがために、祠をたてたりし也。祠とは廟堂也。下句、羊太傅とは羊祐、字は雍伯、洛陽安里の人也。この人、孝養の心深くして、又、身の才もありけり。其の名あらはれてつひに太傅に至りにけり。父母失せにければ元終山といふ山に葬りて父母のためにこそ命は惜しかりつれ。今、生きて何にかはせんとて身を投けて失せにけり。

其の徳を碑文に作りて岷山といふ山の麓に立てたりければ、行きかふ人、皆、碑を見て涙を流しけり。仍つて墮涙碑とぞ名づけたりける。其の意を作れり。すべて、言ふ心は、今、菅丞相の廟もかく王晋羊祐があとのやうになんある。事は異なれども、おもむきは變らずといふ也。或は云ふ。この序を講ずる時、安樂寺の靈廟震動せしとかや。

促齡良木其摧歎

遺愛甘棠勿剪謠 野美人

この詩、上句、促齡良木とは、促は迫也。催也。早世をいはんとて促齡といふ也。良木とはこの失せたる人、英才の器量ありしことを良木といふ也。よき木は必らず人に剪りくだかるゝものなれば、此の人の早世を歎くことを比していへり。莊子に、文木の粗梨橘柚のたぐひは其の能を以て折られ泄れて、其の天年を終へずして中道にして天すといへる心也。下句は燕の召公といひし人、周の文王の子、周公旦の弟也。仁徳ありて民をあはれむ心深かりけるが南國にめぐりおはして或る時は甘棠といふ木の下にて政を行はれたりけり。召公うせて後、民大にうれひて此の木を守りて蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇とうたへること毛詩に見えたり。遺愛とは失せたる人の仁徳をのこせる心也。

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ。

古今雜上にあり。宗祇云ふ。もと知れる人につかはす歌也。是れも戀にあらず、本、よしと思ひし水なればぬるけれど汲む心也。疎き様なる人なれども、もとのよしみを思ひて尋ぬる義也。牡丹花云ふ。此の清水、播磨の稻見野にあり。當時は清水の里とて宿にてあり。昔はめでたかりし清水、今はぬるくなりたる由によみならはせる也。然るを、昔、忘れぬ人よりて飲む、其の心をよめり云々。昔を忘れず思ふ心の歌なれば懷舊の歌にかゝれた

るなるべし

むかしをばかけじと思へどかくばかりあやしくめにもみつなみだかな。村上御製

拾遺集、詞書に、右大臣の女御うせ侍りにければ、父おとゝのもとにつかはしけるとありて、いにしへを更にかかけじと思へどもと上句あり。昔をばかけじとはかけて思ひ出でじと思へどもとの心也。心は明らかなるべし。右大臣の女御とは九條右丞相輔公の御むすめ安子の御事にや。

世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くなりけるかな。爲頼

拾遺哀傷に、詞書に、昔見侍りし人々多くなりたる事をなげくを見侍りてとあり。歌の心は世に生きて今もあらば兎あらんかくあらんと思ひ出づる人のなくなりたるが多くなりつるよと歎く心也。

述懷

專諸荆卿之感激

候生豫子之投身

心爲恩使

命依義輕

後漢書之文

これは後漢書の文也。專諸、荆卿、候生、豫子は四人の名也。皆、主君の恩を思つて命をすてし人也。專諸は伍子胥に相隨ひて恩を蒙りけり。吳の公子光と王僚と中あしくして、互に殺さんとしけるに公子光が子胥を語りひければ專諸を呼びて公子光に告げたり。專諸、謀をもて王僚をむかへけり。王僚が軍兵、王宮より專諸が家まで道にひまなくみたり。然るに專諸は首を炙りたる魚の中にかくして、王僚にすゝめけり。王僚知らずして魚を食はんとするに、專諸、匕首をとりて、王僚をさし殺しつ。匕首とは、一尺八寸の劍の頭のどに似たる也。僚を殺すといへども、僚が兵にうたれにけり。吳の大伯が世家に見えたり。荆卿とは荆軻也。秦の始皇、樊於期といひけるものを惡みけるに、於期、燕の國にをりけり。荆軻と二人云ひ合せて、燕の太子丹のために、始皇をうたん謀をな

して、於期がいふ。我れ太子丹のために命をすてん。我が首をとりて始皇に奉り、其のうちとけたらんに討つべき也といひて、自から首をはねて失せぬ。かくて荆軻、秦舞陽といふ者を具して、其の首をもちて、秦の國へ行きぬ。又、燕の國の圖をもちて、今は此の國を君に奉らんといひけり。こゝに、始皇心とけて出で合ひ給ふに、荆軻走りかゝりて始皇の袖をとらへて、刺し殺さんとす。始皇のたまはく、今ひとたび婦人の琴をきかん、暫らくのべよと宜ひければ、暫らくおさへたるに、婦人琴をひく。其の曲に、七尺の屏風は躍り越えぬべし。羅綾の衫はきれぬべしとひきければ、始皇さとりて袖を引ききり、屏風をこえて逃げのがれにけり。さて、荆軻を殺し、太子丹を亡ほしけり。侯生は、魏の隱士、侯嬴といふ者也。年七十にしていやしく貧しきものなりしを、魏王の弟、信陵君、酒をまうけて侯生を迎へ、禮を厚くして上客とす。侯生かく信陵君の己れを敬ふ心を見とめて、又、朱亥といふものをすゝめて客となさしめたり、秦の國より趙の國を圍みし時、信陵君が姉、趙の平原君、書をつかはして魏の國へ救を乞ひしに、信陵君これを救はんとすれども、手勢すくなかりしに、侯生謀をなして、魏の將軍晋鄙を朱亥に鐵推にて打ち殺させて、晋鄙が軍勢を信陵君につけたり。さて、信陵君、其の軍勢を引き具して、趙の救ひに出で立つに、侯生いはく、臣も從ひ參るべけれども老いて堪へ難しと云うて自から到ねて死したり。豫子は晋の大夫豫讓是れ也。智伯といふ人の臣也。趙襄子といふ人ありて、智伯を殺して其の首に漆ぬりて水の器にしたりければ、豫子心やましく思ひて、襄子に報いせんとてそれが廁にかくれるたりけるに、襄子廁に入らんとする時、胸騒ぎのしければ人を入れて見るに、豫子つるぎをもちてをりければ、からめとりて殺さんとするに、先君の事を思ひて、かくする志のあはれを感じて、其の罪を許して追ひ放ちぬ。後に、又、豫子身に漆ぬりて癩となり、灰を飲みて嘔となりて、橋の下にふして、襄子を殺さんとうかがひければ、襄子かの橋を渡らんとするに馬すゝます。あやしみて人をして橋の邊を見するに、豫子、又あり。襄子がいはいく、初めは義

を以て汝を許しつ。今は許すべからずといひければ、豫子が曰はく、臣敢て死をいただきます。願はくば其の御衣をたまはらんと云ひければ、襄子衣を脱ぎてとらせたりければ、大いに悦びて、つるぎを抜きて衣をなけつ、三たびおどりて、劍に臥して自から死にけり。皆、史記に見えたり。感激とは其の恩恵に感ずる心也。投身とは身をなけうち捨てしこと也。今、言ふ心は恩を蒙りぬれば、心はそれにつかはれぬ。義を思ふ故に、命も惜しからぬものなりといふ也。

范蠡^{ハンレイ}收責^{シュウセツ}勾踐^{コウケン}乘扁舟^{センヒエンシュウ}於五湖^{ウゴ}。咎犯^{カウバン}謝罪^{シャツサイ}文公^{ブンコウ}。亦逡巡^{ニシユンジュン}於河上^{カウ}。

後漢書文。

これも後漢書の文也。或はいふ是れは澄明が策の文也。後漢書の文とは非也云々。可^レ勸^レ之。上句は上の雲の題の所にあり。收^レ責^トとは臣たるもの、責を怠らす忠功をつくすこと也。扁舟とは小舟をいふ也。下句、咎犯とは晋の文公の舅にして臣下也。文公の父獻公驪姫が讒にまよひて太子申生を殺し、文公をも殺さんとしける故に、文公、趙襄咎犯等五人の賢士を從へて他國に逃げのがれて、十九年經て秦の國より文公をたすけて晋の國に入つて國主となせり。かくて、文公國に入り給ふ時、河上に至りて咎犯が申すやう、臣、君に從ひて天下をめぐり侍りし程、過ちをつかまつりし事多かりき。自からだに其の過を存知たればさこそは君もしろしめしめ。是れより御暇を賜はらん。まかり去りなんといひければ、文公のいはく、若し、國に歸りて咎犯と共にせざることあらば、河伯照覽すべしと宣ひて、即ち璧を河中に投げ入れて誓ひたまへること左傳に見えたり。逡巡とはたちもとほる也。是れ、范蠡、咎犯ごときの忠臣も、君の誅を恐れしことをいふ文也。其の故に、此の述懐の所へ入れられたる也。

翫其磧礫不窺玉淵者。未^ダ知^ラ驪龍之所^ヲ蟠也。習^セ其弊邑不^レ視^ニ上邦^ニ者。未^ダ知^ラ英雄之所^ヲ躔也。文選吳都賦。左大仲

これは文選の第五、左太仲が吳都の賦の文也。はじめ、第四卷の蜀都賦に、西蜀の公子、蜀の國の山川險阻なることを稱美せしかば此の賦にて、吳の王孫あざけりて吳都の盛んなるにはしかじといへることをいひし詞也。礫とは淺き水の沙石をあらはせる貌也。玉淵は水の深き所、美玉の出づるところ也。驪龍はただ龍の名也。言ふ心は、西蜀の公子の習ふところ淺くして、此の水の淺きが如し。我が國の玉淵の深きが如くなるを知らずと也。莊子、千金之珠在九重之淵、驪龍領下といひし心也。弊邑はやぶれたるさと也。上邦は上國と同じ。英雄は百千人にもこえたる也。言ふ心は、蜀、たゞ、其の弊小の邑にのみ習ひて、上國を見ず。英雄の行歴するところを知らずとあざけりし心也。

人間禍福愚難料。世上風波老不禁。詠懷。白

この詩は文集二十七にあり。歳暮に詠懷といへり。上句は人のよにあるに、何によりて禍あり。何によりて福ありといふことを愚にして辨へがたしといふ也。下句は世をふることは荒き風、烈しき波を凌ぐやうにして憂けれども、老の世までもこれをえやめぬといふ也。

車前驥病駑駘逸。架上鷹閑鳥雀高。寄山塗李逢秀才。許渾

この詩の意は賢人の世になき時、愚者の英雄たることをそしる也。上の句驥とは駿馬也。一日に千里を行く馬也。大國には馬に車をかくる也。駑駘とはにぶきおそき馬也。よき馬のなむむ時はにぶき馬の誇る也。下句、架上と

は架の字タカボコとよむ也。鷹の翅ををさめてたかほこにしづまりたる時は小鳥翅をのして高くとぶ也。これは皆よき人のなき時、卑しきものほこるにたとへたる也。よりに述懐の所に入れられたり。

事事無成身也老。醉鄉不去欲何歸。醉吟。白

此の詩、文集十七にあり。醉吟二首の中の一也。言ふ心は若きほど、さまざまのあらまははありしかども、終に何事をなせりともなくて、既に、老の齢になりたり、もはや、今よりはいよく何事をかなさん。只、醉郷を去らずして遊ばん。何れの所にか行かんといふ也。

范蠡收責。棹於扁舟而逃名。謝安辭功。鞭孤雲而養志。流懷。後江相公

これ述懐と註にあり。范蠡が事上にあり。收責も上に註す。逃名とは功成り名遂けて身退く心也。謝安とは晋の世の賢人也。字は安石といひき。陳の國陽夏といふ所の人也。常に臨安の山中に住して、丘谷に遊びて、心を自由にして明し暮しけり。帝、其のかしき事を聞し召して召しけれども、久しくうけざりけり。晋書に見えたり。鞭孤雲とは山林に遊ぶ心也。養志とは吾が心のまゝにふるまふ也。かゝる人々のありさま、我れも面白く思ふとの心也。

昇殿是象外之選也。俗骨不可以蹈蓬萊之雲。尙書亦天下之望也。庸才不可以攀臺閣之月。直幹申文。

これは橘の直幹が民部太輔を望み申したる申し文也。上句は昇殿とは五位已上に叙して殿上をゆるさるゝことをいふ也。象外とはこの世の外といふ事也。殿上をば仙宮にたとへて象外といふ也。仍つて昇殿は象外の選びにて

其の人にあたる事なりといふ也。俗骨とは仙の相なきものをいふ也。仙の相あるものをば金骨といふ也。然れば金骨をえらびて昇殿をば許さるゝことなれば我が身は俗骨にて仙洞に望むべきものにあらず。然れば蓬萊の雲をふむべからずといふ也。下旬、尙書といふは辨官也。これ、又、要官にして天下のきほひのぞむ事なれば、短才の身は思ひかくべからずといふ也。

齡^{ヨハヒハツゲリガシ}亞^ニ顏^ニ駟^ニ

過^ゴ三^ニ代^ニ而^ニ猶^ホ沈^ム

恨^{ウラミ}同^ニ伯^{ハク}鸞^ニ

歌^カ五^ニ噫^ニ而^ニ將^{ヤス}去^ク

宴會序。橋正道。

これは第三の親王の宴會の序也。言ふ心は吾が身の沈みぬることをうれへたる也。顏駟とは人の名也。顏回にはあらず。此の人、才かしこかりしかども運の拙なくて三代の君にすてられたりし也。漢の武帝の幸し給ふにひとり老郎あり。ひけもかみも誠に白し。帝、問ひ給ふやう、いかで、かく老いゆくまで世にもあはであやしきまにてはあると宣へば、駟答へて曰はく、文帝は文を好み給ひき。臣、其の時武を好みき。景帝は老いたる者を好み給ひしに、臣は其の比若かりき。君は年若きものを好ませ給ふに、臣、既に老いたり。故に三代に遇はずと申す。武帝あはれみて會稽の都尉といふ官になさせ給ふ。漢武故事にあり。かの顏駟は老の身も遂に用ゐられたり。我が身は三代をすぎて猶沈みはてんといふ也。下旬、伯鸞といふは梁鴻、字は伯鸞、博學なる人なれども、家貧しかりき。東關を出で京を過ぎて、五噫の歌を作りて歌ひけり。噫の字、於其反、恨の聲也。和訓にはなきとよめり。其の歌に曰はく、陟^シ被^ニ北^ニ芒^ニ兮^ニ噫^ニ。顧^ニ覽^ニ帝^ニ京^ニ兮^ニ噫^ニ。宮^ニ室^ニ崔^ニ嵬^ニ兮^ニ噫^ニ。人^ニ之^ニ劬^ニ勞^ニ兮^ニ噫^ニ。遶^ニ々^ニ未^ニ央^ニ兮^ニ噫^ニ。この歌五つ噫の字あれば五噫といふ也。終に、吳の國に至りて臯伯通といふもの、家のほとりにあやしきまましてありけるを、伯通あやしみて家居を與へたりければ、鴻、書を記すこと十餘篇して去りにけりといへり。後漢書に見えたり。此の心を作れる也。或る人いふ。時の人、此の序を見て、誰れもあやしみけり。果して正通

妻子をひきゐて、高麗國に渡りて、其の國の宰相になりけり。後に、高麗より商人の來りていふやう、彼の國の人は日本は才を重くせぬ國にこそありけれといふとぞ語りける。或は云ふ。正通六條の具平親王にまゐりてかきたる序也。爲憲、齊名等其の席にありて、此の句を聞きて、正通思ふことの侍るにこそ。此の序の心あやしく侍るとしたるに申しけり。さて、まかりかへりて其の曉に高麗へわたりにけるとぞ。

言^{コト}下^ノ暗^ク生^シ消^ス骨^ノ火^ノ

唉^{エヒ}中^ニ偷^ニ銳^ニ刺^ス人^ノ刀^ノ

述懷。春道。

此の詩の意は、人の心のうらおもてありてたのみがたき事を作れり。甘きことばをも頼むべからず笑める顔にもうちとくべからずといふ也。消骨火とは、古語に云ふ。衆口融^レ金、積毀消^レ骨云々。刺^レ人^ノ刀^ノとは、文集にいはく、唉中有^レ刀^ノ潛^レ殺^レ人^ノとあり。これらの語を用ゐて作れり。

載^ノ鬼^ノ一^ニ車^ニ何^レ足^レ畏^レ

棹^ノ巫^ノ三^ニ峽^ニ未^レ爲^レ危^レ

感懷詩。前書王。

此の詩の心は、人の心の恐ろしくて頼むことの危きことをいふ也。上の句は周易睽の卦の上九のことばに載^ニ鬼^ノ一^ニ車^ニとある字を用ゐて、心は用ゐるかへて、おそろしき鬼神を一車にのせしむとも、人の心の恐ろしきにくらべては、畏るにたらずといふ也。下旬巫の三峽といふは、江州に三つの峽山あり。其の所の水いひ知らず早き也。文集、大行路に云はく、巫峽水能覆^レ舟。若比^ニ人心^ニ是^ニ安^ニ流^ニ。といへり。この心にて、人の心のたのみがたく、危きことは三峽の水よりまされりといふ也。

楚^ノ三^ニ閭^ニ醒^シ終^ニ何^レ益^シ

周^ノ伯^ノ夷^ノ饑^ニ未^レ必^ニ賢^ニ

橋候草。

この詩の心は、賢人をも賢人とする世にこそは賢人をたつるかひもあらめ。賢人をも用ゐざる世には、只、世

とおしうつりて身を全くせんにはしかじといふ也。されば屈原が、獨、醒めたりしも汨羅に放たれたるばかりにてさして賢人なるかひもなし、伯夷が武王をいさめしも、たゞ、餓死にたるばかりにて、何の益かありしといふ也。楚の三閭とは三閭の太夫屈原がこと前に出でたり。廣州先賢傳に、伯夷は遼西の孤竹君の子也。父死する時、兄、伯夷に位をゆづらずして、弟、叔齊にゆづりければ、弟、又、兄にゆづるに、父の仰せなり。いかでかそむかんといひて、互に相譲りて位につかず。周の文王は徳高き人におはしましけりとき、て行きて仕へ奉りけり。文王崩じたまひて、武王位につき給ひけり。さて後に武王殷の紂王を討ち給ふ事を諫めていはく、父の喪に軍をおこし給ふこと孝とするに足らず、國の主として人の地をとりたまふ貪る者にあらずや。人を殺すを樂とし給へり。あへて仕ふべからずといひて首陽山にかくれて終に餓死ににけりといへり。

何をして身のいたづらに老いにけん年の思はんこともやさし。 讀人不知。

古今俳諧歌にはことぞやさしきとあり。雅俊卿いふ。何のなす事もなく。うちすぎて、身の徒らに老いぬると年の思はんずるが耻かしきと我れながら我が年に耻ぢたる也。やさしきは恥かしき也。

世の中はとてまかくても同じ事宮もわらやもはてしななければ。 蟬丸

あだなるしばしのかりの世は、富貴にてあるも、貧賤なるも、同じ事なり。宮殿も茅屋も終にありはつる習ひならねばとのころ也。蟬丸は逢阪山の桑門なりしと也。延喜の御子といふ説用るすとぞ。この歌、新古今集に入りたり。

しばしだにへがたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月哉。 藤原高光

拾遺集、詞書に、法師にならんと思ひ立ち侍りける比、月を見侍りて、かくばかりへがたく見ゆるとあり。家集には、むらかみのみかど、かくれさせ給うての比、月を見てかくばかりと云々。かくしばしもすみがたき世に月

はうらやましくもすめる事と也。燈の字をそへてよめり。又、かゝる濁世に月はうらやましくいさぎよき事と也。ひとへに出家のころざしよりよめる歌也。高光は九條の右大臣師輔公の八男、童名、まぢをさぎみと云ひける由、榮花物語にあり。此のうたよみて、そのあかつきに出て、法師になり給ひ、多武峰にこもりて、いみじう行ひておはしける由、おなじ物語に見ゆ。左少將五位法名如覺。

慶賀 我れ人のよろこびをのぶるをいふ也

劍佩曉趨雙鳳闕。 烟波夜宿一漁船。

夜宿江浦。

この詩、文集十六に夜宿江浦聞元八改官、因寄此詩といへり。これ、樂天九江郡に左遷の時也。上句は元八が慶びの意也。劍佩とは、たち、おもの也。朝につかふる人のありさま也。曉趨とは忠臣の雞聲におどろきて内裏に急ぎ参る也。雙鳳闕とは内裏也。下句は我が身の愁ひなり。烟波を凌いで、夜、一つの漁舟の中に宿すとなり。愁の意知るべし。上句によりて此の部に入れられたり。

錢塘去國三千里。 一道風光任意看。

及第詩。 章孝標

この詩の意、上句、錢塘とは郡の名也。錢塘江といふも錢塘郡にあり。初學記にあり。其所、故國を去ること三千里也故にいふ也。下句、一道といふは一筋見えわたるほどをいふ也。ここに赴く間の道すがらの景氣を心のまゝにもてあそぶといふ也。及第して悦喜の心あるうへに。此の錢塘の風景を見てたのしむころ也。

想得江南諸父老。 因君鞭撻子孫多。

感及第。 章孝標

この詩の意、上句、江南といふは地の名也。もろこしの楊子江を隔て、南を江南といひ、北を江北といふ也。今

汝の學問をよくしてかく及第せしことを見て、江南の諸人の父たるもの、子孫をむちうち勵まして學問せさせんと想ひ得たりと也。人の子を學問せさせず、徒に牴牾の愛のみすべきことかはといふ心をふくめり。鞭撻とはむちうつとよむ也。うちさいなみて教訓する也。

吏部侍郎職侍中。著_マ緋初出_ニ紫微宮_一。

贊_ニ在_ハ衡_一。正通。

この詩は、栗田の大臣在衡公、はじめ、式部丞にて叙爵し給ふを賀して橘の正通の作れる也。四韻ともに入り、これは發句也。吏部侍郎は式部少輔の唐名也。或は云ふ。是れ式部丞藏人にて叙爵の時の詩なれば吏部郎中とあるべき也。侍郎は誤りか云々。侍中は藏人也。著_マ緋とは緋は五位の衣也。紫微宮は内裏也。紫微はもと天の名也。禁中を天に比してしかいふ也。はじめて五位の藏人に補して、あけの袍を着して參内のいみじきことをほめたる也。着_マ緋は文集十七に、新授_ニ銅符_一未_レ着_マ緋とある字を用るたり。一説に、只今、式部少輔侍中を兼補の故に、吏部侍郎といふと云へり。尤も之れを用るるべきにや。

銀魚腰底辭_ニ春浪_一。綾鶴衣間舞_ニ曉風_一。

同胸句也。

これは胸句也。上句、銀魚とは銀の魚の袋也。殿上人は節會の時、魚の袋を腰につくる也。魚の袋とは帯のかざり也。帯に魚の形を作りて付けたる也。以_ニ金銀_一作_レ之也。魚といふにつきて此の魚は浪をはなれてありといふ也。或は云ふ。唐土に虎の人と變じて害をなしけるに、魚袋をば、え變せざりければ、悉く魚袋を用るて、虎と人とを辨へ知りて、害を免かれけりと云々。下句、綾鶴とはあやの文に、雲鶴を織りたる也。李嬌が百詠の註に出でたり。歌には雲鳥のあやとよめり。其の紋に織りたる鶴の、曉の風にふかれて動くを曉風に舞ふといへる也。

花月一窓交昔_レ眠_一。雲泥萬里眼今窮_一。

同腰句。

これは腰の句也、意は昔は同學の友として一窓のうちにありしかども、今は君は貴く、我れは賤くて、雲泥相隔てたりといふ也。眼今窮とは目も及ばぬ心也。

省_レ躬還耻相_レ知久_一。君是當初竹馬童_一。

同末句。

これは落句也。言ふ心は、昔より、人をも知り、身をも知られたるが、思へば耻かしきといふ也。君は其の時幼かりしかども、今はかく榮え、我れは長年なりしかども、沈みはてぬるといふ也。うれしさをむかしは袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬるかな。

この歌は、古今の歌に、うれしさを何につゝまから衣たもとゆたかにたてといはましをとよみたるをうけて、昔は袖につゝみけり。こよひの嬉しさは袖にはつゝみあへず。身にもあまれりとよろこべる心也。新勅撰賀の部による人知らずと入れたり。

祝

慶賀と祝とのかはりは祝は押しなべての祝也。慶賀は人の喜をのべ身の上の喜をいふ也。

嘉辰令月歡無_レ極_一。萬歲千秋樂未_レ央_一。

雜言詩。謝偃。

これは謝偃雜言の詩也。或は英明の作と云々。江帥云ふ。この詩、踏歌の詩也。聖武天皇の天平元年に、始めて中宮を置きて踏歌を行ふ云々。この詩、上句、嘉辰令月とは元三上巳端午等也。心は明らか也。或は云ふ。一人の御慶賀の時、あゆみといふ事あり。學生どもの列參する也。又、さるべき大臣などの御慶賀の時も之れあり。列參して、先づ、此の句を訓に詠ず。次に音に詠ず、さてやがてたつ也。こしさし各絹四丈を賜ふ也云々。

長生殿裏春秋富_一。不老門前日月遲_一。

天子萬年。保胤。

この詩は天子萬年の心を作れり。言ふ心は長生殿、不老門は天子の居也。唐家より之れあり。春秋富月日遲とは萬年の心をいふ也。

君が代はちよにやちよにさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。

古今の賀の歌には、我がきみはちよにとあり。古今六帖には我がきみはちよにましませさゞれ石のとあり。堯惠いふ。千代にや千代と重詞也。八千代にあらず。宗祇云ふに、やは、てには也。榮雅いふ。君は千代に千代をかさねさゞれいしのいはほとなるまでひさしくましませと也。千代にとよみきりて八千代とよむといふ説もあり。さゞれ石は小石細石とも書く。苔の生ふるをむすとよめり。巖となるばかりにては巖のたよりなければ苔のむすとそへたり。

よろづよとみかさの山ぞよばふなるあめがしたこそたのしかるらし。仲算

拾遺、賀の歌に、聲たかくみかさのとあり。この歌の心は漢の武帝の時、嵩山三たび萬歳を呼びしを吏卒皆聞けり。其のゆゑに、大室の祠を増し、其の山の草木を伐る事を禁じ、山下にて三百戸を附屬して崇高と名づけ、たつとまれし事、事文類聚前集、猶、史記にあり。この古事をなぞらへて、三笠の山ぞよばふなるとよめり。三笠山は藤氏の祖神の跡たれたまふ山なれば、御代を守らせ給ふ故あるにや。よろづ世と三笠といふに三たび呼ばふ心をそへ。みかさといふより雨のしたと縁語にてよめり。仲算は先祖不詳。

戀

爲君薰衣裳。君聞蘭麝馨香。爲君事容飭。君見金翠。

無顔色。

大行路。借夫婦。以調君臣之不終也。

これ文集三、樂天の大行路の文也。この文の心は、臣、君に合躰する時は、忠言諫言君に用ゐらる。君に容れられざる時は忠言かへりて不忠となる。其の心を美人の寵愛衰へては何の容飭も甲斐なきに譬へていへり。上句、蘭麝といふは蘭馨と麝香と也。かゝるいみじき香を薰すれども君の心にいらざればかゝらずと思ふといふ也。下句、容飭とはかたちのかざり也。粉を施し、黛を書きなどするをいふ也。かくはすれども、君は我れを見うとみぬれば、無顔色とのみ思ふといふ也。金翠とは金にて鳥を作りて、女の頭のかざりにする也。

更闌夜靜。長門闕而不開。月冷風秋。團扇香而共絕。

遊仙窟文。長文成。

この文は、注に遊仙窟にありといへり。然れども今の遊仙窟にこの文なし。之れを尋ぬべし。上句、更闌とは夜のふけたる也。長門といふは、文選に曰はく、長門矢歡宴云々。闕とは寂靜也。しづかなりとよめり。長門とさして靜かなるさま也。一本に長門闕とあり。とちてとよめり。下句、團扇といふはまろき扇なり。今のうちも也。香とは冥也。寂也。くらしとよむ也。或は云ふ。もの、かけるふ義也云々。又、靜かなる心也。夏、もてあそばれし扇の、秋風にすてられし事を、我が身の幸せられぬ心に比していへり。

行宮見月傷心色。夜雨聞猿斷腸聲。

長恨歌文。白。

これは文集第二十卷、長恨歌にあり。唐の玄宗皇帝、蜀の中路にて、楊貴妃を失ひ玉ひて、戀ひかなしみ給ふ心也。上句、行宮といふは旅の皇居也。下句、巫陽に猿をきく心也。前に記せり。さらでもかなしき蜀道の旅に沈んや、貴妃に別れ給ひて、かゝる月を見、夜雨に猿をきく玉ふ心思ひやるべし。

春風桃李花開日。秋露梧桐葉落時。同。

これも同じ長恨歌にあり。言ふ心は、玄宗、貴妃に別れ給ひて後に、花のひらく春の朝も、共にあそびし事を思ひ、木の葉の散る秋の夕も、ひとりながめざりしものをと思して、時々につけて忘れたまはぬ心也。

夕殿螢飛思悄然。秋燈挑盡未能眠。同

これも同じ長恨歌にあり。言ふ心は夕の御殿に螢などのとびまがふを見るにつけても、いと思のまさる心也。悄然とは愁のかたち也。下旬、燈の消ゆるをかゝけていもねられず思ひあかすといふ心也。

南翔北嚮。難付寒温於秋雁。東出西流。只寄瞻望於曉月。

九條右丞相報吳越王之書。後江相公

これは九條の右丞相師輔公、吳越王に報じ玉ふ書を後の江の相公の書ける也。言ふ心は雁は年毎に南にかけり。北に向へども、それにつけても寒からん、暖かならんの音信をも得せず、月の東に出で、西に傾くに付けて、獨詠めやり、心をいたましむるばかりなりといふ也。夫婦の中のことにはあらねど。其のさま戀慕するこゝろあれば戀の所に入れられたり。吳越王とは一説にへだゝる中の作り名をいへるなりと。

聞得園中養花艷。請君許折一枝春。紀齊名

この詩の心は、花をもて佳人にたとふる也。人の掣にならんとて作りて送りけるにや。養花艷とは美人の深閨に養はれてあることを聞き及びたりといふ心を云へり。一枝春を折るとは美人あまたある中の一人を得んといふ

心也。

寒閨獨臥無夫婿。不妨蕭郎枉馬蹄。和江侍郎來書。

此の詩、註に江侍郎は江家の式部少輔なりける人なるべし。實名之れを尋ぬべし。美濃の國十市の采女といひける女、文才かしくよく詩をいひけり。江侍郎といふもの彼れを思ひかけて詩を送れりける和の詩也。言ふ心は、寒きねやの中に、夫もなく、獨、ふしたる身なれば來らんといふを妨ぐべきにあらざといふ也。夫婦とはおつと也。婿の字、常にはむことよめども、こゝにてはおつといふ心也。枉馬蹄とは馬歩みて蹄まぐるること也。江侍郎馬にのりて來るをいふ也。

貞女峽空唯月色。窈娘堤舊獨波聲。和源規材子鰥居作之詩。

この詩 註、源規材子といふは誰人ぞや。もし相規か。鰥の字、をとこやめとよめり。然れば鰥居とはをとこの妻なくて獨るたるをいふ也。彼の規材子、鰥居の詩おくりたるに、爲憲の和したる句なるべし。上句、貞女とは二夫に見えぬ女をいふ。貞女峽とは所の名也。貞女によせていふ也。今はさやうの女なくして、只、月の色のみありといふ也。下旬、窈娘堤といふも所の名也。それを窈窕とあてなる娘によせていふ也。左様の女なければ、其の堤ふりて波のこゑのみして、ものさびしきありさまをいふ也。畢竟彼の規材子がひとりずみを弔ひたる心也。わが戀はゆるもしらすはてもなし逢ふをかぎりと思ふばかりぞ。躬恒

古今の歌也。堯惠云ふ。戀といふ事は逢ふを限りとすれば、それを戀の果とすべしと也。宗祇云ふあふをかぎりの心一つにて身の成りはてん行くへも、心の落着をもしらぬ様也。

たのめつゝこぬよあまたになりぬればまたじとおもふぞ待つにまされる。人丸

拾遺集の歌也。たのめつゝとはたびくゝこんと契りたのめたる心ある五文字也。つゝといふに心をつくる事、此の歌の習と也。下の句の心は、今はまつまじきと思ひきるも、さすがに悲しく來ぬを待つ心にもまさりたりと也。餘情限りなく、感慨深き歌なるべし。

今こんといひしばかりにながづきのありあけの月をまちいでつるかな。素性

古今の歌也。宗祇云ふ。有明の月をまち出づる心。一夜の義にあらず。たのめて月日を送り行くに、秋さへなが月の空になりゆくさまを、よく思ひ入りてあぢはふべき歌也。餘情至極したる歌とぞ立旨御説同前。

無常

觀^{クワンズレバ}身^ミ岸^キ額^{ガク}離^リ根^ネ草^{クサ}。

論^{ズレバ}命^{イノチ}江^{カハ}頭^{カビ}不^ル繫^{フナガ}舟^{フネ}。

無常。羅維。

この詩、身のあやふき事は、岸の上の根なし草のごとく、命の定めなきことは江の舟の繫がざるが如しと也。心細きことをいへる也。

年^{トシ}年^{トシ}歲^{サイ}歲^{サイ}花^{ハナ}相^{アヒ}似^ニ。

歲^{サイ}歲^{サイ}年^{ネン}年^{ネン}人^{ヒト}不^ズ同^ジ。

有^レ所^ス思^フ。宋^{ソウ}之^ノ間^ノ。

この詩、唐詩遺響といふ書には劉希夷が作也。しかるに、宋之間劉希夷を殺して我が作と稱すといふ也。古文前集六、宋之間が作にて入りたり。言ふ心は花の色はとしくにかはることなし。人はしからず。こそ見し人はなくなりてあらぬ人にのみかはるとの心也。

蝸^{カウ}牛^ウ角^{カク}上^ノ争^ツ何^ニ事^カ。

石^{イシ}火^カ光^{カウ}中^ノ寄^ル此^ノ身^ニ。

對^ツ酒^ニ。

この詩、文集二十六にあり。上句は本文也。蝸蝸牛の角上に各一の國あり。左の角の上なる國をば觸氏といふ。右の角の上なる國をば蠻氏といふ。此の二國、よりく地を争ひてあひた、かふといへり。莊子にあり。蝸牛はかたつぶり也。角似牛故蝸牛といふ也かれが角はあだなるものにてあるにそれにある國のいどみ戦ふらんことあぢきなきたとへなるべし。此の世をたとへば蝸牛の角の如くなるに、何のあらそふ心ぞやと也。下句、此の身のほどなきこと石火の光の如しとの心也、あだにはかなきことをいふ也。

生^{シヤク}者^{ワル}必^ハ滅^ス。

釋^{シヤク}尊^{ソウ}未^ダ免^{マスカレ}梅^{メイ}檀^{タン}之^ノ烟^{エン}。

樂^{タノシ}盡^シ哀^ミ來^ル。

天^{テン}人^{ジン}猶^ホ逢^フ五^ス衰^ス之^ノ日^ニ。

願^{カク}文^ノ。後^ノ江^ノ相^ノ公^ノ。

この願文は、重明親王の北の方の四十九日に、江の相公のかける也。生者必滅とは、經にいふ。夫生輒死云々。抱朴子に云ふ。夫有^レ始^メ者^ハ必^ズ有^レ卒^ス。有^レ存^ス者^ハ必^ズ有^レ亡^ス云々。釋尊を鶴林に葬り奉る時、梅檀香をたき火葬せしかば、教主の如來も、無常をのがれ給はぬといふ也。或はいふ。梅檀五衰は音對也。千五也。五衰とは如^シ彼^ノ切^リ利^チ天^ノ。雖^シ快^ク樂^ニ無^シ極^ニ。臨^ニ命^ノ終^ノ時^ニ。五衰相現。一頭上華鬘忽萎。二天衣塵垢所着。一にいふ頂中光滅。三には脇下汗出。四には兩目數瞬(天人はまたきせぬもの也)。五には不^レ樂^ニ本^ノ所^ノ居^ニ。是相現時天女眷屬皆悉遠離といへり。六波羅密經に出でたり。天人のたのしみあるもかゝるうきめを逃るゝ事なしとの心也。

朝^{アサ}有^リ紅^{ベニ}顏^{ハツ}誇^ハ世^ノ路^ニ。

暮^{ユフ}爲^ニ白^ク骨^{ツク}朽^ク郊^ノ原^ニ。

中^{チウ}陰^{イン}願^{カク}文^ノ。義^ギ孝^{コウ}少^{ショウ}將^ノ。

この詩、無常の意を作れり。上句、紅顏といふは若き時、うるはしき顔也。下句、郊原とは文選註に曰はく、野外曰^レ郊^ニ云々。ある人のいはく、この句、冷泉院御時、麗景殿の女御中陰のとき、義孝少將の作れる願文也。

雖觀秋月波中影。

未遁春花夢裡名。

無常。後江相公。

この詩の心、上句、維摩經にいふ。此身如水中月云々。下句、春花夢裡は莊子の胡蝶の夢などの心なるべし。一本の題註にいはいはく、贈歸山僧とあり。

世の中を何にたとへんあさほらけこぎ行く船のあとの白浪。満誓法師

萬葉集には、下句こぎにし舟の跡なきがごととあり。拾遺集には此の集の如し。歌の心は明らか也。惠心僧都、うたを狂言綺話なればとてきらひ給ひしが、惠心院より湖水にふねのゆくを見て、少童子のこの歌を吟詠せしをき、給ひて、さては佛道修行にもなるべき道なりとて二十八品の歌、十樂の歌などよみ給へりといふ事、袋双紙に見えたり。満誓は筑紫觀世音寺の別當、俗名は笠の朝臣麻呂、從四位上と作者部類に見えたり。

末のつゆもとのしづくや世の中のおくれさきだつためしなるらん。良僧正

良僧正は遍昭の事也。家集の詞書に、世のはかなさいと思ひ知られて侍りしかばとあり。此のうた新古今集に入りたるに、東野州云ふ。末の露とは梢の心をよめりもとの雫とは木のもとのしづく也。すこし遅速はあれどもいづれも消ゆる事を人の命にたとへたり。

手にむすぶ水にやどれる月かけのあるかなきかの世にもすむかな。貫之

拾遺、哀傷、詞書に、世の中心ほそく覺えて、常ならぬ心地しければ公忠の朝臣のもとよみてつかはしける。

このあひだ病重くなりけりとあり。歌の心は明らか也。此のうたよみてほどなくなかりにけりとなん拾遺集に書きそへられたる。哀れあさからすこそ。

白

闇夜猶行明月地。

人間却蹈白雲天。

白賦。謝觀。

異本に此の句あり。師説、雪の景をいふといへり。

秦皇驚歎。

燕丹之去日烏頭。

漢帝傷嗟。

蘇武之來時鶴髮。

同

この賦、白といふ事を題とせり。上句、燕丹とは戰國の時、燕王の太子也。名をば丹といふ也。秦の國に、人質にてありける。秦王なさけなかりければ燕の國へ歸らんといひけるを、秦王、あざけりて烏の頭の白くなり、馬に角の生ひたらん時、汝を許して歸さんといへけり。太子、天に仰ぎて歎きていふ。天我が心を察せよ。地にふして歎いて曰はく、地、我が心を推せよ。かくいふとき、かしの白き鳥とび來りて、秦王の殿の上に居たり。又額に、角生ひたる馬、宮中に走り來れり。秦王、大に驚きて丹をかへす。丹、かへることを得たり。史記に見えたり。下句、漢帝といふは、漢の昭帝か。上の詠史の所に註したり。傷嗟とはいたみなけく也。蘇武、漢の使として胡地に入りて十九年にしてかへれり。故に、白頭となれるを鶴髮といふ也。

銀河澄朗素秋天。

又見林園白露圓。

白發句。順。

これも白といふ題也。此の詩四韻ともに入れり。是れ發句也。上句、銀河とはあまの河也。秋の空に白くあきらかに見ゆるさま也。澄朗はきよくすめる貌也。素秋とは素は白也。秋は白色にかたどる時也。故に素秋といふ。下句も白きこと也。

毛寶龜歸寒浪底。

王弘使立晚花前。

胸句。

これは胸句也。上句、毛寶は字は碩真といふ人也。或る人、江のほとりを行くに、白きかめの甲の長さ五六尺な

るをとりてもちたる人あり。彼の人、あはれみ買ひとりて、江にはなちつ。後に石虎のあだ二萬騎して相戦ひけるに、毛寶せめられて江に入りけり。かの人、石をふむこ、地してやうくうかびて岸に至りぬ。又、あやしみてかへり見れば、買ひて放ちし白龜なりけり、是れを蒙求に、毛寶白龜とあり。晋書にありと云々、龜波ともに白き心也。下句は、陶淵明、酒を好む人也。九月九日に酒を飲まんと思ひ、酒なかりき。東籬のほとりに、菊をつみてた、すみければ、江州の刺史、王弘といふ人、使をつかはして酒を贈りけり。其の使、白き衣を着たりけり。南史に見えたり。使も花も白き心也。晩花とはおそき花なり。菊をいふ也。

蘆洲月色隨潮滿

葱嶺雲膚與雪連

腰句。

これは腰の句也。上句、蘆洲といふはあしの生ひたる洲崎なり。月の光も潮も、ともに、満ちたる是れ白の心也。下句、葱嶺とは、永濟註にいふ。瞻部州の中央、大雪山の北、無熱池の南にあり。西域記に見えたり。其の山、極めて高くして常に雪消えずといふ也。雪雲ともに白き心也。信阿註にいはいく、文選の註にいはいく、葱嶺雪四時不消、白雲多、在涓州云々。

霜鶴沙鷗皆可愛

唯嫌年鬢漸皤然

末句。

これ落句也。言心は白き物の面白きをあけて、是れは、皆、もてあそびつべし。我が年老いたる鬢の白きのみぞ、いとふべきものにてあるといふ也。皤然とは白き貌也。

しらくししらけたる夜の月影に雪かきわけて梅の花をる。

しろき事をよみつらねて餘情かぎりなきにや。異本には、しらけたるかな月影に雪ふみわけてとあり。いま道遊軒の本にしたがへり。或る説に、此の朗詠集詩文は、公任卿のあつめ玉へり。歌は堀河院の御宇に右衛門督師頼

卿かきくはへ給ふといへり。ひが事なるべし。四條大納言の自筆の朗詠集とて、今の世につたへたるも、皆、歌を書きつらねられたり。其のうへ、藤原の基俊は師頼卿に同時にて、新撰朗詠集をえらび玉へりしも、又、うたをかきそへ給へり。基俊朝臣は二條家の和歌の祖にて、公任卿を宗とし給へれば、その朗詠集の體をうつしてこそ新撰し玉ひけめ。いかでか、師頼卿をしも規模とし給はん。これ等の事、其の證なるべし。但、此の朗詠の註むかしより詩文ばかりにありて、和歌の註解なし。かつ、又、無題の詩一つ、信阿が説に、師頼卿くはへらる、由註せり。是れらの事によりて、ふかくもしらぬ後人、おしはかりて、歌をもそのたぐひにいふなるべし。ゆめく用るるべからずと師説に侍りき。

信阿註跋云

應保元年辛巳十月五日、相^{ケテ}扶風^ヲ痾^レ終^ニ抄出^ノ之功^ニ畢。

永濟註奥書云

天文十七年戊申三月十六日書寫之、不審雖^レ多^シ如^ク本令^ニ書寫^ニ畢。
後見人宜^レ爲^ニ再治^ニ而已。

寛文十一辛亥曆林鐘吉日

京寺町通松原上^ル町

菱屋治兵衛開板。

第三 新撰朗詠集

新撰朗詠集 卷上

春.....FOR

立春 早春 春興 春夜 子日 若菜 三月三日付桃 暮春 三月盡 閏三月 鶯
霞 雨 梅付紅梅 柳 花付落花 躑躅 欵冬 藤

夏.....EIO

更衣 首夏 夏夜 端午 納涼 晚夏 花橘 蓮 郭公 螢 蟬

秋.....四二五

立秋 早穰 七夕 秋興 秋暮 秋夜 十五夜付月 九日付菊 九月盡 女郎花 萩
蘭 槿 前栽 紅葉付落葉 鴈付歸鴈 蟲 鹿 露 霧 擣衣

冬.....四三六

初冬 冬夜 歲暮 爐火 霜 雪 氷付春氷 霰 佛名付除夜

春

立春

淺深何水氷猶結 高卑無山雪不消。
立春十二月十九日 菅家後集

浮雲自後寒應暖 壯日如今去不歸。
立春十二月廿六日 菅家後集

としのうちにはるたつことをかすかのわかなさへにもしりにけるかな。
舊年春 貫之

春無跡至爭尋得 老趁身來亦避難。
立春日 藤篤茂

はるかすみたてるをみればあらたまのとしはやまよりこゆるなりけり。
紀文幹

早春

林外雪消山色靜 窓前春淺竹聲寒。
早春 白

及之於深水 則文漪動而紫鱗騰 著之於幽溪 則彩雲暖而黃

鶯出 初春詞 都巨香

煙生村巷遙知柳 雪積牆陰暗辨梅。
巡檢山野 物部安興

不醉爭辭温樹下 建春門外雪埋春。
元日賜宴 善相公

巖松雪宿暗山北、岸草煙濃識水東。

早春 橋在列

みしまえにつのくみわたるあしのねのひとよのほとにはるめきにけり。曾根好忠
みよしのははるのけしきにかすめともむすほほれたるうくひすのこゑ。紫式部
あふさかのせきをやはるのこえつらんおとはのやまのけさはかすめる。橋俊綱

春興

綠油剪葉蒲新長、

紅蠟黏枝杏欲開。

遊城東 白

秦城樓閣鶯花裏、

漢主山河錦繡中。

清明日 杜甫

銅街陌柳條條翠、

金谷園花片片燃。

遊宿洛中 張野人

居無常座、掃苔而暫代筵、

至無定家、

尋花而不問主。

陽春詞 紀齊名

中殿曙香從吹染、

上陽春色被煙陶。

陽春詞 都良香

萬事老來皆不敏、

唯因花鳥作聰明。

花鳥 田忠臣

衰鬢山陰多歲雪、

浮榮花下一時春。

暮春述懷 藤知房

こころあらんひとにみせはやつのくにのなにはあたりのはるのけしきを。能因法師
ゆきとまるところそ春はなかりけるはなにこころのあかぬかきりは。藤爲信

春夜

不_レ明_レ不_レ暗_レ朧_レ月、

非_レ暖_レ非_レ寒_レ漫_レ漫_レ風。

嘉陵春夜 白

春夜欲_レ明、

望_レ牛漢_レ之_レ西_レ轉、

夏_レ日告_レ朔、

指_レ象_レ魏_レ而_レ北_レ轅。

古廣春正暮 以言

子日

嘯_レ野_レ煙_レ之_レ春_レ光、

各_レ吟_レ一_レ句、

酌_レ山_レ霞_レ之_レ晚_レ色、

忽_レ醉_レ數_レ盃。

春日野遊 在列

まつのうへになくうくひすのこゑをこそはつねの日とはいふへかりけれ。能宣
ひめこまつおほかる野へにねのひして千世をこゝろにまかせつるかな。源道濟
めつらしき千世のねのひのためしにはまつけふをこそひくへかりけれ。信賢中將

若菜

若_レ尋_レ野_レ外_レ和_レ羹_レ主、

便_レ是_レ鹽_レ梅_レ鼎_レ足_レ臣。

子日屏風 義忠

かすかのおほくのとしはつみつれとおひせぬものはわかななりけり。圓融院御製
きみかためはるののいいてわかかつむわかころもてにゆきはふりつゝ。仁和御製
しらゆきのまたふるとしのかすかのはいさうちはらひわかなつみてん。能宣

三月三日 付桃

昔成王之叔父周公旦、卜洛陽而濫觴、今聖主之親舅左丞相、亦宅洛陽而宴飲。因流汎酒盃 匡衡
 醉鄉國之俗、伴鄭泉而得水路、酒德頌之文、因巴字而添風情。因流汎酒盃 匡衡

濃輝可愛、掩絳雪於仙家、嬋娟無雙、嘲紅粉於妓榭。桃始花 紀家

水寫右軍三日會、花薰東閣萬年盃。因流汎酒盃 匡衡

花筵晉日蘭亭飲、羽爵周年曲洛波。三月三日屏風 爲政

周旦古風傳曉水、魏年昔浪寄春苔。羽爵泛流來 江都督

からひとのふねをうかへてあそふてふけふそわかせこはなかつらせよ。三月三日宴 家持

暮春

渭水橋邊春已度、灞陵原上雨初晴。惠文太子

霞消李老青牛路、風去茅君白鶴峯。開山數暮春 以言

伴霞難盡餘花艷、哥雪未歸好鳥聲。花鳥與春殘 明衡

ちるはなにせきとめらるるやまかはのふかくもはるのなりにけるかな。六帖

ぬれつつそしひてをりつる年のうちにはるはいくかもあらしとおもへば。業平

三月盡

四十六時三月盡、送春爭得不慙慙。春去 白

林間縱有殘花在、留到明朝不是春。三月晦 李方

人只送春吾送老、鬢華頭鶴欲何歸。送殘春 菅三品

花落鶯啼携未別、登山臨水送將歸。三月盡 中書王

花鳥縱雖期向後、流年豈返老來身。同題 實範

はなみつつをしむかひなくけふくれてほかのはるとやあすはならなん。貫之
 をしめともはるのかきりのけふの日のゆふくれにさへなりにけるかな。躬恒
 はなたにもちらてわかるるはるならはいとかくけふををしましやは。朝忠中納言

閏三月

案頭則添三十行之曆日、窓前亦望千萬里之春風。今春又有春 順

風暖嵩煙重卷翠、月明洛水再沈珠。順

殘陽得閏甘重聽、曆日添行辭屢攀。後三月花鳥有餘 齊名

つねよりものとけかりつる春なれどけふのくるるはあかすもあるかな。躬恒

鶯

黄鷗巷口鶯欲語、烏鵲橋頭冰盡銷。正月三日閑行

遷喬何日、雖泥寒谷之蹊、仰榮今朝、漸動春花之思。樹是鶯朋友以言

粉閣夢驚傳好哢、紅窓燈盡送嬌音。宮鶯轉曉光村上御製

露濃、漫語園花底、月落高歌御柳陰。村上御製

金殿夢驚傳好語、玉樓鐘動奏清音。宮鶯轉曉光藤後生

唱衰首戴殘花雪、韻耄翅歸舊谷雲。流鶯歌曲老以言

ゆきのうちにはるはきにけりうくひすのこほれるなみたいまやとくらん。二條皇后宮
はなのかをかぜのたよりにたくへてそうくひすさそふしるへにはやる。友則
こほりたにとまらぬはるのたにかせにまたうちとけぬうくひすのこゑ。順

霞

山容水態之區分、自承陶染、城柳園梅之異種、暗添光輝。

霞添春氣色齊名

火是帶煙籠柳後、紅應交白鏤梅辰。齊名
色映新籠堤柳黛、光燒半秘嶺松煙。紅霞開綠樹勘解由相公

くらはしのやまのかひよりはるかすみとしをつみてやたちわたるらむ。朝忠中納言
よしのやまゆきにはあともたえにしをかすみそはるのしるしなりける。中務
きのふかもあられふりしはしからきのとやまにかすみたなひにけり。惟成

雨

花疑漢女啼粧淚、水似吳娃咲弄箏。訪山居過山傳温
斜脚繆出、紅女之手難施其功、輕質染來、墨子之淚尙悲其變。

密雨散如絲以言

柳眼剪波春黛綠、桃顏流汗宿粧紅。春雨洗花顔紀家

寫得楊妃湯後靨、摸成任氏汗來脣。春雨洗花顔英明

瓦檐時誤鴛鴦浴、華樹還驚女妓啼。對雨言志高五常

みつのおもにあやおりみたるはるさめややまのみとりをなへてそむらむ。伊勢
はるさめのはなのえたよりななほこそぬれめかもやうつると。敏行

梅 付紅梅

歌聲怨處微微落、酒氣薰時艷艷開。梅花

芬馥入簾、夜添薰籠之氣、艷色逼砌、影泛春流之波。詠前殘梅 藤篤茂

瑠璃屏薄雖相邀、翡翠簾疎亦不妨。梅近香入窓 延喜御製

差兒舊曲移殘溜、巫女別粧染曉風。林香雨待梅 天曆御製

半染秋毫浮硯水、斜薰春砌入珠簾。梅近香入窓 順

南薰風與南枝色、計會一時不辨香。梅花琴上飛 源時綱

しろたへのいもかころもにむめのはないろをもかをもわきそかねつる。深養父
わかやとのむめのたちえや見えつらんおもひのほかにきみかきませる。兼盛
むめかかをよはのあらしのふきためてわかねやのとのあくままちけり。嘉言

紅梅

剪丹霞而爲葩、便是春風之裁出、凝絳雪而作藥、豈非暖雨之

染成。詠庭前紅梅 篤茂

葩皆三重、不似流俗之樹、色自再入、無待染人之功。詠庭前紅梅 順

洞深疑是仙方雪、水近應薰海岸香。詠庭前紅梅 菅淳茂

不唯我愛人來愛、一片紅粧直萬金。源英明

くれなるにいろをはかへて梅のはなかそことにははさりける。貫之
をられけりくれなるにほふむめのはなけさしろたへにゆきはふれれと。宇治太政大臣

柳

不知細葉誰裁出、二月春風是剪刀。垂柳詩 元

居席幕深、五柳門、煙裊裊、紅衣曉薄、稠桑驛月蒼蒼。對策辨春秋 以言

白雪花繁空撲地、綠絲枝弱不勝鶯。楊柳枝 白

彭宅門閑春綠鏢、武昌樓暗暮煙深。柳影繁初合 保胤

春娃眠足鴛衾重、老將腰疲鳳劍垂。弱柳不勝鶯 以言

曉眼不眠非夢蝶、春腰無力欲栖鴉。詠柳 齊名

みちのへのくち木のやなきはるくれはあはれむかしとしのはれそする。菅家
ふるさとのみかきのやなきはるはるとたかそめかけしあさみとりそも。道濟
あさみとりそめてみたるるあをやきのいとをもはるのかせやとくらむ。是則

花

王船艤兮未出、春棹容與沙涯之間、絲帷垂兮猶眠、曉夢芬芳、

遠臨十二因緣水、多勝三千世界花、紅梅下作 江相公

句同唐帝專房女、粧咲秦醫一里兄、花木被知人 以言

門賓拾謁宜期夏、閨婦孤夢還妬春、花時不居家 以言

望疲雲嶺千條雪、跡入煙村一道霞、暮春尋花 四條中納言定頼

落葉灑衣春拂雪、濃粧泛酒曉斟霞、紅梅花下 菅之義

漢相閑空鑠雪、曹王園舊幾藩春、東西花色多 明衡

枝留彩鳳桃源月、浪織藻龍柳岸風、花開皆錦繡 時棟

六十餘回看未飽、他生定作愛花人、逐年未飽花 佐國

粧繁鳥囀家園露、香亂馬嘶隴塞風、遠近春花滿 源成宗

あさみとりのへのかすみはつづめともこほれてにほふはなさくらかな。菅家萬葉集
はるきてそひともとひけるやまさとははなこそやとのあるしなりけれ。四條大納言
さくららはなあかぬあまりにおもふかなちらすはひとやをしまさらまし。堀河右大臣

落花

遮沙風而婉轉、廻雪之袖暗薰、過巖泉而婆娑、落霞之琴遠和。

渡水落花舞 匡衡

逸馬嘶晨風之中、蹄踏輕質之雪、征衣過夕陽之下、袖織回文

雪膚路濕霓裳重、風力橋高錦繡明、渡水落花舞 儀同三司

胡關春暮難留雪、燕寢月荒欲妬春、落花遠近飛 明衡

洛水流間橫宿雪、天津月下渡殘春、橋上落花多 第三親王轉任

わかやとのさくらなれともちるときはこころにえこそまかせさりけれ。花山院御製
ふくかせそおもへはつらきさくらはなこころとちれるはるしなけれは。大貳三位

躑躅

風嫋舞腰香不盡、露消粧一臉淚新乾、岩榴花 白
紅躑躅花飛失艷、白鬚髯容見多愁、醉後對躑躅 善相公
いはつつしをりもてそみるせこかきるくれなるそめのきぬににたれば。泉式部

欵冬

養得昔令扶病雀 開來本是待蛙鳴 已上題款冬 保胤
八重濃艷人相貴 一片踈葩世所輕 已上題款冬
はるかすみゐるてのかはなみたちかへりみてこそゆかめやまふきのはな。順
さはみつにかはつなくなりやまふきのうつるふかけやそこにみゆらむ。拾遺

藤

夜深不語中庭立 月照藤花影上階 宿楊家 白
紫茸偏奪朱衣色 應是花心忌憲臺 紫藤花下作 順
漢帝雲膚凝岸額 齊桓衣色洗波聲 紫藤霞染池 源亞將
むらさきのくもとそみゆるふちのはないかなるやとのしるしなるらむ。四條大納言
ふちなみのかかれるきしのまつはおひてわかむらさきにいかてさきけん。順

夏

更衣

獨騎善馬倚鐙穩 初着單衣支體輕 早夏朝詠 白
絳衣新製幾千襲 咲殺伶倫竹與絲 菅家萬葉集

さくらいろにそめしころもをぬきかへてやまほとときすけふはまつかな。泉式部

首夏

長恨春歸無覓處 不知轉入此中來 大林寺桃花言 白
林蘿深處趁清涼 移榻開襟夏日長 早夏閑詠 齊名
さかきとるうつきになれはかみやまのならのはかしはもとつはもなし。好忠

夏夜

日長夜短懶晨興 夏漏遲明聽郭公 菅家萬葉集
月沈蘋藻銀鈎影 風觸松杉玉軫聲 池樹消暑 田忠臣
水煙半濕綺羅冷 山月初昇樓閣明 夏夜池臺即事 儀同三司
なつのよはうらしまの子かはこなれやはかなくあけてくやしがるらむ。中務
なつのよはまたよひなからあけぬるをくものいづこにつきやとらん。深養父
まつほとになつのおいたくふけぬれはをしみもあへすやまのはのつき。道濟

端午

五月菖蒲素得名 每逢五日已成靈 菅家萬葉集

あしひきのやまほとときすけふとてやあやめのくさのねにたててなく。延喜御製
くらふへきこまもあやめのくさもみなおなしよとのにひけるなりけり。輔尹

納涼

緑竹掛衣涼處憩。清風展簟困時眠。池上即事 白

熱惱漸知隨念盡。清涼常願與人同。避暑 白

桂月清明夏迎一霄之秋。松風蕭颯晴聞百尺之雨。和歌序 明衡

君蓄風情炎處冷。我垂霜鬢夏中秋。納涼 善相公

銜秋水上千巖冷。礙日林間六月寒。避暑 橋直幹

扇忘嶺鶴歸嵐翅。簟滑隣鷄報月音。曉夕多清涼 江時棟

そまかはのいかたのとこのうきまくらなつはすすしきふしとなりけり。好忠
なつやまのならのはそよくゆふされはことしもあきのこころこそすれ。源頼綱

花橘

珠顆形容隨日長。瓊漿氣味得霜成。百橘書懷 白

盛夏花留三伏雪。嚴冬子熟一株金。題橘樹 齊名

やとちかくはなたちはなほりうつしむかしをこふるつまとなりけり。花山院
さつきやみそらなつかしくほふかなはなたちはなにかぜやふくらん。相模

晩夏

日催鳥羽炎暉去。風報金商氣味幽。但喜煩暑避 以言

おほあらしのもりのしたくさしけりあひてふかくもなつのなりにけるかな。忠峰
なつとあきとゆきかふそらのかふひちはかたへすすしきかせやふくらむ。躬恒

蓮

露深半染眠沙鶴。風冷纔薰戲藻魚。荷香漸歇 齊名

落流濃色秋風脆。打岸寒聲晚浪香。秋水落芙蓉 中書王

淵客紆緋應自輕。波臣衣錦欲何歸。蓮浦落紅衣 保胤

いかにしてはちすのなかにやとるらんよをうきはにはすむひともなし。六條宮

郭公

四五月交雲外語。一二三更後雨中音。四條大納言

みやまいててよはにやきつるほとときすあかつきかけてこゑのきこゆる。兼盛

ねぬよこそかすつもりぬれほととときすきくほともなきひとこそにより。小辨
みやこひとねてまつらめやほとときすいまそやまへをなきてすくなる。傳大納言母

螢

翠箔燈籠秋耿耿暗螢穿竹見
碧雲星透曉煌煌一條院御製
蘭蕙香邊飄不濕螢飛白露間
兼葭渚誤珠還浦菅三品
竹葦村驚燈映虛螢飛白露間
いさり火のまかへるかはと見えつるはなみのよるてふほたるなりけり。惟盛
おともせてみさをにもゆるほたるこそなくむしよりもあはれなりけり。重之

蟬

邕郎死後罷琴聲菅家萬葉集
可憐松蟬兩混并
岸柳綠前驚欲認初蟬繞一聲
宮槐風底失何尋一條院御製
響絕紅露殘榿下雨餘蟬聲歇
吟空綠重老槐間保胤
秋去秋來聞不改齊名
今年聲似去年聲
せみのこゑきけはかなしななつころもうすくやひとのならんとおもへは。友則
つれもなきなつのくさははにおくつゆをいのちとたのむせみのはかなさ。讀人不知

秋

立秋

涼颯忽扇物先哀應是為穉氣早來
壁葦家音始亂已上菅家萬葉集
叢蘭處處藥初開
夜深月桂孤輪影立秋作
秋淺風槐一葉聲都在中
にはかにもかせのすすしくなりぬるかあきたつ日とはむへもいひけり。讀人不知
かはかせのすすしくもあるかうちよするなみとともによあきはたつらむ。貫之

早秋

穉來六日未全秋七月六日
白露如珠月似鈎菅家
白氏書中收夏部早秋
誰家集裏閱秋詩田忠臣
初一葉風穿骨入早秋詩
第三伏汗謝身分菅輔昭
あさちはらたたままくすのうらかせにうらかなしかるあきはきにけり。惠慶法師
なつころもまたひとへなるうたたねにこころしてふけあきのはつかせ。安法師

七夕

今霄織女渡天河、朧月微雲一似羅。

白

宮人懷私之願、似面不同。墨客乞巧之情、隨分應異。

代牛女惜曉更野美材

爭教七夕縮爲六、更課秋風計會新。

七月六日代牛女言志齊名

泣計露珠叢底裏、愁望月鏡嶺西含。

牛女惜夜闌以言

雲霞帳卷風消息、烏鵲橋連浪往來。

乞巧屏風藤相公

似告前行臨浪夕、欲迷歸路隱雲秋。

月爲渡河媒菅忠眞

ちきりけんころぞつらきたなはたのとしにひとたひあふはあふかは、友則

たなはたのくものころもをひきかさねかへさてぬるやこよひなるらむ。瓶河石大臣

いたつらにすぐる月日をたなはたのぬるよのかすとおもはましかは、惠慶

秋興

秋風一箸鱸魚膾、張翰搖頭喚不歸。

白

山水秋深、若雲夢者有八九、煙嵐日暮、記風物以難一一。

大井川和歌序江匡衡

涼風寫得巖松韻、暮雨偷將瀧水聲。
荒院珠簾閑卷色、遠營風旆重翻聲。
踏露路迷紅葉色、迎風衣染紫蘭香。
林梢鴈陣穿秋霧、山脚人家帶夕陽。
露滴暗叢螢火濕、風吹曲岸鷺絲寒。

賦秋思野美材
秋涼風露冷以言
嵯峨秋望爲時
已上嵯峨秋景爲時
林池秋興以言

秋晚

入樓早月中秋色、遶郭寒潮半夜聲。

方干

ひとりるてなかむるやとのをきのはにかせこそわたれあきのゆふくれ。道濟

秋夜

早菘鳴復歇、殘燈消又明、隔窓知夜雨、芭蕉先有聲。

秋夜白

梁鷄栖而遲唱、笛吹向子期之隣、漢月臨而難傾、砧怨楚屈原

之舍。

對月多遠情齊名

暗風颺幌影，殘溜滴階聲。壯齒今何在，終霄動故情。秋夜 後中書王

宮漏高低風北送，隣砧緩急月西傾。後中書王

枕欹隣笛清商曲，窓對前林暗淡紅。漫秋夜長 後中書王

萬事皆非燈下淚，一生半暮月前情。漫漫秋夜 長國

上陽宮裏天難曙，散騎省頭夢易驚。秋深知夜長 藤有信

くさのうへにおきこそあかせあきのよのつゆにことならぬわかみとおもへば。能宣
ながしともおもひそはてぬむかしよりあふひとからのあきのよなれば。躬恒

十五夜 付月

花陽洞裏秋壇上，今夜清光此處多。八月十五夜 白

長安十二街，皆踏萬頃之霜。高宴千萬處，各得一家之月。

同題映池秋月明 善相公

三十五名之星墜，遙浮於水鏡之面。五萬四千之土壤，自化氷壺之心。八月十五夜清光千里同席 都在中

螢火幽光消不見，驚絲寒色混難尋。八月十五夜池邊賞月 橋正通

晝夜和同迷漏刻，乾坤洞朗照玄黃。十五夜觀月 後中書王

南門曉到東西路，八月秋深十五天。同題 以言

琴詩酒客千家思，三十六旬一夜情。八月十五夜 四條大納言

いつとともつきみぬあきはなき物をわきてこよひのめつらしきかな。好忠

月

親故適回駕，妻奴未出關。鳳凰池上月，送我過商山。白

老住香山初到夜，秋逢白月正圓時。白 初入香山院對白月

從今便是家山月，試問清光知不知。白 野草霜深。望月遠情多 齊名

吳人棹而高歌，江波水潔祚馬嘶而欲惑。齊名

商人棹雪歌漁浦，老將踏霜立戎樓。同詩 齊名

遊子不歸鄉國夢，明妃有淚塞垣秋。同題 源孝通

砧添鄉淚孤營外，鶴照臯聲一舉中。山川千里月 輔昭

陶君門舊秋霜鏤，陳后閨疎曉雪深。月朗夜自閑 明衡

鄉國眇茫孤戎曉 生涯零落五湖秋。
月明羈旅中 江佐國
 鄉淚灑霜孤館曉 客夢驚雪我樓秋。
同題 藤行家
 蓋嶺絃聲調白雪 硯亭碑字書秋霜。
夜月照泉石 藤季綱
 楚臺風度吹秋雪 魏闕天明倒曉霜。
明月照衣衿 江隆兼
 銀漢無雲蘿洞曉 爐峰有雪草堂秋。
山中夜月明 時綱
 ひとりるてつきをなかむるあきのよはなにことをかはおもひのこさん。後中書王
 なかむるにものおもふことのなくさむはつきはうきよのほかよりやく。大貳高遠
 すむひとのなきやまさとの秋のよはつきのひかりもさひしかりけり。遍照寺秋月 藤範永

九日 付菊

蟋蟀聲寒初過雨 茱萸色淺未經霜。
九日 白
 芬芳染屑 然後知中腸之已飽 氣力補性 然後期天年之難終。
觀群臣賜菊花 紀家
 賜在帝恩含湛露 出從天意混流霞。
同題 紀家
 便採孤叢秋露種 非祖五柳曉雲孫。
同題 菅家

なか月のここのかことにつむきくのはなもかひなくおいにけるかな。 躬恒

菊

九月廿七日、孰不謂之盡秋、孤叢兩三莖、孰不謂之殘菊。
秋盡殘菊 菅
 菊是孤叢臣、數代戴霜、共立玉欄前。
殘菊應製 清慎公
 東籬方遇南薰主、最弟被知季曆兄。
菊是花聖賢 以言
 范蠡長男九草老、韋賢少子一叢殘。
菊爲花最弟 佐國
 粧誤岷山金骨相、葩迷姑射雪膚名。
菊開似愚仙 藤敦宗
 恒娥夜夜應偷艷、方士年年欲採粧。
菊花爲上 藤知家
 道士試嘗寒岸露、仙雞誤舐曉籬霜。
同題 有信
 あさまたきやへさくきくのここのへに見ゆるはしものおけるなりけり。長房卿
 めもかれすみつつくらさんしらすくのはなよりのちのはなしなければ。伊勢大輔

九月盡

一年云暮、窮秋纔留於半日之間、百卉盡零、殘菊猶開於繁霜、
願殘菊九月盡 紀家
 之後。

那堪漸漸鐘聲暮、挑盡寒燈夜半花。同題九月盡 紀家
路非山水誰堪趁、跡任乾坤豈得尋。秋欲欲可歸 後朱雀院御製
みやまよりおちくる水のいろみてそあきはかきりとおもひしりぬる、興風
をしめともたちもとまらぬ物ゆゑにたゆげにまねくはなすすかな。好忠

女郎花

一叢百朶入穠發、黃色花中無比方。庭前女郎 在列
天生花麗粧還冷、地與英靈色方黃。翫女郎 以言
ひくらしにみれともあかぬをみなへしのへにやこよひたひねしなまし。長能
をみなへしかけをうつせはこころなきみつもいろなるものにそありける。堀河右大臣

萩

一秋有藥號芽花、麝子鳴時此草奢。菅家萬葉集
あきかせはすすしくなりぬこまなへていさ野にゆかんはきのはなみに。菅家萬葉集
ぬれぬれもあけはまつみんみやきのものとあらのはきやしをれしぬらん。長能

蘭

波勾遠覺吹秋水、雨染高和動暮雲。蘭氣入輕風 菅三品
魏宮名顯三臺月、燕夢子傳萬代風。蘭以香爲貴 以言
爲深爲淺風聲暗、何紫何紅露影秋。夜蘭不辨色 以言
やとりせしひとのかたみにふしはかまわすれかたきかにほひつつ。貫之

槿

籬薰殘槿抽紅濕、池馥早荷與玉翻。秋露草花香 保胤
おきてみんとおもひしほとにかれにけりつゆよりけなるあさかほのはな。好忠
ありとてもたのむへきかとの中をしらするものはあさかほのはな。泉式部

前栽

西宮南内多秋草、落葉滿階紅不掃。長恨歌
子月齊名傳早艷、南風裁織領新粧。秋花先秋開 後中書王
榮枯大底任園露、早晚由來屬野煙。秋花次第開 一條院御製
みとりなるひとつくさとそはるは見しあきはいろいろのはなにそ有りける。古今、忠峰

紅葉

紅葉又紅葉、連峯之嵐淺深、蘆花又蘆花、斜岸之雪遠近。

大井河和歌序
源道濟

紅林定有重青日、素髮應無更綠春。

霜葉滿林紅
菅三品

紅葉嵐深窓暗雨、蒼花日暮鬢寒霜。

法炎寺之志
匡衡

山雲秋後隔霜觸、野客朝來穿錦斟。

落葉埋泉石
後三條院

いかなれはおなししくれにもみちするははそのもりのうすくこからん。堀内右大臣
いつくにかこまをととめんもみちはのいろなるものそここなりける。長能

落葉

落葉俟微風以隕、風之力蓋寡、孟嘗遭雍門而泣、琴之感已未。

蒙士賦序、文選
陸士衡

征馬鳴珂、秋踏仙家之雪、宿禽斂翅、夜栖一枝之風。

落葉賦
齊名

寒猿抱木唯携月、暮鳥歸林不宿紅。

葉下風枝疎
順

潭色變來秋月後、浪文燒盡暮煙中。

落葉泛寒流
順

瑠璃色變難籠月、纈纈花寒被織風。

落葉水初紅
英明

莓苔變綠林間露、麋鹿踏紅洞裏秋。

山深落葉多
長國

虛澗嵐颺山未曙、空階雨脆月初傾。

夜深聞落葉
藤有信

こからしのおとにしくれをききわかてもみちにぬるたもととそみる。後中書王
やまふかみおちてつもれるもみちはのかわけるうへにしくれふるなり。嘉言
このはちるやとはききわくことそなきしくれするよもしくれせぬよも。落葉如雨
源賴實

鴈

江柳影寒新雨地、塞鴻聲急欲霜天。

贈江客
白

夢中鄉信驚秋鴈、窓下林聲帶夜蟬。

偶作
楊巨源

鴻聲斷續暮天遠、柳影蕭疎秋日寒。

李順

若耶風北來賓響、沙漢日西逆旅聲。

暮天聞遠鴈
時棟

驚弓斜避三更月、引櫓遙過萬里雲。

幾行寒鴈去
村上御製

便混商風添雅韻、遙辭朔土入琴聲。

鴈遠如琴
時綱

さよふかくたひのそらなるかりかねはおのかはかせやよさむなるらむ。伊勢大輔

歸雁

數重影底橋南絕、一片膚中字北飛。歸雁踏春雲、藤有見

蟲

草間蟲響臨秋急、山裏蟬聲薄暮幽。早秋山中作

野煙秋深任馬蹄而優遊、叢露日暮尋虫聲而徙倚。和歌序、成國

絡絲響冷秋夢短、飲露聲幽晚思深。養思蟬聲滿耳秋、保胤

吟急殘燈光正背、夢驚孤枕淚難乾。蟋蟀近床聲、以言

嬌閨枕冷吟風曉、孤館夢殘怨雨秋。夜閉只聞蛩、彌河右大臣

かしかましのもせにすたくむしのねにわたたにものをいはてこそおもへ。
なげやなげよもきかもとのひきかへるすきゆくあきはけにそかなしき。好忠

鹿

秋山寂寂葉零零、麋鹿鳴聲屢更聆。菅家萬葉集

憶嶺鹿歸溪霧底、卜林鳥入夕陽端。嵯峨秋野望、高相如

しかのねそねさめのとこにきこゆなるをのくさふしつゆやおくらむ。家經

つゆむすふはさかしたはやさむからんあきののはらにをしかなくなり。相模

露

看取風流何所似、瑠璃盤底水精丸。荷上露、高五常

蒼葭夜色添銀液、翠竹秋粧任玉裝。白露疑、慶幾

なきわたるかりのなみたやおちつらむものおもふやとのはきのうへのつゆ。古今
わかそてにつゆそおくなるあまのかはくものしからみなみやこすらむ。後撰

霧

淺深猶暗千峯曉、濃淡難分五里朝。秋霧籠紅樹、源相方

あつまちにいりにしひとのこひしきにあふさかやまはきりこめてけり。惟成
とりつなけみつののはらはなれこまよとのかはきりあきははれしな。長能

擣衣

賓鴈繫書飛上林之霜、忠臣何在寡妾擣衣泣南樓之月、良人

未歸。顧文

擣自金廳秋暮冷、催於素月夜來晴。擣衣得贈鄰、都在中

色争霜葉辭林色、聲混雲鴻出塞聲。擣衣持贈隣 都在中
 客路霜乾秋韻遠、嬌閨雪冷曉聲寒。擣衣明月中 菅在良
 雪中絶盡幽人夢、霜後添來旅鴈聲。月前聞擣衣 藤友房
 うたたねによやふけぬらんからころもうつこゑたかくなりまさるなり。藤兼房

冬

初冬

霜輕未殺萋萋草、日暖初乾漠漠沙。初冬 白
 清洛曉光鋪玉簾、上陽霜葉剪紅綃。劉禹錫
 四五株楊經雨色、兩三叢菊飽霜花。蕭疎秋後色 齊名
 あしのはにかかれてすみしつのかのこやもあらはにふゆはきにけり。貫之

冬夜

爐火欲消燈欲盡、夜長相對百憂生。冬至 白
 夜衣漸識千山雪、曉視初諳四海寒。桶在列

しもおかぬそてたにさゆるふゆのよはかものうはけをおもひこそやれ。四條大納言

歲暮

卷簾松竹雪初霽、滿院池塘春欲廻。劉禹錫
 急於流水無廻浪、去似奔車幾轉輪。花開年暮 後江相公
 あはれにもくれゆくとしのひかすかなかへらんことはよのまなれども。相模

爐火

心灰不及爐中火、鬢雪多於砌下霜。冬至夜 白
 碧氈帳上正飄雪、紅火爐前初炷燈。夜招晦叔 白
 遠憐珠砌銀華亂、近愛黃家獸炭馴。愛火還憐雪 順
 はひにのみくたくこころをいかにせんかきあらはさぬよはのうつみひ。相模

霜

寒月曉殘、期皎潔於花表之頂、初陽旦照、守淒清於瓦溝之中。

青女司霜賦 紀家

林巒織着黃絲纈、沙渚瑩來白水精。早霜 菅家
 寒鳴自應三危結、暗落先和五夜清。鐘聲應夜霜 紀家
 寒鞭駟去紅難駐、曉刃裁來錦不完。霜圍落葉多 中書王
 うちはらふとこねならねはをしとりのうはけのしももけさはさなから。泉式部

雪

秦客訪花驚出洞、庾公看月誤登樓。瓶雪 何玄
 班姬秋扇已亡色、孫子夜書獨有明。早雪 弘仁御製
 闇夜猶行明月地、人間却踏白雪天。禁中雪 田忠臣
 胡塞嘶花遙去馬、巴山歌月遠行人。雪飛千里外 爲時
 地白猶迷停午影、山明不信落西光。江都督
 やまさとはゆきふりつみてみちもなしけふこんひとをあはれとはみむ。兼盛
 まつひとのいまもきたらはいかかせんふままくをしきにはのゆきかな。泉式部
 ゆきふかきみちにそしるきやまさとはわれよりさきにひとこさりけり。藤經衡

氷

石髮近來風未櫛、水衣黏後浪難縫。輕氷含岸苔 爲政
 光難鑿古春消處、背似有龍魚負程。水面氷如鏡 第三親王
 いはまにはこほりのくさひうちてけりたまるのみつもいまはもりこず。好忠

春氷

春來日暖危心立、曉後霜凝躋足行。覆薄氷 橋贈納言
 長河暗泮孤聞急、古渡偷穿馬踏危。春氷氷解 紀家
 はるかせにさはのこほりやとけぬらんけさやまかはのみつまさりけり。具平親王

霰

念佛山僧驚舍利、名醫道士恠銀丸。白微霰 菅家
 たけのはにあられふるよのさむけきにひとりねなんものとやはおもふ。馬内侍

佛名

道場夜半香花冷、猶在燈前禮佛名。白
 懺拋業障氷消地、破却無明日上天。眞春通
 としのうちにつもれるつみはかきくらしふるしらゆきとともにきえなん。貫之

ゆきつもる^{原を}おのかとしをはしらすしてはるをはあすときくそうれしき。重之

(上巻終)

新撰朗詠集 卷下

雑

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|------|------|-------|-------|-------|----|----|----|-----|----|----|--|
| 風 | 雲 | 晴 | 曉 | 松 | 竹 | 草 | 鶴 | 猿 | 管絃 | 文詞 | 酒 | 山付山水 | 水付漁父 | 禁中 | 故京 | | | | | | | | |
| 故宮付古宅 | 仙家付道士隱倫 | 山家 | 田家 | 隣家 | 山寺 | 佛事 | 僧 | 閑居 | 眺望 | 餞別 | 行 | 旅 | 庚申 | 帝王付法皇 | 親王付王孫 | 丞相付執政 | 將軍 | 刺史 | 詠史 | 王昭君 | 妓女 | 遊女 | |
| 老人 | 交友 | 懷舊 | 述懷 | 慶賀 | 祝 | 戀 | 無常 | 白 | | | | | | | | | | | | | | | |

風

雲霧輕身

窺列子之云駕

潞泝授手

問宋人之不龜

清風戒寒序 菅家

沙鷗之眠易驚

陸惠曉之柳拂地

浦月之影漫動

孫子荆之枕

揚波

水岸清風至 齊名

迎晴拂盡墻陰雪

解凍翻來岸曲波

風度請春慮 後中書王

枕冷唐妃專幸裏

襟飄魯聖以思程

有風終夜涼 以言

はなのいろはかすみこめてみせすともかをだにぬすめはるのやまかせ。遍昭 わかせこかきまさぬよひのあきかせはこぬひとよりもうらめしきかな。好忠

雲

月知溪靜尋常入

雲愛山高且暮歸

懷舊 齊名

聚散隨身非出岫

低昂逐步豈由風

觀雲知隱 善相公

戀石唯念初觸色

離溪不忘昔栖心

行雲思故鄉 庶公

橫嶺晚雲紅慘愴

落湍秋水白潺湲

宇治別業即事 藤同三司

あまのはらはるはことにもみゆるかなくものはたてもいろまさりけり。菅家萬葉集

晴

雲際日光分萬井

煙消山色露千峰

元

天台嶺前四十五尺之泉曝布

洛陽城外三十六峰之黛聯綿

山晴眺望多 齊名

野鶴一冲晴後失

塞鴻數點望中銷

高天澄遠色 村上御製

應分一舉鶴毛羽

欲計數行雁弟兄

天秋無片雲 保胤

金風吹拂青山極

銀水洗除碧海吞

同題 以言

あまのかはあふきのかせにきりはれてそらすみわたるかかささきのはし。元輔

曉

愁思婦於深窓

輕紗漸白眠幽人於古屋

暗隙纔明

曉眠 謝觀

上陽宮裏曉鐘後

天津橋頭殘月前

曉上天津橋 白

孤帆飛而不留

黃石公授履之後

五馬嘶而欲去

孟嘗君出關

之程

客別期曉 後生

聞鐘起問山高卑

隔燭看迷鴈後先

曉色未分明 尤真

星翻空拂槿花露 月落暗聞蘆葉秋。
清風臨曉來 明衡

松

澗底松搖千尺雨 庭前竹撼一窓穉。
杜荀鶴
搖窓竹色留僧語 入院松聲共鶴聞。
揚巨源
秦皇泰山之雨 風消黃雀之跡 周穆長坂之雲 汗收赤驪之溝。

松聲當夏寒 以言

秦爵琴聲調白雪 吳人劍色掛秋霜。
夜月照寒松 明衡

沙雨荷開交蓋影 汀風魚躍誤琴聲。
松綠臨池水 有信

すみよしのきしのひめまつひとならはいく世かへしとはましものを。業平
おほはらやをしほのやまのこまつはらはやこたかかれちよのかけみん。貫之
ゆくすゑのしるしはかりにのこるへきまつさへいたくおいにけるかな。道濟

竹

西叢七莖勁而健 省向天竺寺前石上見 東叢八莖疎而且寒。

憶曾湘妃廟裏雨中看。
畫竹歌 白

千花萬草凋零後 留向紛紛雪裏看。
白

柯亭月閑雲遏蔡氏之曲 蘭臺日暮風舞宋玉之詞。
辨松竹策 以言

長竿冒雪白龍蟠 能蘊虛心獨苦寒。
庭見竹雪 良春

たけのよもわが世もいたくおいにしをうらはさはさやにもおけるしもかな。菅家

草

苟令見君應向我 爲言秋草閉門多。
白

消盡雪青湖寺路 霽來煙綠洞庭砂。
遠草初含色 輔昭

湖邊人踏三分綠 塞外馬嘶一道煙。
同題 齊名

楓松堤是菰蔣地 木落秋還岸暗春。
草長江湖春 以言

吳郡望青風放馬 杭州道綠月行人。
以言

なつくさはむすふはかりになりにけりのかひのこまはあくかれぬらむ。重之
おほあらしのもりのしたくさなつくればかるひとなしにしけるころかな。忠峰

鶴

花亭風裏 依依鶴唳猶聞 巴峽雨中 悄悄猿啼已息 觀謝

望迴翔於蓬島 霞袂未逢 思控馭於茅山 霜毛徒老 鶴鳴九阜 藤雅材

蘭岸月冷聲彌亮 蕙帳雲空怨幾殘 霜天聞野鶴 順

初疑波面孤雲宿 更誤沙頭片月殘 波澄鶴影浮 保胤

穉雲歸洞千年駕 白日昇天一舉情 鶴是作仙禽 前都督

わすれてもあるへきものをあしはらにおもひいつるのなくそかなしき。

あしたつのたてるかはへにふくかせはよせてかへらぬなみかとそみる。貫之

猿

巴峽猿聲催客淚 銅梁山翠入江樓 李嘉祐

吳岫雨來溪燕浴 楚江雲晴嶺猿吟 許渾

峽裏猿鳴悲又清 况聞薄暮第三聲 善家

臨水館連江鴈翼 枕山樓入峽猿聲 秋宿池館 直幹

あきやまのかひにみかへりなくさるをよふかくききてそてそひちぬる。

管絃

間關鶯語花底滑 幽咽泉流冰下難 琵琶引 白

絃中恨起湘山遠 指下情多楚峽流 蘇替

秋月夜閑聞案曲 金風吹落玉簫聲 金吾卿

畫扇月落 秋調白雪之聲 青玉燈殘 風傳昭花之曲 管絃臨曉清 衡

寡鶴怨長夢自斷 寒鳥啼苦 漏猶深 寒夜撫鳴琴 天曆御製

入松風響春吹夢 落峽泉聲暗灑心 同題 笠雅望

あきのよはひとをしつめてつくつくとかきなすことのねにそなきぬる。是貞親王

文詞

收百代之闕文 採千載之遺韻 觀古今於須臾 撫四海於一瞬

文賦 陸士衡

聲聲麗曲敲寒玉 句句妍詞綴色絲 白

春霞秋月潤艷流 於言泉花色鳥聲 鮮浮藻於詞露 新撰和歌集序 紀貫之

我聞相如瞻文 家徒四壁立 又聞孫弘高才 年此八旬行 老閑行 菅三品

文路春行看不足 詞林秋望老彌深 未飽風月思 儀同三司

虛無責得林花色、寂寞求來谷鳥聲。詩情破動春以言
班扇長襟秋不盡、楚臺餘味老彌深。寒夜撫鳴琴天曆御製

酒

香醅淺酌浮如蟻、雲鬢新梳薄似蟬。花酒白
能消忙事成閑事、轉得憂人作樂人。家釀白
酒軍在座、菟園之露未晞、僕夫待衢、鷄籠之山欲曙。望月遠情多齊名
菓則玄圃之梨、折西枝兮置机、酒是青州之竹、酌上葉而滿樽。

寒花爲客裁江匡衡

縱無醉面將桃競、暫有愁眉與柳開。逢花傾一盃保胤
荆籬客醉斜吹菊、柴戶人稀緩酌蘭。戴酒訪幽人庶幾
人喜樽中春氣湛、鳥思盃底晚香分。花氣酒中新篤茂
杜康昔構容人息、陶令重來寄我生。惟以酒爲家後中書王
藍水應無冰返思、玉山唯有雪消情。依醉忘天寒國成

めつらしきひかりさしそふさかつきはもちなからこそちたひめくらめ。紫式部

山 付山水

千峯黛色因晴出、百谷泉聲欲暮空。賀蘭遂
煙消茶竈厨兒睡、日落松巖野鶴留。山閑人事少齊名
鹿鳴猿叫孤雲慘、葉落泉飛片月殘。秋聲多在山後中書王
巫女嶺南行雨冷、鄭公谿北遠嵐餘。暮山景氣寒
はるはもえあきはこかるるかまとやまかすみもきりもけふりとそみる。重之
おもひてもなきふるさとのやまなれとかくれゆくはたあはれなりけり。嘉言

山水

左據函谷二嶠之岨、表以太花終南之山、右界褒斜隴首之嶮。ハ、ヨル、カン、ジ、カウ、サガシキニ、アラハスニテセリ、シウ、ノ、ハ、サカフ、ホウ、リョウ、ケンキニ
帶以洪河涇渭之川。メグルニセ、カウ、ケイ、イ、ヲ、西都賦班孟堅
墨水澄時潭底出、白雲破處洞門開。ヒラケタリ白
尼父之一望也、歎龜山之蔽魯、靈均之五顧也、繞沅湘而傷楚。

菟裘賦中書王

張博望之到牛漢之跡辨山水策

沂十萬里之濤

伯司空之鑿龍門

遺二千年

松江月落漁舟去

蘿洞雲開隱逕深

雨暗山河清 藤雅材

客帆有月風千里

仙洞無人鶴一雙

江山此地深 莊雅成

潭心月映金波漲

嶺面雲開翠黛纖

晴後山河清 入道大納言

舟隨彭蠡鴈聲去

馬踏嶧陽桐葉行

秋色變山水 源右相府

滄浪歌白雪飄曉

雲雨夢香風脆春

花落江山裏 江澄兼

あしひきのやましたみつのこかくれてたきつこころをせきそかねつる。伊勢

水 付漁父

影浸南山青滉漾

波沈西日紅齋淪

昆明春水滿 白

石竇寒泉秋眼泣

銀河晴色曉顏清

池亭宴飲 都良香

只照形容難照思

含情空問影中人

監山水 紀家

青草湖圖波寫得

白蘋洲樣岸相傳

林池晚望 英明

細浪砂來填鷺跡

喬枝日落入蟬聲

在林池 在列

舉帆往反秋風送

轉棹東西夜月隨

釣魚翁 善家

傾得菰蘆三數酌

高歌不信有公卿

漁父 保胤

洲蘆浪碎驚花白

岸樹日藏省葉紅

水氣先秋冷 以言

潯陽楓葉帶霜碎

蓋嶺泉聲穿雪流

明月照江山 前都督

きみかよにあふくまかはのみつきよみそこにそ見ゆるよろつよのかけ。入道殿 世にすまはまたもみにこんおほはらやおほろのしみつおもかはりすな。能宣

禁中

五夜漏聲催曉箭

九天春色醉仙桃

白

渚宮東面煙波冷

浴殿西頭鐘漏深

八月十五夜禁中對月 白 崔贍

九重城裏春來早

百尺樓頭日落遲

崔贍

殿庭之甚幽

咲嵩山之逢鶴駕

風景之最好

嫌曲水之老鶯花

春娃無氣力 菅家

通籍重門

踏彩霞而失步

登仙半日問青鳥而知音

同題 菅家

仙籍是重

暫降蓬萊萬里之雲

高材不拘

誰待豫樟七年之日

松竹策
以言

いにしへのならのみやこのやへさくらけふこのへにほひぬるかな。伊勢大輔
このへのうちたにあかきつきかけにあれたるやとおもひこそやれ。爲政

故京

雙鳳北歸山寂寂 六龍西幸水滔滔 望花清宮 許渾

ふるさととなりしならのみやこにもいろはかはらすはなはさきけり。古今、奈良帝

故宮 付古宅

石崇之門客長辭 水流金谷 魏帝之宮人已散 草滿銅臺 愁賦 公乘憶

新豐樹老籠明月 長生殿閣鏤黃昏 過天寶康明人 白

粧閣妓樓何寂靜 柳似舞腰池似鏡 兩朱閣 白

隱映朝霧之斷時 南流鷗浴 朦朧秋月之傾處 西堂人稀 河原院賦 源爲憲

今來忝避人間暑 此處仙皇昔待風 河原院銅臺避暑 英明

雲深聖王曾遊處 樹老宮人手種時 望見淳和院感舊 菅家

世事不停江水逝 垂楊空掃舊門欄 過藤相公舊宅 保胤

屋舍大荒非舊日 主人一去幾春風 過江州舊宅 保胤

きままししむかしはつゆかふるさとはなみることにてのぬるらむ。貫之
すたきけんむかしのひともなきやとにたたかけするはあきのよのつき。惠慶
あさはらはぬしなきやとのさくらはなこころやすくやかせにちるらむ。惠慶

仙家 付道士隱倫

開雲種玉嫌山淺 渡海傳書怪鶴遲 嵩丘麻道士 盧倫

金殿月中看擣藥 玉樓風裏聽吹笙 章孝標

玉池露冷芙蓉淺 金井煙分薜荔疎 許渾

四九三十六之天 丹霞之洞高開 八九七十二之室 青巖之石

削成 神仙策 都長香

夕巖苔靜稀人到 曉洞花飛見鶴遊 勾曲山屏風 菅三品

境傳方術長看雪 籬隔乾坤豈怕霜 仙家菊新殘 後三條院

藥欄日霽曝秋雪 雲碓水恩春曉霜 仙洞菊花多 孝定

ふるさとはみしこともあらずをののえのくちしところそこひしかりける。友則

隱倫

堯稱^{カフ}天^ト而^リ不^レ屈^{クツ}穎^{ヘン}陽^ノ之^ノ高^キ 武^ブ盡^{セド}美^ミ矣^ヤ 終^ニ全^ク孤^コ竹^ノ之^ノ潔^{イサ} 逸民傳論翹 范蔚宗
 蕙^{クイ}帳^{シウ}空^ク兮^ヤ夜^ノ鶴^ウ怨^ミ 山^シ人^ノ去^テ而^{シテ}曉^キ猿^ノ驚^コ 請^コ廻^ク俗^ノ士^ノ之^ノ駕^ガ 爲^メ君^ノ謝^セ逋^ホ
 客^{カク} 北山移文 孔德璋

明^{メイ}主^ノ十^{シウ}徵^シ何^ニ謝^シ病^ヲ 煙^{エン}霞^カ不^レ許^ス作^シ堯^ノ臣^ト 朴昂
 孤^コ竹^ノ二^ニ子^ノ之^ノ去^ク周^ヲ 春^{チウ}蕨^ノ煙^ノ老^{タリ} 五^イ柳^ノ先^ノ生^ノ之^ノ遁^ン普^ヲ 秋^{キウ}菊^ノ霜^ノ寒^シ

於天台圓明房月前閑談 以言

漢^{カン}四^シ皓^{カウ}雖^レ出^ト 應^{ヨウ}曜^ノ獨^リ留^リ於^ニ淮^ノ陽^ノ之^ノ雲^ニ 堯^{タビ}三^{シウ}徵^シ不^レ來^ズ 許^{キョ}由^ノ長^ノ棲^リ於^ニ
 穎^{ヘン}水^ノ之^ノ月^ニ 法性寺大相國辭表 江匡衡
 心^{シン}地^ノ早^キ銷^ス方^ノ寸^ノ火^ヲ 鬢^{ヒン}霜^ノ鎖^レ帶^ノ數^ノ莖^ノ秋^ヲ 訪鄭處士 江相公
 おちつもあるくちはかしたのみなしくりなにかはひとにありとしられん。

山家

雲^{ウン}生^シ澗^ノ戸^ノ衣^ノ裳^ノ潤^ム 嵐^{ラン}隱^ン山^ノ厨^ノ火^ノ燭^ノ幽^ク 香爐峰下ト新居 白

寂^{シク}寞^{モク}柴^ノ門^ノ人^ノ不^レ到^ル 空^{クウ}林^ノ獨^リ與^ニ白^ノ雲^ノ期^ス 王維
 窓^{ソウ}東^ノ早^キ月^ノ當^ニ琴^ノ榻^ニ 牆^ノ上^ノ秋^ノ山^ノ入^リ酒^ノ盃^ニ 方干
 夕^{セキ}陽^ノ山^ノ影^ノ穿^リ窓^ノ入^リ 幽^{ユウ}澗^ノ泉^ノ聲^ノ向^テ戶^ノ飛^ブ 山雲齊喜春 嵯峨御製
 門^{メン}出^テ水^ノ脣^ノ春^ノ浪^ノ齧^ム 路^ノ從^テ溪^ノ口^ノ暮^ノ雲^ノ穿^ル 紀
 山^{サン}開^キ畫^ノ障^ノ當^ニ窓^ノ立^チ 水^{スイ}亂^レ羅^ノ父^ノ繞^リ座^ノ流^ル 山居 田忠臣
 煙^{エン}藏^シ古^ノ竹^ノ風^ノ中^ノ色^ニ 雲^{ウン}領^リ飛^ノ泉^ノ洞^ノ裏^ノ聲^ニ 幽居春日 菅三品
 草^{ソウ}創^シ主^ノ人^ノ雲^ノ臥^{シテ}後^ニ 竹^{チク}編^ミ客^ノ舍^ノ雨^ノ隳^ル時^ニ 北山山居 四條大納言
 馬^バ臺^ノ東^ノ西^ノ遠^ク山^ノ路^ニ 賓^{ヒン}閣^ノ南^ノ頭^ノ明^ノ月^ノ地^ニ 右相府白川亭作 儀同三司
 苔^{タイ}庭^ノ木^ノ落^テ紅^ノ無^ク跡^ト 雲^{ウン}碓^ノ月^ノ暗^ク雪^ノ有^リ聲^ニ 山家秋色多 明衡
 土^ト宜^キ酒^ノ熟^ク酌^シ秋^ノ竹^ヲ 松^{ソウ}壩^ノ嵐^ノ寒^ク聞^ク夜^ノ琴^ヲ 白河院作 江家
 やまさとはあきこそことになしけれしかのなくねにめをさましつつ。 忠峰
 このころはききのこすゑもみちしてしかこそはなけあきのやまさと。 上棟門院中將

田家

携^ケ將^シ晚^ノ浪^ノ孤^ノ舟^ノ子^ヲ 染^{ソメ}着^テ秋^ノ風^ノ一^ノ箸^ノ鱸^ヲ 田家作 順

蒲葉露低漁火濕、英明 稻花風起釣絲飛、田家秋意作
 牛休門荻花寒處、高相如 犬吠園林葉落聲、城南別業即事
 綠蘿墻遠田家近、佐國 紅蓼花殘水岸高、同
 秋霧橫峯消鴈陣、都督亞將 夕陽落瀨曝魚罾、同
 をやまたのおくてのいねをかりほしてまもるかりほにいくよねぬらむ。射恒
 やまだもるあきのかりほにおくつゆはいなおほせとりのなみたなりけり。忠峰
 みたやもりけふはさつきになりになりけりいそけやさなへおひもこそすれ。好忠

隣家

阮家南北舊來隣、無墻隣家 不隔墻垣不愧貧、高丘才高
 泉織淡交長有味、隣張隣 樹含芳契豈無情、直幹
 かきこしにみれともかすさくらはなねこめにかせのふきもこさなん。伊勢

山寺

石橋路上千峯月、周元範 山殿雲中半夜燈、夕宿寶塔寺
 鐘聲半夜香山雨、何玄 散入前溪楓葉秋、何玄

香煙出戶、遊山寺 帟窓掩而無人、英明 禪侶向壇、遊山寺 金磬鳴而有響、英明
 岫幌日暮、禪林寺 迎佛之使飛煙、齊名 松戶人稀、齊名 護塔之鳥棲月、齊名
 繩床欲穿、接念山林 月老春蘿之洞、齊名 衲衣易破、齊名 風疎秋桂之峯、齊名
 四禪夜闌、齊名 曉颺飛而山月曙、齊名 三昧秋暮、齊名 霜猿叫而峽煙深、齊名

金峰山願文 江都督

庭松百尺歷年老、秋日遊栖霞寺 山月幾回仍舊圓、儀同三司
 禪定水清寒谷月、遊法性寺 閑伽花落故園霜、四條大納言
 青苔院靜地空老、遊長樂寺 碧樹路深山不童、源右府
 棠梨嶺遠雲霄雪、暮春遊西山 楊柳寺深天祿塵、第三親王
 空假葉飛林雨盡、世尊寺即事 色香菊老岸風芳、孝言
 花色春深林霧底、長樂寺 鐘聲日暮野煙中、敦基
 まてといははいともかしこしはなの山にしはしとなかんとりのねもかな。遍昭
 いはのうへにたひねをすれはいとさむしこけのころもをわれにかさなん。小町

佛事

誕生七步、花承輻輪之跌、苦行六年、魚栖鳥瑟之髻、策文 淳茂
 雪盡氷解之日、伴溪鳥而傳法音、月殘露結之朝、折籬花而供佛界、自筆法花經願文中書王

海風之吹沈香、自供芬芳、河水之汰碎金、暗添嚴飾、聚砂爲佛塔 保胤
 中夜八十之火、假唱鶴林之煙、東方五百之塵、長懸鷲峯之月、

壽命不可量以言

雖一念不捐、似結消露而納秋月、雖闡提能救、如披雲霧而覩

青天、觀音贊 江都督

不厭時時猿一叫、自然日日鳥相馴、寂寞無人聲 保胤

眞如珠上塵厭禮、忍辱衣中石結緣、不輕品 以言

巫女昔夢慙妄想、仙人秋駕隔圓乘、慈意妙大雲 時綱

縱事仙人誰拾地、全教獨覺不觀空、常有花果 藤成家

くらきよりくらきみちにそいりぬへきはるかにてらせやまのはのつき、泉式部
 こころもなるたまともかけてしらすりつるひさめてこそうれしかりけれ、將志着內衣裏 赤染右衛門

わしのやまへたつるくもやあつからんつねにすむなるつきをみぬかな。常在靈鷲山 康實王母

僧

禪衣衲厚雲藏線、壽臈高來霜印眉、贈老僧 杜荀鶴

齊後將何充供養、西軒泉石北窓風、白 王魯俊

清泉繞屋澄心遠、曙月銜山出雲遲、

昔隋煬帝之報智者、千僧贖一、今左丞相之訪寂公、曝布足百。

諷誦文 定基入道

香印微煙無礙月、齋僧輕步不穿苔、野蔓

溪嵐吹樹搖秋思、山月穿窓訪夜禪、在列 山中秋日暮 以言

松門露暗僧歸寺、蘿洞雲栖鳥宿林、題可尋 保胤

茅屋無人扶病起、香爐有火向西眠、遊東光寺 明衡

蘿襟藹積冷霞客、艾髮齡衰弄月人、

かみなつきしくればかりをみにそへてしらぬやまににいるそかなしき。索性
 ささなみやしかのうらかせいかはかりこころのうちのすすしかるらむ。四條大納言

閑居

柴扉日暮隨風掩
落盡閑花不見人
元
閉閣只聽朝暮鼓
上樓空望往來船
白
崔儷入室書千卷
范岫辭官筆一雙
後江相公
讀易床頭新月色
學禪窓下遠鐘聲
閑居秋日暮
後中書王
歸老休臣霜後眼
陵園配妾月前心
以言
墻中風景無塵網
門外煙霞任雀羅
池齋作
中書王
陶君籬舊寒花悴
高老山深曉月幽
秋景屬閑人
都督亞將

眺望

詩成暗著閑心記
山好遙偷病眼看
白
煙霞隔路三千界
花柳藏城十二衢
正道
山雨鐘鳴荒巷暮
野風花落遠村春
暮春眺望
儀同三司

眞登

嵩山圍繞興溪霧
洛水回流入野煙
禪林寺眺望
爲政
紅樹重重寒雨後
遠村處處夕陽中
道濟
鴈字一行驚月去
樵歌數曲負嵐還
秋山眺望
菅忠臣
紅林半落寒山透
白鷺斜飛遠水長
長樂寺眺望
敦宗
古渡南橫迷遠水
秋山西繞似屏風
淳和寺眺望
佐國

餞別

潯陽江畔夜送客
楓葉荻花秋索索
琵琶引
白
勸君更盡一盃酒
西出陽關無故人
送元二使
王維
酌盃酒以強勸
不醉奈何吳坂楚嶺之寒嵐
加飡飯以莫辭
定
知悵然三峽五湖之春浪
別方山水深
保胤
倩誰人而說離憂
責不言於桃李
向何方而陳別緒
恨無心於
煙霧
花下惜別
齊名

山月東昇
指前途而勞思
邊雲秋冷
問後會而消魂

縱令後會能相結、兩鬢白於邊地霜。遠別 都真香
家訓欲聞殘日少、洛陽風月莫遲歸。錢源能州赴任 輔昭

ころもかはみなれしひとのわかるれはたもとまでこそなみはよせけれ。重之
かりそめのわかれとおもへとしらかはのせきととめぬはなみたなりけり。四條大納言
とまりゐてまつへき身こそおいにけれあはれわかればひとのためかは。藤輔平

行旅

山川函谷路、遊子塵土顔。蕭條去國意、秋風生故關。白

三湘愁髮逢秋色、萬里歸心對月明。盧倫

嶺懸驛路殘雲斷、海浸城根老樹秋。賈島

遼陽客路千峯引、薊北鄉心片月知。賀蘭遂

故鄉有母秋風淚、旅館無人暮雨魂。代送島人 爲憲

涼燠二回鄉外夢、家山千里客中情。日前旅情多 長國

征徒旆重胡關曉、壯士衣單易水秋。霽中風露冷 第三親土

みやこにてなかめしつきのもろともいたひねのそらにいてにけるかな。道命
まちつらんみやこのひとにあふさかのせきまできぬとつけややらまし。中務
ありあけのつきもしみつにやとりけりこよひはこえしあふさかのせき。藤範永

庚申

早臥無情看雪月、獨眠不得守庚申。守庚申月夜對雪 保胤

かのえさるふねまでしはしこととはんおきのしらなみたちてこぬまに。藤佐見

帝王 付女帝法皇行幸

人在威而不衆、我王也萬夫之防。器在利而不大、斯劔也。コレ ツルギナレハナリ

三尺長。漢高祖斬白蛇賦 白居易

德是北辰、椿葉之影再改、尊猶南面、松花之色十廻。聖化萬年春 後江相公

隆周之昭王穆王曆數永、吾君又曆數永、本朝之延曆延喜胤子

多、吾君又胤子多。賀産序 儀同三司

漢高祖之過沛中、賞父老以擊筑、唐太宗之宴池上、率貴臣以

獻詩。渡水落花舞 匡衡

飛鳥朝者王女也、待羽翼以開鳳曆、高野姬者公主也、契風雲

以復龍興、第一皇女著袴日宴 藤民部卿 言其尊儀、則娑婆世界十善之主、計其寶算、又釋迦如來一年

之兄、陽成院御願文 後江相公 鳳輦宴酣方欲幸、可憐沛老狎恩情、渡水落下舞 儀同三司

忽看烏瑟三明影、暫駐鸞輿一日蹤、宇治行幸詩 後冷泉院御製 親王 付王孫

江都之縱逸遊、遺譏於雷陂之戲、東阿之巧詞賦、流譽於渭

水之文、望月遠情多 齊名 漢景帝之十有三子、最弟謝其系、名、梁孝王之曲觀平臺、誰

人聞其好學、今年又有春 順 見其容姿、則文王之孫長子誦之幼日、論其岐嶷、又孔聖之師

大項橐之同年、東宮第一皇孫讀孝經 匡衡 老臣在座私相語、我后少年學此文、同三司 備同三司

若言皇子神聰敏、日遠論非同日論、第一皇子讀御註孝經 家經 亟相 付執政

胡廣累世之農夫也、伯始致位相公、黃憲牛醫之賤子也、叔度

動名京師、沈休文 昔伊尹有莘氏之媵臣也、一佐成陽、遂荷阿衡之號、呂尙磻溪

之漁者、一朝指麾、乃封營丘之地、勸善王牋 阮嗣宗 大相國者臣之嚴親也、仰膝下而流汗、左僕射臣之伯父也、揖

座上而收襟、小野宮太政大臣辭職第三表 後江相公 應對易迷、汗浹周勃之背、陰陽難理、牛喘丙吉之前、同表

回塘春柳、太公之鈞垂絲、曲池秋波、魏徵之鏡開匣、白河序 藤實綱

林風槐舊繁花久、池水蓮傳累葉芳、林池秋興 以言 原を おそくともつひにさきぬるはなみればたかまきおきしたねにかあるらん。 枇杷任大臣時柳梅花賜之

將軍

拔白刃以萬舞、危冬葉之待霜、履虎尾不噬、寔要伯於子房。

西征賦
潘安仁

將軍守塞、北流戎羯之鄉、壯士辭燕、西入虎狼之國。

愍賦
公乘億

貳師將軍拔佩刀兮、刺山飛泉涌出、戊己校尉正衣冠兮、拜井

奔流激射。
龜山祭文
前中書王

李將軍之守邊、胡人不敢南下、楊大尉之在鎮、敵國且以子來

新羅賦勅府
中書王

三軍士渴孤城下、一眼泉飛再拜前。

高丘未高

身留細柳孤營月、淚灑蒼梧一片煙。

贈答
右列

たつねつるゆきのあしたのはなれこまきみはかりこそあとはしるらめ。源兼俊母

刺史

煙火片片文章主、井邑家家父母君。

章孝標

邵伯止息之鄉、州民作甘棠之詠、羊祜臨望之地、門客建峴亭

之碑。
昏陸
中書王

郭細侯之春竹、雖有風聲之可傳、劉太守之秋蒲、猶非霜威之

不用。
錢飛州刺史
以言

州民縱作甘棠詠、莫忘多年風月遊。

賜學士定政赴任
後三條院

きみかよになにはのうらもしけりあひぬあしかるわさをせねばなりけり。贈攝州刺史
忠家

詠史

鄒枚散後平臺靜、空遣春風日斷腸。

得梁孝王
是真親王

曉洞貫窓斜月影、寒巖洗枕落泉音。

高山四皓
紀家

三千里外隨行李、十九年間任轉蓬。

蘇氏
紀在昌

富春山月當頭白、嚴絲灘波與意清。

得吳漢
閑院贈太政大臣

こひわひてわかれしのへをきてみればあさちかはらにあきかせそふく。詠揚貴妃

王昭君

一雙淚滴黃河水、願得東流入漢家。

棟國

身埋胡塞千重雪、眼盡巴山一點雲。善相公
 翡翠扇翻溪霧斷、琵琶絃咽嶺泉懸。菅齊明
 九重恩薄羅裙去、萬里路遙畫鼓迎。匡衡
 漢月不知懷土淚、邊雲空愧惜金名。匡衡
 豈圖左袵和親日、空失後宮寵幸時。齊名
 みるたひにかかみのかけのつらきかなかからさりせはかからましやは。快圓法師

妓女

玉容寂寞淚欄干、梨花一枝春帶雨。長恨歌
 梨花園中册作妃、金鷄障下養爲兒。胡旋女
 玉貌自宜雙黛翠、桃花獨咲一枝春。賀蘭遂
 陽氣陶神望玉階、而餘喘韶光入骨。飛紅袖以羸形。春娃無氣力
 鴛鴦連袂謳吟、窈窕隔簾談咲。不知陽臺朝雲之未歸歟。不知、
 洛浦神皇之交會歟。第一皇女着袴翌日 藤民部卿
 綺羅脂粉粧無暇、不謝巫山一片雲。貧女吟 紀家

若非宋玉家邊女、疑是襄王夢裏人。豐樂宮舞姬 江相公
 繡帳粧成燈照曜、金樓宴罷月徘徊。新嘗會觀五節舞女 儀同三司
 妾顏秋暮孤蛾老、願領梨園少女風。采女
 くやしくそあまつをとめとなりにけるくもちたつぬるひともなきよに。清正女

遊女

南北東西不定家、風水爲郷船作宅。鹽商婦 白
 東船西船悄無言、唯見江心秋月白。琵琶引 白
 家夾江河南北岸、心通上下往來船。遊女詩 以言
 桂花秋白雲閑地、蘆葉春青水冷天。遊女詩 以言
 こころからうきたるふねにのりそめてひとひもなみにぬれぬひそなき。小町

老人

白髮鏡中慙易老、青山江上幾回春。元
 百川未有回流水、一老終無却少人。白
 梨園弟子白髮新、椒房阿監青蛾老。長恨歌

辭枝雪藥將春去、滿鑷霜毛送老來、白

呂尚父之面波、別渭水而猶疊、袁司徒之鬢雪、出高山而既寒、

右大臣重信辭職勅答
爲時

馬嘶反櫪精神舊、鶴老歸田鬢髮新、感戸部尙書致仕
中書王

白首七旬殘日少、蒼波萬里遠天垂、憶入唐圓通大師
以言

開門未固年行路、劔戟難防耄及情、老無避處
爲憲

むはたまのわかろかみにとしくれてかかみのかけにふれるしらゆき。貫之
かそふれはとしののこりもなかりけりおいぬるはかりかなしきはなし。泉式部

交友

昔伯牙絕絃於鐘期、仲尼覆醢於子路、痛知音之難遇、傷門人

之莫逮、與吳質書
魏文帝

臨白首而始知、恨隔面於鼉波萬里外、仰玄蹤而遙契、願促

膝於龍花三會之朝、匡衡

新齋夜語聞雞起、舊宅春遊待月歸、野相公

遲暮交親雲意淡、在朝故舊醴香濃、題山密壁
前中書王

おもふとちまとるせるよはからにしきたたまくをしきものにそありける。古今
かたらはんひとこそなけれやまさとはをかのみつかぜそよりほかには。

懷舊

昔尼父之在陳兮、有歸歟之歎音、鐘儀幽而楚奏莊鳥、顯而越

吟、登樓賦
王中宣

昔君烏紗帽、贈我白頭翁、帽今在頂上、君已歸泉中、物故猶

堪用、人亡不可逢、岐山今夜月、墳樹已秋風、白

笙歌縹渺虛空裏、風月依稀夢想間、思舊友
白

東平王之思舊宅也、墳上之風靡西、天門之傳新名也、峽中之

煙拂地、松竹策
以言

交遊少、日心如水、閑話今霄鬢有霜、冬夜閑居話舊
管

花前昔會春夢短、月下故情夜淚催、舊遊安在之
爲憲

いはしろの野なかにたてるむすひまつころもとけすむかしおもへば。萬葉集

つねよりもまたぬれそへしたもとかなむかしをかけておちしなみたに。 赤染衛門

述懐

老子莊周吾師也、身居賤職、柳下惠東方朔達人也、安卑位。

與山巨源絕交書
嵇叔夜

昔駱騏倚鞞於吳坂、長鳴於良樂、知與不知也、百里奚愚於虞

而智於秦、遇與不遇也。答盧湛
劉越石

吳强大兮、夫差以敗、越棲會稽兮、勾踐霸世。服鳥賦
劉越石

大行之路能摧車、若比人心是夷途、巫峽之水能覆舟、若比人

心是安流。大行路
白

木鴈一篇須記取、致身材與不材間。白

榮花外物終須語、老病傍人豈得知。白

喪馬之老、委倚伏於秋草、夢蝶之翁、任是非於春叢。菟裘賦
菟裘賦

不歡其醜、雖孤漁父之誨、不容何病、可祖顏子之詞。菟裘賦
菟裘賦

榮路遙而難期、青陽薄寒木之頂、筆耕疲而未獲、秋風暮虛苗

之畦。九月盡日侍北野廟序
高積善

心事結風功不就、浮榮書水字難成。寄野士
長春通

自慙揚震齡空暮、妻咲張儀舌猶存。江相公

身老五花風月席、家傳十葉帝王師。匡衡

處身豈羨龜多智、論命還思木不材。燈下言志
後中書王

鄉夢頻催胡馬思、橋題不信蜀龍心。題可尋
尾張學士

有琴有酒閑中樂、無憂無喜世上情。書懷
第三親王

やまのはにいりぬるつきのわれならはうきよのなかにまたはいてしを。 藤爲義
われのみとおもひしかともたかさこのをのへのまつもまたたてりけり。 藤義實
われふねのしつみぬるみのかなしきはなきさによするなみたにもなし。 四條中納言

慶賀

嘉賓喜色欺盃酒、醉妓懼聲弄管絃。白

莫嫌鬢上些些白、金紫由來稱長年。白

兩川風景同三月、千里江山屬一家。白

湛露恩深酬幾日、浮雲富到避何方。

軍章事賦 贈納言

愚陋不_レ論官好惡、唯歡名字入_レ除書。

辭官後書懷 五常

鳳掖君誇_レ溫樹露、龍門我泣_レ浪花春。

賀黃門表 順

うれしさをなにつつまんからころもたとゆたかにたたましものを。古今

祝

獻壽吹來三盃露、探花拂盡首間霜。

菊有延年術 筆同三司

流下綠邊皆上壽、籬東日月不_レ傾西。

以言

きみがよはあまのはころもまれにきてなつともつきぬいはほなるべし。拾遺
きみがよはちよにひとたひるるちりのしらくもかかるやまとなるまで。嘉言

戀

日下壁而沈彩、月上軒而飛光、見紅蘭之受_レ露、望青楸之離_レ霜。

別賦 江文通

春閨闕此青苔色、秋帳含茲明月光、夏簟清兮晝不_レ暮、冬釭凝

兮夜何長以上同

瓦有鴛鴦、自美雙飛之義、簾編翡翠、空嗟共會之娛。蘭台望幸賦 陳皇后

乍望團扇、悲莫悲班婕妤、稍過長門、愁莫愁兮陳皇后。八月十五夜賦 公乘憶

可憎病鵲半夜驚人、薄媚狂鷄三更唱曉。張文成

鴛鴦瓦冷霜花重、舊枕故衾誰與共。長恨歌

獨對寒窓、恨明月之易過、孤臥冷席、悲長夜之不_レ曙。野黨

一點燈消夢後淚、數聲砧冷月前襟。婦婦然夜長 家貞

うしとてもさらにおもひそかへされぬこひはうらなきものにそありける。掘河右大臣
しのふれといろにいてにけりわかこひはものやおもふとひとのとふまで。兼盛
うらみわひほさぬそてたにあるものをこひにくちなんなこそをしけれ。相模

無常

未_レ及暮景、蜉蝣之世無常、不_レ待秋風、芭蕉之命易破。

孟嘗君之多樂、猶泣雍門之微吟、漢父帝之至尊、已望霸陵而

傷思。已上橋在列出家以後

君不_レ見北邙暮雨、壘壘青塚色、又不_レ見東郊秋風、歷歷白楊聲。

老閑行
菅三品

昨日開來今落去、因花多覺世無常。

山寺作
英明

ここにきてかしこにむすふみつのあわのうきよをめぐるわかみなりけり。四條大納言
あきかせになひく。あさちのすゑることにおくしらつゆのあはれよのなか。丸

白

寸陰景裏

マサニウカガハントル 將窺過隙之駒

クワウハクナリ 廣陌塵中

ストメントラタル 欲認渡關之馬

白賦
謝觀

あしひきのやまちも見えすしらかしのえたにもはにもゆきのふれれば。人丸

新撰朗詠集 下卷終

此新撰朗詠集、藤原左衛門佐基俊之撰集也、此基俊者俊成卿和歌之師匠、二條家和歌之元祖、和漢之才人也、雖
然此集世普不流布、故今鏤梓而以行世而已、

于時寛永八 辛 未孟春吉旦

杉田良庵玄與刊正

第四 朗詠九十首抄

朗詠由來

右一條左相三度上表課菅文時俦草狀曰相府感其秀句成彼詠聲所謂傅氏巖嵐及春過夏闌之兩句是也因以傳岩遂爲祕曲自爾已降連々作曲或用詩賦之詞世々廣律或採序表之句醍醐朱雀聖代愷弘斯道源流藤家兩門互傳其業焉漸積數十句而滿九十首故彼集號之九十首抄然後源流之所詠及百餘首藤家之所習餘二百句爰藤門末葉黃欄宗宣幼而喪于嚴親孤而不稟彼藝其說云絕豈不遺恨乎而不紊業緒祖跡猶存者源派一流而已僕愁扇梁塵之風竊瀝燕弗之露且因右武衛將軍之所命也時寶德協洽大簇下浣記斯事矣

朗詠 九十首抄

時節

春 臨時客 春遊 花道遙 三月盡 閏三月

夏

七夕 八月十五夜 月 九月九日 大井
河逍遙 紅葉 掃衣 九月盡

冬

五節

雜

禁中 仙家 離宮 公宴 管絃遊
盃酌興 曉更 君臣 上皇 后産
親王丞相 將軍 老人 隱士 交友
山寺山家 山水 松竹 眺望 行旅
河陽遊 餞別 述懷 懷舊 雜

春部

臨時客

嘉辰シイッ令月歡無極フキヨバシ萬歲千秋樂未央ムクク

嘉辰令等者謝偃 未見者文選鈔曰未央言曉之 呂延濟曰央極也 又鈔曰未央言樂未盡

此句必三反可詠之 初反令月句ヨリ 第二反加佳辰句

第三反歡無極ヨリ 淵醉並作文等之時於晴所多詠此句

東岸西岸ノ柳遲速同カラス南枝北枝ノ梅開落已ニコトナリ

東岸西岸柳云者岸小涯重云岸此句ハ春生逐地形云題也

月令曰春從東來云々故云東岸也 坤元錄云大庾嶺梅其

花南枝先開云々故云南枝也

新豊ノ酒ノ色ハ鸚鵡盃ノ裏ニ清冷タリ長樂ノ歌ノ聲ハ鳳凰管ノ中ニ幽咽ス

新豊等者公乘偃 送友人歸大梁賦文也 新豊者縣名也

酒出處云々 縣者周制地方千里分爲百縣十四郡四甸爲

縣云々 周禮云千里爲百縣置三老五十爲縣五鄙爲縣二千

五白 項羽本紀曰項羽招沛公置酒新豐鴻門云々

鸚鵡盃者見于三月三日注文云海中有貝狀似鳥穿其背爲酒器謂言越王鳥

長樂者宮名也 高祖本紀曰高祖置酒於長樂宮酒酣發筑

歌云々 鳳凰管名也

春遊

松根ニ倚腰ヲスレバ千年ノ翠手ニミテリ梅花ヲ折頭ニサシハサメバ二月ノ雪衣ニ落

野煙春ノ光ニウソブイテ各一句ヲ吟ジ山霞ノ晚

ノ色ヲ酌忽ニ數盃爾醉リ

花道遙

日ニ瑩風ニ瑩高低千顆萬顆ノ玉枝ヲ染浪ヲ染表裏一入再入ノ紅

之ヲ水ト謂トスレバ則漢女粉ヲ施ス鏡清瑩タリ

之ヲ花ト謂トスレハ亦蜀人文ヲ濯錦燦爛タリ

山桃復野タウ日紅錦ノ幅ヲ曝ラズ門柳復岸柳風麴

之ヲ花ト謂トスレハ亦蜀人文ヲ濯錦燦爛タリ

山桃復野タウ日紅錦ノ幅ヲ曝ラズ門柳復岸柳風麴

之ヲ花ト謂トスレハ亦蜀人文ヲ濯錦燦爛タリ

塵ノ絲ヲ宛タリ

花上苑明ナリ輕軒九陌塵ニハセ猿空山ニ叫斜月

千巖路ヲ登 (二月三日)

大庾嶺ノ梅早落誰粉粧ヲトハム匡廬山杏イマダ

ヒラケズ豈紅艷トメンヤ (不我本譜句)

夜雨潜ニ濕テ曾波眼新嬌タリ曉ノ風緩吹不言口

先咲

誰謂水ヲ心無トハ濃艶臨波色ヲ變ズ誰謂花モノ

イハズトハ輕漾激シテ影クチビルヲ動ス

春ノ花面メン酣暢ノ蕊ニ關入シ晚鶯聲ゴエ講誦

之座ニ豫參ス

淺紅鮮娟タラ仙方ノ雪色ヲ愧濃香芬郁ス妓鑪煙

薰ヲ讓

三月盡

春夜明ナントス牛漢西轉スルヲ望夏日朔ヲツグ

象魏ヲ捐轅ヲ北ニス

春留ニ春駐ラス春飯人寂寞タリ風厭風定ラス風

ヲ思ヒ初テ水ヲ穿紅艷ミル

秋字依時節可改之云々

瑤臺ニ霜ミテリ一聲玄鶴天ニ唳巴峽秋深シ五夜

ノ哀猿月ニ叫

秋ノ夜長シ夜長シテ睡コトナケレハ天モアケズ

耿々タル殘ノ燈ノ壁背タル影蕭々タル晴雨ノ窓

ヲ打聲

更闌夜靜ナリ長門闔シテヒラケズ月サマシク

風秋ナリ團扇杏シテ共ニ絶

野煙秋フカシ馬蹄ニマカセテ優遊ス叢露日クレ

又虫聲ヲタツネテ徒倚ス

切々タリ暗窓ノモト嚶々タリ深草ノウチ秋ノ天

ノ思婦ノコ、ロヨルノ雨ノ愁人ノ耳

七 夕

二星適逢未別緒依々ノ恨ヲノベザルニ五夜將明

ナントス頻涼風颯々ノ聲ニ驚

八月十五夜

起花蕭索タリ (春字依時節可改之云々)

閏三月

谿ニ飯譚鶯ハ更孤雲路ニ逗留シ林ヲ辭舞蝶ハ還

テ一月花翩翻ス

案頭スナワチ三十行ノ歴日ヲ添窓ノ外ニハマタ

千萬里ノ春ノ風ヲ望 (不載本譜句)

夏部

池冷シクシテハ水三伏夏無シ松高クシテハ風一

聲秋アリ (藤家不詠此句)

班婕妤ガ團雪ノ扇風爾代テ長ク忘レ燕ノ昭王

招涼ノ珠斜月當テヲノツカラ得タリ

秦皇泰山ノ雨風黃雀ノ跡ヲケシ周穆長坂ノ雲汗

赤驪溝收 (不載本譜句)

秋部

三秋ニシテ宮漏正ニ長空階雨滴ダル萬里ニシテ

鄉園イツクンカアル落葉窓深シ

秋夜月ヲマツ纒山ヲ出ル清光ヲノソミ夏ノ日蓮

十二廻ノ中コヨヒノコトンナキニ勝ハ無千萬里

ノホカ各吾家ノ光ヲアラソフ

月

秦甸一千餘里凜々トシテ氷鋪漢家三十六宮重々

シテ粉カサレリ

長安十二衢皆萬頃ノ霜ヲ踏高宴千萬處各一家月

ヲ得タリ

三十五名ノ星躔遙水鏡ノ面ニ浮五萬四千ノ土壤

自氷壺ノ心ニ化ス

澄々 遍照禁庭ノ草霜ヲ戴皎々斜ニ沈御溝ノ水

玉ヲ含ム

沈之字乗船之時浮ト詠之 於禁中可詠之

九月九日

故事ヲ漢武ニ採ハ則赤黃宮人ノ衣ニ插舊跡ヲ魏

文ニ尋バ亦黃花彭祖ガ術ヲタスク

三暹ニサイダテ其花ヲフケバ曉ノ星ノ河漢ニ轉

ズルガゴトシ十分ヲヒイテ其彩ヲトラカセバ秋

ノ雪ノ洛川ヲ廻カト疑

大井河道遙

山水秋深シ雲夢ゴトキ者八九アリ煙嵐日クレヌ
風物ヲ記シテ以一二シガタシ

紅葉亦紅葉連峰ノ嵐淺深蘆花亦蘆花斜岸ノ雪遠
近

但不限大井河於風景相應之所可詠之云々

紅葉

梧桐ノ影ノ中一聲ノ雨空クツ、夕鷓胡ノ背ノウ
ヘニ數片ノ紅纒ノコル

搗衣

八月九月正ニ長夜千聲萬聲了時ナシ北斗ノ前ニ
旅鴈ヲヨコタヘ南樓ノ月ノ下ニ寒衣ウツ(藤家不
詠此句)

九月 盡

九月廿七日孰コレヲ盡秋トイハザラン孤叢兩三
莖孰コレヲ殘菊トイハザラン

二十一日以後用當日字詠之 強不限二十七日

禁中

謬仙家ニ入テ半日ノ客タリトイヘドモ恐ハ舊里
ニ飯テ纒ニ七世ノ孫ニアハン

私註此句註入禁中部甚不相應不□也 猶可存斟酌歟

鷄人曉唱聲明王ノ眠ヲフトロカス鳧鐘夜鳴響暗
天ノ聽ニ徹ス

昇殿ハ是象外選也俗骨以蓬萊ノ雲ヲフムベカラ
ス尙書ハ亦天下ノ望也庸才以臺閣ノ月ヲヨツベ
カラズ

李門ノ浪ニサカノボテ二年朝恩イマタオヨバス
蓬壺之雲ヲ踐テ十日夜飲已タケナハナリ

仙家

三壺ニ雲浮七萬里ノ程浪ヲワカツ五城ニ霞ソハ
タテリ十二樓ノカマヘ天ニサシハサム

院中之外更不可詠之

鶴ハ舊里ニ飯丁令威ガ詞キイツヘシ龍新儀ヲム
カフ陶安公ガ駕眼ニアリ

縱崎岫ヲ以固トストモ簫瑟ヲ雲衢ニトゞメガタ
シ縱孟眞ヲシテオハシムトモ何爽籟ヲ風境ニサ
ヘギラン

嵐陰暮ナントス松柏ノ後ニ凋コトヲ契ル秋景早
ウツテ芝蘭ノ先破コトヲアザケル

冬部

閨寒シテハ夢ヲトロク或孤婦ノ礎ノウヘ爾添山
フカクシテハ感ウゴク先四皓ガ鬢ノホトリヲ侵
曉梁王ノ苑ニ入バ雪群山ニ滿リ夜庾公カ樓ニ
ホレバ月千里ニアキラカナリ

五節

德ハ是北辰椿葉ノ影再アラタマリ尊ハ猶南面松
花ノ色十廻リ

此句不限五節不選四季公宴常用之如今月句祝言句也

雜部

奇犬花ニホユ聲紅桃ノ浦ニナガル驚風葉ヲフル
フ香紫桂ノ林ニワカル

四九三十六ノ天丹霞ノ洞高ヒラケ八九七十二ノ
室青巖ノ石ケヅリナセリ

離宮

遲々タル春ノ日玉瓚暖ニシテ温泉ミテリ嬋々
秋ノ風ニ山ノ蟬鳴テ宮樹クレナキナリ

公宴

桂醕蘭肴ハ昌泰ノ昔ノ味ニコトナラス鳥ノ聲花
ノ色猶延長ノ古風ニ同ジ

御酒宴之時又有便歟

梁元ノ昔ノアソビ春王ノ月漸ニ落周穆アラタナ
ル會西母カ雲カヘムナントス

政ヲ布庭風流イマタカナラズシモ崑閬爾敵ス之
ヲ兼タル者ハ此地也文ヲ好世德化イマダカナラ
スシモ黃炎光ズ之ヲ兼タマヘルハ我君也

此句於禁中不能左右於治世仙洞可詠非治世者可存斟酌

賦於春宮者一切不可用之

管絃遊

第一第二ノ絃ハ索々タリ秋ノ風松ヲ拂テ疎韻落
第三第四ノ絃ハ冷々タリ夜ノ鶴子ヲ憶籠中ニ鳴
第五絃聲尤掩抑瀧水氷咽流不得

有二反説第五絃已下當流不詠之管家唱之頗爲祕説

羅綺ノ重衣タル情無コトヲ機婦ニネタミ管絃ノ
長曲ニアアル關ザルコトヲ伶人ニイカル

有二反説

變態續粉タリ神也亦神也新聲婉轉ス夢カ夢ニア
ラザルカ

同類ヲ相求ニ感ス籬鴻去鴈ノ春ノ轉ニ應ジ異氣
ヲ會シテ終ニ混ス龍吟魚躍ノ曉ノ啼ニ伴(此句春
可用之)

燕姬ガ袖シバラク收テ繚亂ヲ舊拍ニソネム周郎
カ簪頻ニ動テ間開ヲ新花ニカヘリミル(同前)

一聲ノ鳳管ハ秋秦嶺ノクモヲオドロカス數拍ノ
霓裳ハ曉 緱山ノ月ヲ送(秋可用之)

ヲ驚カス薄媚トナサケナキ狂鷄ノウカレトリマ
タアケサルニ曉ヲ唱

酒軍座ニ在兔園ノ露イマタ晞ス僕夫衢ニ待鷄籠
ノ山アケナントス

君 臣

項莊ガ鴻門ニ會セシ情ヲ一座ノ客ニヨセ渾祖ノ
沛郡ニ飯スル思ヲ四方ノ風ニ傷

漢高三尺ノ劔キナガラ諸侯ヲ制シ張良ガ一卷ノ
書立ニ師傳ニ登

此句大臣又於武將所有便歟

上 皇

閑居ハ誰人ニカ屬ス紫宸殿ノ本主ナリ秋水何ノ
處ニカ見ル朱雀院ノ新家ナリ

榮啓期ガ三樂ヲ歌イマダ常樂ノ門ニイタラズ皇
甫謚ガ百王ヲ述タル猶法王ノ道ニハクラカリキ

后 産

隆周ノ昭王穆王曆數長我君モ又曆數長本朝ノ延

盃酌興

菓ハ則上林苑ノ獻ズルトコロ含ハ自消ヌベシ酒
ハ是下若村ノツタフルトコロ傾レハ甚ナリ
三百盃ト雖強ニ辭スルコト莫邊士ハ是醉郷ニア
ラス此一兩句ハ重テ詠ヘシ北陸豈亦詩國ナラン
ヤ

亦ノ字不唱之

醉郷氏ノ國四時獨溫和ノ天ニ誇酒泉郡ノ民一項
イマダ沍陰ノ地ヲシラス

菓ハ則玄圃ノ梨西ノ枝ヲ折テ机ニオク酒ハ是青
州ノ竹上葉ヲ酌テ樽ニ滿ツ

曉 更

佳人コトゴトク晨粧ヲ飾魏宮ニ鐘ウゴク遊子猶
殘ニ行函谷ニニハトリ鳴

嚴粧金屋ノ中ニ青蛾正ニ畫罷宴瓊蕊ノ上ニ紅燭
ムナシクアマレリ

可憎ノ病鵲ノヤモメガラスヤヨナカヨナカニ人

曆延喜胤子多我君モ亦胤子多シ

必不限御産於后宮御方禁中詠之 最末多字皇子其數

少若一向不御之時オホカラント可詠之祕説也

親 王

江都ノ勁捷ヲコノム七尺ノ屏風ソレイタツラニ
高シ淮南カ神仙ヲ求メ一旦雲ニ乗何ノ益カアル

丞 相

太相國ハ臣ガ嚴親ナリ膝下爾アフイデ汗ヲナカ
シ左僕射ハ臣ガ伯父ナリ席上イツシテ襟ヲオサ

西京ノ席門ハスナハチ是陳豎相ガ舊宅ナリ南山
ノ芝潤ハ寧袁司徒カ幽栖ニアラスヤ

應對迷ヤスシ汗周勃ガ背ニアマネシ陰陽理シガ
タシ牛丙吉カマヘニアエク

周公旦ハ文王ノ子武王ノ弟自其貴コトヲオモヒ
忠仁公ハ皇后ノ父皇帝ノ祖世其仁ヲオス

傅氏巖ノ嵐般夢ノ後ニ風雲タリトイヘトモ嚴陵

瀬ノ水猶漢聘ノ初ニ涇渭タルコトヲ

依祕曲別紙註之

春過夏闌又袁司徒カ家ノ雪路達シヌラシ且ニハ
南暮ニハ北鄭太尉ガ溪ノ風人ニシラレタリ
漢ノ四皓出タリトイヘドモ應曜獨淮陽ノ雲ニ留
リ堯三タビメセドモキタラス許由長ク潁水ノ月
ニスム

將軍

隴山雲暗シ李將軍カ家ニアル潁水浪閑ナリ蔡征
虜ガイマダツカヘザル

職虎牙ニ列ス武勇ヲ漢ノ四七將ニ拉トイヘドモ
學麟角ヲ抽遂ニ文章ヲ魯ノ二十篇ニアデワフ

老人

樂天ヨリモワカキコト三年猶已ニ衰タル齡ナリ
勝地ニ遊一日是老ノ幸ニアラズヤ

(常説) アソブコト(家説) コトノ字不詠之

大公望カ周文ニアヘル渭濱ノ波ヲ面ニ疊綺里季

勾曲ノ會ニサキダテルコト三朝洞花落ナントス
佛ノ神通ヲモテモ何カ酌盡サン僧祇劫ヲ經テモ
朝宗セントオモフ

岫幌ニ日落ヌ迎佛ノ使煙ヲトハン松戸ニ人稀ナ
リ護塔ノ鳥月ニ棲

十惡トイヘトモ猶引接ス疾風ノ雲霧ヲ披ヨリモ
甚シ一念トイヘトモ必感應ス之ヲ巨海ノ涓露ヲ
納ニ喩

月重山ニ隱スレハ扇ヲ摯テ之ニ喩フ風大虛ニヤ
ンヌレハ樹ヲユルガシテ之ヲ教
生アル者ハ必滅ス釋尊イマダ梅檀ノ煙ヲマヌカ
レス樂盡テカナシミキタル天人猶五衰ノ日ニア
ヘリ

昔初利天ノ安居九十日赤梅檀ヲキサムテ尊容ヲ
アラハシ今跋提河ノ滅度二千年紫磨金ヲ瑩テ兩
足ヲ禮ス

(必不限山寺於佛前法事所可用之)

ガ漢惠ヲタスケシ商山ノ月眉ニタル

隱士

漢皓秦ヲ避朝望孤峰ノ月ヲ礙陶朱越ヲ辭シ暮眼
五湖ノ煙ニ混ズ

交友

蕭會稽ガ古廟ヲヨキシツケテ異代ノ交ヲムスビ
張僕射ガ新才ヲオモンセシ推テ忘年ノ友トス

山寺

願ハ今生世俗文字ノ業狂言綺語ノ誤ヲモテ翻テ
當來世々讚佛乘ノ因轉法輪ノ縁トセム

蒼茫霧雨ノ霽ノ初ニ寒汀ニ鷺立重疊セル煙嵐ノ
斷タル處ニ晚寺ニ僧カヘル

馬ニ策來時只風煙ノ翫ベキコトヲ思ヒ僧ニ逢テ
談ズルトコロ漸ニ世俗ノ皆空コトヲ覺

十方佛土ノ中ニハ西方ヲモテ望トス九品蓮台ノ
間ニハ下品トイフトモ足ヌヘシ

極樂ノ尊ヲ念ズルコト一夜山月正ニマドカナリ

山家

南ニ望バ則關路ノ長アリ行人征馬翠簾ノ下ニ駱
驛ス東ニカヘリミレバ亦林塘ノ妙ナル有紫鴛白
鷗朱檻ノ前ニ逍遙ス

山路ニ日暮ヌ耳ニ滿者ハ樵歌牧笛ノ聲澗戸ニ鳥
飯ル眼ニサヘギル者ハ竹煙松霧ノ色

山水

泰山ハ土壤ヲユヅラズ故ニ能其タカキコトヲナ
ス河海ハ細流ヲイトハズ故能其フカキコトヲナ
ス

山復山何ノ工カ青巖ノカタチヲケヅリ成ル水復
水誰カ家ニカ碧潭ノ色ヲソメイタセル

松竹

九夏三伏ノ暑月竹錯午ノ風ヲ含ミ玄冬素雪ノ寒
朝ニ松君子ノ徳ヲアラハス

晋ノ騎兵參軍王子猷裁テ此君ト稱シ唐ノ太子賓
客白樂天愛シテ吾友トス

眺望

天台山ノ高巖ヲ見ハ四十五尺ノ波白シ長安城ノ遠樹ヲノゾメハ百千萬莖ノナヅナ青シ

紫蓋ノ嶺嵐オロツカナリ雲七百里ノ外ニヲサマリ曝布ノ泉波スサマジ月四十尺ノ餘ニスメリ

行旅

韓康獨往ノ栖霞藥フルキガゴトシ范蠡扁舟ノ泊煙波惟アラタナリ

胡鴈一聲秋商客ノ夢ヲヤフル巴猿三叫曉行人ノ裳ヲウルホス

此句末サケテ可申藤家句也

行々重行々タリ明月峽ノ曉ノ色不盡眇々復眇々タリ長風浦ノ暮聲猶フカシ

曉長松ノ洞ニイレハ巖泉咽テ嶺猿吟夜極浦ノ波ニ宿スレバ青嵐吹テ皓月スサマシ

胡鴈一聲了

河陽遊

翠帳紅閨萬事ノ禮法コトナリトイヘトモ舟ノ中浪ノ上一生ノ歡會惟オナシ

餞別

南ニ翔北ニムカフ寒温ヲ秋鴈ニ付カタシ東ニ出西ニ流只瞻望ヲ曉月ニ寄

前途程遠シ思ヲ鴈山ノ暮ノ雲ニ馳後會期遙ナリ櫻ヲ鴻臚ノ曉ノ涙ニウルヲス

述懷

齡顏駟ニツケリ三代ヲ過テ猶沈恨伯鸞ニ同ジ五噫ヲ歌テマサニサンナントス

瓢簞屢空草顏淵カ巷ニシゲシ藜藿深サセリ雨原憲ガ樞ヲウルホス

懷舊

金谷ニ花ニ酔シ地花春コトニ句テ主不飯南樓ニ月ニアサケル人月秋ト期シテ身イツクンカ去シ王子晋カ仙ニ昇シ後ノ人祠ヲ緱嶺ノ月ニ立羊太

傳カ世ヲ早クセシ行客涙ヲ峴山ノ雲ニオトス

雜

李陵ガ胡ニ入シニ同但異類ヲノミ見屈原ガ楚ニ在ニ似タリ衆人皆醉リ(酒宴可用之)

秦皇驚歎ス燕丹ガ去シ日ノ烏ノカシラ漢帝傷嗟ス蘇武カ來シ時ノ鶴ノ髮

容貞ノカホハセハ舅ニ似タリ潘安仁カハ、カタノオイ氣調ノイキサシハコノカミノコトシ崔季珪カヲトイモウト

朗詠 不載源藤兩家譜朗詠

鳳凰鴛鴦ハ自和鳴ノ聲ヲソヘ葱花啄木ハ暗ニ玲瓏ノヒバキヲ送

山遠シテハ雲行客ノ跡ヲウツム松寒シテハ風旅人ノ夢ヲヤフル 以上兩句

五十二丁

付博士句八十四首 加曲定判

有博士分百七首歟

無博士分十八首 斷絶歟

畢竟百二十五首無相違 判

今樣 首之内略五首

蓬萊山

ヤ蓬萊山にはヤ千とせふる

ヤ萬歲千秋かさなれりム

ヤ松の枝にはつるすくひム

いわおかそはにはヤかめあそふ

靈山御山

ヤ靈せむみやまのヤ五□うまつ

ヤらく葉なりとそひとはいふわれもみる

ヤちく葉なりともをりもてこム

ねやのかさしにヤするさゝん

長生殿

ヤ長生殿のヤうちこそ
ヤ千とせの春秋と、めたれム
ヤ不老門をもたてたれはム
としはゆけともヤおひもせず

鶴群居

ヤつるのむれるるヤまつ山に
ヤ千世に千とせをかさねつム
ヤよはひはきみかためなれやム
あめのしたこそヤのさかなれ

春始

ヤはるのはしめのヤむめのはな
ヤよろこひ日らけて身なるはなム
ヤおまへのいけなるうすこほりム
こしをとけた、いまかな

根本源家所詠朗詠

極樂尊

第一第二

羅綺重衣

八月九月

春過夏闌

傅氏巖嵐

德是北辰

私註謂之根本七首朗詠歟

本云

此譜一卷爲助愚質之遲鈍不顧傍人之嘲哂付博士更不可
及外見也根本以九十首爲正員數此故號其外句三十五
首不載源應兩家以上百二十五首近代詠習之也仍九十句
之外引下書之猶々此一卷子孫云門弟不可有荒涼之儀
堅加制禁者也此儀曾非祕此抄末生蒙昧之身非器聾盲之
俗如此抄新作之條太以憚思之故也 判

文安五之曆戊辰夾鐘中九亥甲之時以洞院入道前内府尊翰
之本令書寫畢可祕者也

通議太夫中郎將源朝臣有俊 花押

此一册借乞新宰相基雄本以外毫令書寫博士餘附之了

享保十年二月二十二日

第五 朗詠要抄

朗詠要抄

秦皇ケイタンス 燕丹カサツシヒノカラ爪ノカ
シラ 漢帝シヤウサス 蘇武カキタツシ時ノツ
ルノカミ 「白部」

九月廿七日タレカコレヲツキヌル秋トイハサラ
ム コソウ兩三カウ タレカコレヲサンキクト
イハサラム ノコンノキクト 「九月盡 新」

今年ノ閏ハ ハル三月ニアレハ アマサヘミル
キムレウノ一月ノハナヲ 「閏三月 本」

揚岐路 禾レヒトヲ、クルコ
ヤウキミチナメラカナリ 禾レヒトヲ、クルコ
トヲホクノトシ リモンナミタカシ ヒト禾レ

ヲ、クラムコトイクバクノヒツ 「錢別 本」

七ウソ禾ウバンズ ツエシユバイシンカコロモ
カクスリヲフム 「落葉 本」

チヤウハクハウカキウカンニイタル 十萬里ノ
ナミニサカノホル ハクシコウリヨウモンヲホ

イタ、ク 皎々トシテナ、メニシツム 御溝ノ
ミツタマヲフクム 「月」

長安十二衢ミナ萬頃ノシモヲフミ 高宴千萬處
ヲノツカラ一家ノツキヲエタリ 「新」

タニニカヘル歌鶯ハ サラニ孤雲ノミチニ逗留
シ ハヤシヲ辭スル舞蝶ハ カヘテ一月ノハナ

ニ翻翻タリ 「閏三月 本」

漢高三尺ノ劔 キナカラ諸侯ヲ制シ 長良一卷
ノ書 タチトコロニ師傅ニノホル 「君臣 將軍 本」

萬里ニヒトミナミニサル 三春ニカリキタニ
トフ シラ爪イツレノ歳月ニカ ナムチトヲナ

シクカヘラムコトヲエム 「錢別 本」

シノケンキシヤウクンリウハクリン サケヲ
タシムテシユトクシヨウヲ ツクテヨニツタヘ

タウノタイシヒンカクハクラクテン マタ酒ヲ
タシント酒功讚ヲツクテコレニツク 「酒 本」

西京ノセーモンハ スナハチコレチンシヨ

シ 二千年ノアトヲノコセリ 「山水 新」

閑居ハタレノ人ニカシヨクスル シシンデンノ

ホンシユナリ アキノミツハイツレノトコロニ

カミユル 朱雀院ノシンカナリ 「上皇 山水 本」

漢皓秦ヲサシアシタ ノソミ孤峰ノツキヲサヘ

陶朱越ヲ辭セシユフヘ マナコ五湖ノケフリ

ニコンス コンス 「隱士 本」

職虎牙ニ列ス 武勇ヲ漢ノ四七將ニトリヒシク

トイヘトモ 學麟角ヲスキイツ ツキニ文章ヲ

魯ノ二十篇ニアヂハフ 「將軍 本」

海風ノ沈香ヲフク ヲノツカラ芬芳ヲ供シ河水

ノ碎金ヲユル ソラニ嚴飾ヲソウ 「佛事 新」

三遲ニサイタチソノハナヲフケハ アカツキノ

ホシノ河漢ニ轉スルカコトシ 十分ヲヒイテソ

ノイロヲトラカセハ アキノユキノ洛川ヲメク

ルカトウタカウ 「九月九日 菊 本」

澄々トシテアマネクテラス 禁庭ノクサシモヲ

ウシヤウノキウタクナリ ナンザンノシカンハ

ムシロエンシトカイウセイニアラスヤ「亟相 本」

ハクシユニノソムテハシメテシル ウラムラク

ハラモテヲガウハバンリノホカニヘタテムコト

ヲ 玄蹤ヲアウイテハルカニチール 願ハヒサ

ヲ龍花三會ノアシタニチカツカム 「新」

此句者依御室仰松入道付博士

マツリコトヲシクニハフリウイマタカナラスシ

モコンラウニヒトシカラス コレヲカネタルモ

ノハコノチナリ プンヲコノムヨトツク禾イマ

タカナラスシモク禾ウエムニテラズ コレヲカ

ネタマヘルハ禾カキミナリ 「帝王 本」

此句者故入道殿覺慧ノ啄木也トオホセラレケリ秘中祕也

帝 王

仁アキツ瓜ノホカニナカレ 惠ツクハヤマノカ

ケヨリモボシ フチヘンシテセトナルコエ

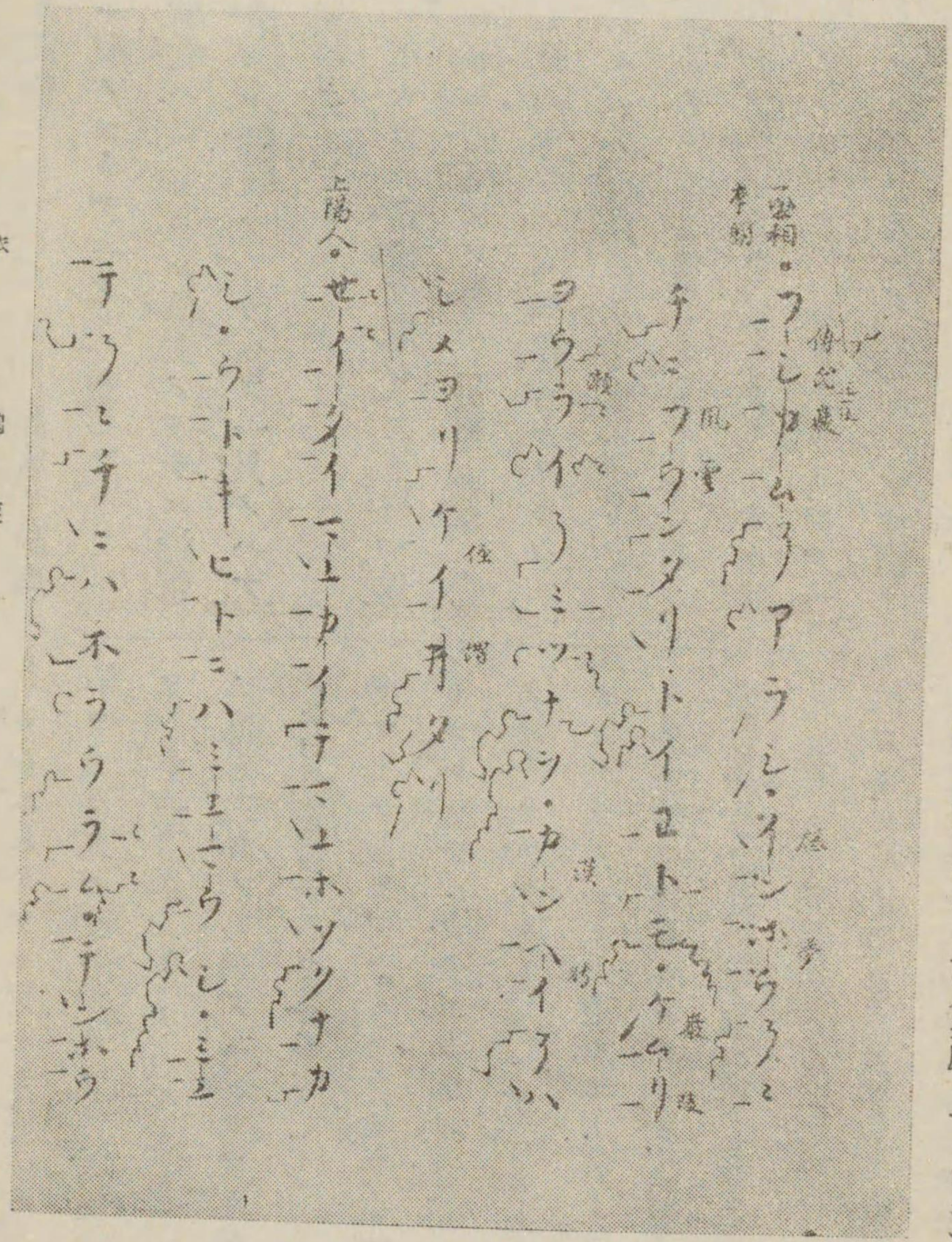
キセキトシテ口ヲトチ イサコ長シテイハホト

ナルシヨ ヤウヤウトシテミ、ニミテリ「秘」

サルノナキステニヤミス 「行旅 新朗」

後白川院ノ御供ニ故入道殿ミヤシロニコモラセタマヒタリケ

イクツラツ南
ニサル鷹一へ
ンニシニカタ
フク月征路ニ
オモムイテヒ
トリユクシ
旅テンナヲト
サセリ
イニナイテモ
、タヒタ、カ
ウイクサ
ノカイマタヤ
マ瓜「秘」
ク禾テイノカセノウチニ
ヲキコユ



ルニアメウチ
フリテモノア
ハレナリケル
夜サルノナキ
ケレバ キミ
モ御心スミツ
、朗詠候ハ、
ヤトマウサセ
タマヒケルニ
此句ヲ詠セサ
セ給ヘリケレ
ハキク人ミナ
ソテナシホリ
クリ 又熊野
御幸御供ニテ
キリヘノ王子ニテモ詠セサセ給ヒケリ
ケルトナン

傳氏巖
フシカムノアラシ
リトイエトモ
ンヘイノハシメヨリケイキタリ
セイタイマユカイテマユホソクナカシ
ヒトニハミエマウシ
ラム テンホウノスエノトシ
ナレハ「上陽人」
ハナノモトニカヘラムコトヲ禾スル、ハ
イニヨテナリ
コレハルノカセ「春興 本」
已上二句自妙音院殿天王寺松四郎慥給所也自四郎昇蓮傳之
シウコウタンハブン
ミツカラソノタフトキコトヲシル
ウハク禾ウコウノチ、ク禾ウテイノソ
ジンヲ、瓜「表文」

此句者故入道殿大臣大將ニチハシマシケル時後宇治殿キノ御
ハカヘナカツキノハツカアマリノコロマイフセ給テムカシヤ

戀ヲオホシメシイテケム 直衣 ソテナカチニチシアテ、詠
セサナ給ヒケリ 御供ニ小輔公心舜候テソナミタチナカシケ
ル チカクハ冷泉中納言潯房卿中宮御遊ニ此句ヲ詠シテ純御
衣ヲタマハリタリケリ
功德ハヤシヲナス アマネク惠花ヲ四生ノ意樹
ニヒラキ 菩提タネヲ禾カツ マサニ甘露ヲ六
種ノ身田ニソ、ク「佛力」
此句ハ依御室仰孝道朝臣始付博士ト云々
鳳凰鴛鴦ハ ヲノツカラ和鳴ノコエヲソヘ ソ
ウク禾啄ホクハ ソラニ伶龍ノヒ、キヲヲクル
「比巴銘 序云」
ヒトリ寒窓ニムカフテ 明月ノスキヤスキコト
ヲウラミ ヒトリ冷席ニフシテ長夜ノアラハレ
サルコトヲカナシム 「冬 新朗」
大相國ハシンガ嚴親ナリ 膝下ヲアウイテアセ
ヲナカス 左僕射ハシンガ伯父ナリ 席上ニイ
ウシテ襟ヲヲサム 「清慎公拜右大臣表文」

李陵カ胡ニイツシニオナシ 夕、異類ヲノミ、
ル 屈原カ楚ニアツフシニニタリ 衆人ミナエ
、リ [雑]

紫 園 シタツヲイテ、ヒムカシニノソメハ 山カクナ
カハ雲コンノクラキニサシハサメリ 翠嶺ヲフ
ムテニシニカヘリミレハ 家郷コトコトク煙樹
ノフカキニイル

夕トヒカウカムヲモチカタメトストモ セウシ
ツヲウンクニト、メカタシ 夕トヒマウホンヲ
シテヲハシムトモ ナンソサウライヲ風ケイニ
サイキラム [九月盡 本]
チ 月カウナム テンーコトムナシ アハレム
シ ヲ 江 南 好
ヘシフユノカケノ ハルニ、テ花ナルコトヲ [初
冬 本]

(以上三十五首可有此今十首者有先本)

本云

菊 不入御撰賦

コレハナノナカニ ヒトヘニキクヲアイスルノ
ミニアラス コノハナヒラケテノチ サラニハ
ナノナケレハナリ [秘 本]

大井河道遙

山水アキフカシ ウンボウゴトキモノ八九ア
リ エンラム日クレヌ フツヲキシテ一二シ
カタシ [秘]

文 詞 新撰和歌序

ハルノカスミアキノ月 エムリウヲゲンセンニ
ウルヲシ ハナノイロトリノコエ フサウヲシ
ロニアサヤカニセリ [秘 春]

寛喜第四天壬辰卯月廿七日於常州筑波山麓所殘之祕曲
依其志之不淺皆授之了 榮賢在判

眺 望

ミナミニノソメハスナハチ關路ノナガキアリ
行人セイバスイレンノモトニラクエース ヒム
カシニカヘリミレバマタリムタウノタヘナルア
リ シエンハクヲウシユカムノマヘニセウエウ
ス [秘]

述

懷 禁中此ノ詩ハキンアリ心ウヘシ

シヨウデンハコレシヤウク禾イノエラヒナリ
シヨクコツモテホウライノ雲ヲフムヘカラス
尙書ハマタテンカノ、ソミナリ ヨウサイモテ
タイカクノ月ヲヨヅヘカラス [秘]

祝

初ニハコレヨリイタス第二反ニハカシンヨリ
カシンレイ月クワシブ曲萬セイセンシウラクビ
ヤフ [秘 篇音 本]

藤 家

三條關白廉義頼忠一男

御堂關白二男

四條大納言公任

大ニ條關白教通

宇治殿御體京極大殿御實御息

師通御息

後ニ條關白師通

知足院關白忠實

兼 雅

二條大納言

釋 性

木工權頭

榮 賢

心 空

因 空

普 一

左馬助入道

飛驒前司
有 安 證 心

第五 朗詠要抄

本云

文永二年^{乙丑}十一月十一日祕事朗詠悉以奉傳豪愉大德了

桑門心空 在判

延慶二年^{己酉}八月十三日朗詠祕事不殘一曲悉以奉傳普一
大德畢

因空 在判

詠曲數四十一

第六 朗詠要集

朗詠要集

春 部

東岸西岸ノヤナギ遅速ヲナジカラズ南枝北枝ノムメ開落
スデニコトナリ。

松根ニヨ(ツ)テコシチスレバ千年ノミドリテニミテリ
梅花ヲヲ(ツ)テカウベニサシハサメバ二月ノ雪コロモ
ニチツ。

春ノ霞秋ノ月艶流ヲ言泉ニウルヲシ花色鳥ノコエ浮藻ヲ
詞露ニアザヤカニセリ。

夜ノアメヒソカニウルヲス曾波ノマナコアラタニコピア
カツキノ風ユルクフイテ不言ノ口マヅエム。メリ一説

誰カ水ヲコ、ロナシトイツシ濃艶ノヅムデ波イロヲ變ズ
誰カ花ヲモノイハズトイツシ輕漾激シテカゲクチビルヲ
ウゴカス。

日ニミガキ風ニミガク高低千顆萬顆ノタマ枝ヲソメ波ニ
ソム表裏一入再入ノクレナキ。表裏一入ノクレナキ

淺紅鮮娟タリ仙方ノユキイロヲハヂ濃香芬郁タリ妓鑑ノ
ケブリ薫テユヅル。

居ツネノ座ナシコケヲ掃テシバラク筵ニカヘイタルコト
サダマレル家ナシ花ヲタヅネテ主ヲトハズ。

山桃マタ野桃日紅錦ノ幅ヲサラシ門柳マタ岸柳風麴塵ノ
イトヲワカネタリ。

大庾嶺ノ梅ハヤクヲチヌ誰カ粉粧ヲトハム匡廬山ノカラ
モ、イマダヒラケズアニ紅艶ヲトメムヤ。

花上苑ニアキラカナリ輕軒九陌ノチリニハセサル空山ニ
サケブ斜月千巖ノミチチミガク。

コレヲ水トイハムトスレバ則漢女粉ヲホドコス鏡清瑩タ
リ是ヲ花トイハムトスレバマタ蜀人文ヲアラフニシキ榮
爛タリ。

誰ガ家ノ碧樹ニカウグヒスナイテ蘿幕ヲチタレタルイヅ
レノトコロノ花堂ニカ夢サメテ珠簾イマダマカザル。

春夜アケナムトス牛漢ノニシニ轉ズルヲノゾミ夏日朔ヲ
ツグ象魏ヲサシテナガヘチキタニス。

夏 部

斑婕好ガ團雪ノアフギ岸風ニカヘテナガクワスレ燕ノ昭
王招涼ノタマ沙月ニアタ(ツ)テヲノヅカラエタリ。
秦皇泰山ノアメ風黃雀ノアトヲケシ周穆長坂ノクモ汗赤
驪ノミヅニオサマル。

秋 部

二星タマタマアヘリイマダ別緒依々ノウラミヲノベザル
ニ五夜マサニアケナムトスシキリニ涼風颯々ノコエニオ
ドロク。

秋ノ夜月ヲマツワヅカニ山ヲイヅル清光ヲノゾミ夏ノ日
ハチスヲチモフハジメテ水ヲウガツ紅艶ヲミル。

瑤臺ニシモミテリヒトコエノ玄鶴天ニナキ巴峽アキフカ
シ五夜ノ哀猿ツキニサケブ。

秦甸ノ一千餘里凜々トシテコホリシキ漢家ノ三十六宮澄
々トシテ粉カザレリ。

長安十二クミナ萬頃ノ霜ヲフミ高宴千萬處ヲノノ一家

冬 部

閨サムクシテ夢ヲドロクアルイハ孤婦ノ砧ノウヘニソヘ
山深シテ感ウゴクマヅ四皓ノビムノホトリヲチカス。
獨寒窓ニムカツテ明月ノスギヤスキコトヲウラミ獨リ冷

ノ月ヲエタリ。
落葉微風ヲマ(ツ)テチツ風ノチカラケダシスクナシ孟
嘗雍門ニアツテナク琴ノ感スデニイマダシ。
秋ノ夜ナガシ夜ナガクシテネブルコトナケレバ天モアケ
ズ歌々タルノコムノトモシビチカベニソムケタルカダ蕭
々タルクラキアメノマドヲウツコエ。
胡鴈ヒトコエ秋商客ノユメチヤブリ巴猿ミサケピアカッ
キ行人ノ裳ヲウルチス。
十二廻ノウチニコヨヒノコトムナキニマサレルハナシ千
萬里ノホカニ各々ワカ家ノヒカリヲアラソフ。
三秋ニシテ宮漏マサニナガシ空階ニ雨シタ、ル萬里ニシ
テ郷園イヅクムカアル落葉マドフカシ。
紅葉又紅紅連峰ノ嵐淺深蘆花マタ蘆花斜岸ノユキ遠近。

席ニフシテ長夜ノアケザルコトヲカナシム。
曉梁王ノソノニ入レバ雪群山ニミテリ夜度公が樓ニノボ
レバ月千里ニアキラカナリ。

ラズヤ。

管 絃

第一第二ノ絃ハ索々タリ秋ノ風マツチハラ(ツ)テ疎韻
ヲツ第三第四ノ絃ハ冷々タリ夜ノツルコト思テコノウチ
ニナク。

一聲ノ鳳管ハ秋秦嶺ノクモヲチドロカシ數拍ノ霓裳ハ曉
キ嶽山ノ月ヲオクル。

變態繽紛タリ神ナリマタ神ナリ新聲宛轉ス夢カユメニア
ラザルカ。

梁鷄スムデチソクトナフ笛向子期カトナリニフク漢月ノ
ゾムデカタブキガタシ碣楚屈原ガ舍ニウラム。

羅綺ノ重衣タルナサケナキコトヲ機婦ニネタミ管絃ノ長
曲ニアルチヘザルコトヲ伶人ニイカル。

樂天ヨリモワカイコト三年ナチスデニチトロヘムタルヨ
ハヒナリ勝地ニアソブコト一日コレナイノサイワイニア

大公望ガ周文ニアヘル渭濱ノナミヲモテニタ、ミ綺里季
ガ漢惠ヲタスクル商山ノ月マユニタル。 商山月マユニタ
レタリ異説
紅葉黃落ス一樹ノ春ノイロ秋ノコエ綬ナムスビ簪ヲヌキ
イヅ一身ノサカムナルコ、ロチイタルヲモイ。

老 人

行 路

翠帳紅ケイ萬事ノ禮法コトナリトイヘドモ船ノ中ナミノ
ウヘ一生ノ歡會コレヲナジ。

曉長松ノホラニイレバ巖泉ムセテ嶺猿吟ズ夜極浦ノナミ
ニ宿スレバ青嵐フイテ皓月スサマジ。

盃 酌 興

三百盃トイフトモアナガチニ辭スルコトナカレ邊土ハコ
レ醉郷ニアラズ此一兩句ハカサネテ詠ズベシ北陸アニ詩

公 宴

梁元ノムカシノアソビ春王ノ月ヤウヤクニチチ周穆ノア
ラタナル會西母ガクモカヘムナムトス。

五 節

德ハ是レ北辰椿葉ノカゲフタ、ピアラタマリ尊ハ猶ヲ南
面松花ノイロ十カヘリ。

仙 家

三壺ニクモウカブ七萬里ノホドナミヲワカチ五城ニカス
ミソバダテリ十二樓ノカマヘ天ニサシハサメリ。
四九三十六ノ天丹霞ノホラタカクヒラケ八九七十二ノ宮
青巖ノイシケヅリナセリ。

謬テ仙家ニイ(ツ)テ半日ノ客タリトイヘドモチソラク
ハ舊里ニカヘ(ツ)テワヅカニ七世ノムマゴニアハムコ
トヲ。
鶴舊里ニカヘル丁令威ガコトバキイツベシ龍新儀ナムカ

ノ國ナラムヤ。

粟ハスナハチ上林苑ノタテマツルトコロフクメバチノゾ
カラキエヌ酒ハコレ下若村ノツタヘタルトコロカタフク
レバハナハダ美ナリ。

晋ノ建威將軍劉伯倫サケチタシ(ン)デ酒德頌ヲツク(ツ)
テヨニツタエ唐ノ太子ノ賓客白樂天マタ酒ヲタシ(ン)
デ酒功讚ヲツク(ツ)テコレニツグ。

新豐ノ酒ノイロハアウ鷓盃ノウチニ清冷タリ長樂ノ歌ノ
コエハ鳳凰管ノウチニ幽咽ス。

將 軍

隴山クモクラシ李將軍ガイエニアル瀨水ナミシヅカナリ
蔡征虜ガイマダツカヘザル。

離 宮

遅々タル春ノ日タマノイシタ、ミアタ、カニシテ溫泉ミ
テリ翳々タル秋ノカゼニ山ノセミナイテ宮樹クレナキナ
リ。

ウ陶安公が駕マナコニアリ。

山 寺

馬ニムチウチキタルトキ只風煙ヲモテアソブベキコトヲ
 ナモヒキ僧ニア(ツ)テ談ズルトコロニヤウヤクニ世俗
 ノミナムナシキコトヲサトムヌ。
 香煙戸ヲイヅ紙窓ヲオ(ホ)ツテヒトモナシ禪侶壇ニム
 カウ金磬ナツテヒギキアリ。
 岫幌ニ日クレヌ迎佛ノツカヒケブリヲトバシ松戸ニヒト
 マレラナリ護塔ノ鳥月ニスム。
 繩床ウケナムトス月春蘿ノホラニナヒ衲衣ヤブレヤスシ
 風秋桂ノミネニチロソカナリ。
 尺尊在世ノムカシアハザルコトヲ鶯峰ノ雲ニウラムトイ
 ヘドモ慈氏下生ノトキ速證ヲ龍花ノ月二期セムトヲモ
 フ。
 功德ハヤシヲナスアマネク惠花ヲ四生ノ意樹ニヒラキ菩
 提タネヲワカツマサニ甘露ヲ六趣ノ心田ニソ、ガム。妙
 音院作

佛 寺

十方佛士ノナカニハ西方ヲモテノゾミトス九品蓮臺ノア
 ヒダニハ下品トイフトモタリヌベシ。
 十惡トイヘドモナヲ引攝ス疾風ノ雲霧ヲヒラクヨリモハ
 ナハダシ一念トイヘドモカナラズ感應スコレヲ巨海ノ涓
 露ヲイル、ニタトフ。
 願(ク)ハ今生世俗文字ノ業狂言綺語ノアヤマリヲモテ
 カヘシテ當來世々讚佛乘ノ因轉法輪ノ縁トセム。
 極樂ノ尊ヲ念ジタテマツルコト一夜山月マサニマドカナ
 リ勾曲ノ會ニサイダテルコト三朝洞花ヲチナムトス。
 昔切利天ノ安居九十日赤梅檀ヲキザムデ尊容ヲ摸シ今跋
 提河ノ滅度ヨリ二千年紫磨金ヲミガイテ兩足ヲ禮シタテ
 マツル。
 佛ノ神通ヲモテモイカデカクミツクサム僧祇劫ヲヘテモ
 朝宗セムトス。
 生アルモノハカナラズ滅ス釋尊イマダ梅檀ノケブリヲマ
 スガレズタノシミツキテカナシミキタル天人ナヲ五衰ノ

諸樂客舍傳寫之原本法隆寺
東院所傳 藤 貞 幹

日ニアヘリ。

波アラツテキユナムトス竹馬ニムチウ(ツ)テカヘリミ
 ズアメウ(ツ)テヤブレヤスシ芥鷄ヲタ、カハシメテナ
 ガクワスレヌ。
 雪ツキコホリトクル日溪鳥ヲトモナ(ツ)テ法音ヲツタ
 ヘ月殘露ムスブアシタ籬花ヲオ(ツ)テ佛界ニ供ス。タ
 テマシル異説
 月重山ニカクレヌレバ扇ヲ撃テコレヲタトヘ風大虚ニヤ
 ミヌレバ樹ヲウゴカシテコレヲチシフ。
 中夜八十ノ火假ニ鶴林ノケブリヲトナヘ東方五百ノチリ
 ナガク鶯峰ノ月ニカ、レリ。
 前途ホドトヲシ思ヲ鴈山ノユウベノクモニハセ後會期ハ
 ルカナリ纓ヲ鴻臚ノアカツキノナムダニウルヲス。
 已上詠數六十七首博士口傳悉奉授于琳弘敬禪房了輒更
 不可有披露者也先達等被祕存也又三首奉授者也
 正應五年三月日聖立 花押

琳弘生年二十三年月日寫點了

寬政四年壬子仲冬廿八日於

第六 朗詠要集

【索引】

一 和漢朗詠集註索引

- 一、漢詩文は語句の頭字の總畫によりて類聚し、和歌は上下二句に分ち各其の頭字によりて五十音順に排列す。
- 二、漢詩文にして動詞、接續詞等が句の頭にある語句は國文に讀み下し、其の頭字の總畫によりて漢詩文の外に之れを擧ぐ。

甲 漢 詩 文

一 畫

- 一千年色雪中深……………二〇八
- 一月の花に翻翻たり……………二一三
- 一片西傾之月……………二二七
- 一旦乘雲而何益……………二三八
- 一生西望是長襟……………二四二
- 一生之歡會是同……………二四四
- 一行斜雁雲端滅……………二三八
- 一妍に託して以つて始めてとぶ……………二七〇
- 一身之壯心老思……………二七五
- 一夜林霜葉盡紅……………二八六
- 一念と雖必ず感應す……………二九〇
- 一張弓勢月當心……………二九七
- 一項未知五陰之地……………三〇九
- 一葉舟中載病身……………三二四
- 一葉舟中萬里身……………三二四
- 一葉舟飛不待秋……………三三三
- 一盞寒燈雲外夜……………三三三
- 一道風光任意看……………三三三
- 一樹之春色秋聲……………三三五

- 一聲鳳管……………二五五
- 一聲之雨空灑……………二九八
- 一聲山鳥曙雲外……………二五三
- 一點愁眉落月邊……………二六八
- 一點窓燈欲滅時……………二六八
- 一灑故人文……………二八一

二 畫

- 二月之雪落衣……………二〇三
- 二月餘花野外飛……………二三八
- 二千里外故人心……………二七三
- 二星適逢……………二八四
- 七尺屏風其徒高……………二八八
- 七萬里之程分浪……………二九一
- 八十三年功德林……………二九八
- 八月九月正長夜……………三〇〇
- 九品蓮臺之間……………三〇〇
- 九枝燈盡唯期曉……………三〇三
- 九夏三伏之暑月……………三〇四
- 十二廻中……………三〇七
- 十二因緣心裏空……………三〇六
- 十二樓之構挿天……………三〇九

三 畫

- 十八公榮霜後露……………三二四
- 十月江南天氣好……………三二二
- 十方佛土之中……………三三〇
- 十分にひかへて其の彩を蕩せば……………二八一
- 十年離別故人稀……………三三六
- 十惡と雖なほ引攝す……………三三〇
- 人之送我何日……………三三二
- 人如鳥路穿雲出……………三三五
- 人被鶴立徘徊……………三二九
- 人烟一穗秋村僻……………三三四
- 人間却踏白雲天……………三三三
- 人間榮耀因緣淺……………三三四
- 人間禍福愚難料……………三三八
- 人無更少時須惜……………三〇九
- 人道蘆花過雨餘……………一七四
- 丁令威之詞可聽……………二五〇
- 入松易亂……………三三八
- 又見林園白露圓……………四〇三
- 又是涼風暮雨天……………一九六

- 三五夜中新月色……………一七三
- 三尺劍光氷在手……………三五七
- 三代を過ぎて猶沈めり……………三九〇
- 三百盃と雖、強ちに辭すること莫れ……………三六三
- 三秋而宮漏正長……………一九八
- 三秋岸雪花初白……………二二六
- 三春鴈北飛……………二〇一
- 三壺雲浮……………二九一
- 三暹に先ちて其の花を吹けば……………一八二
- 三聲猿後垂鄉淚……………二四四
- 千丈凌雪……………二四〇
- 千年之翠滿手……………一〇三
- 千株松不双峯寺……………二〇四
- 千里往來征馬疲……………三三八
- 千峯鳥路含梅雨……………一五七
- 千萬里外……………一七四
- 千聲萬聲無止時……………二二〇
- 山中景色月華低……………二九一
- 山月正圓……………三三三
- 山成向背斜陽裏……………二七八
- 山似屏風江似簾……………二七六
- 山岳半挿雲根之暗……………三三七
- 山底探薇雲不厭……………二九一

山桃復野桃……………一〇〇
 山徑卷裏疑過岫……………一五五
 山深感動……………二二七
 山畦甲日稻花風……………三〇一
 山路日暮……………二九八
 山腰歸鴈斜牽帶……………二〇四
 山蟬鳴兮宮樹紅……………一六五
 山復山……………二七
 山遠雲埋行客跡……………二二
 山郵遠樹雲開處……………二二六
 山館雨時鳴自暗……………二〇六
 山を望めば幽月……………一六九
 影猶を藏せり……………二〇〇
 下品と雖足りぬべし……………三三〇
 下流を汲んで上壽を得るもの三十餘家……………一三二
 下樓桂袖顧階蹊……………一三六
 夕吹和霜利似刀……………二二四
 夕殿螢飛思悄然……………三三八
 夕霧の人の枕を埋むることを愁ふと雖……………二九
 已酉年終冬日少……………三三六
 已辨相思之字……………一七五
 已終未習千年役……………三三六
 子孫長作隔堵人……………二〇三

子猷看處鳥栖煙……………二四三
 大底四時心總苦……………一六八
 大庾嶺之梅早落……………一三九
 大都山屬愛山人……………二七三
 乃是陳丞相之舊宅……………二四四
 士女笙歌宜月下……………二六一
 寸陰を十五年の間に競ひ……………二二〇

四畫

五月蟬聲送麥秋……………一七五
 五夜將明……………一六四
 五夜之哀猿叫月……………二五三
 五城霞時……………二九一
 五嶺蒼蒼雲往來……………二二四
 五噫を歌ひてまごに去らんとす……………三九〇
 五聲宮漏初明後……………二三八
 五臺の雲に偃息することなかれ……………三三八
 月之三朝……………一〇六
 月冷風秋……………三九七
 月明千里……………二二八
 月老吹簫之地……………二三〇
 月苦風凄砧杵悲……………二二〇

月前杵怨兩眉低……………三二二
 月與秋期而身何去……………三六三
 月澄四十尺餘……………二三四
 月照松時臺上行……………二四一
 月照平砂夏夜霜……………一四四
 月隱重山兮……………三〇八
 月を藏して懐中に入る……………一五九
 日精を食ひて年顔を駐むる者五百箇歳……………一八二
 日脚波平孤鳴暮……………二八一
 日曝紅錦之幅……………二〇〇
 日に整き威に整く……………一三三
 日を曬る暮山は青くして簇々……………二七六
 天人猶逢五裘之日……………四〇一
 天山不辨何年雪……………一六八
 天外遊絲或有無……………一〇一
 天醉于花……………二〇六
 天寶遺民見漸稀……………三七五
 天臺山の高巖を見れば……………三六八
 天を浸す秋水は白くして茫々たり……………二七六
 天に當りては遊織す碧羅綾……………一〇〇
 水成巴字初三日……………一〇七
 水似迴流迅瀨間……………二七八

水底摸書雁度時……………二八二
 水泛紅衣白露秋……………一五一
 水面風馳瑟瑟波……………二四五
 水面無塵風洗池……………二一五
 水面新虹未展巾……………二〇四
 水復水……………二七七
 水無返夕洗年淚……………三七七
 水結狐疑薄有水……………二二三
 水蘂殘花寂寞紅……………一五一
 水檻風涼不待秋……………一四九
 水驛路穿兒店月……………二八〇
 水を拂ふ柳花は千萬點……………一〇九
 不向蓬萊王母家……………三三一
 不老門前日月遲……………三九三
 不言之唇先咲……………一〇八
 不改朝天之門……………二〇五
 不妨蕭郎枉馬蹄……………三九九
 不知何歲月……………二〇一
 不知秋送二毛來……………一六一
 不待芳菲之候……………九
 不是花中偏愛菊……………一八四
 不是禪房無歡到……………一四七
 不是蟬悲客意悲……………一五八
 不堪紅葉青苔地……………一六六

不期夜漏初分後……………一五九
 不論貴賤與親疎……………一三三
 不醉黔中爭去得……………一七
 不獨記東都履道里……………三三三
 不辨仙源何處尋……………一〇五
 不變閨水之橋……………三三五
 今日不知誰計會……………九三
 今日庭前之花……………二六四
 今日逢君已白頭……………三六八
 今日の新なる饑饉に宛てんと欲して……………三三三
 今年異例陽先斷……………一五八
 今年閏在春三月……………一三三
 今作江湖潦倒翁……………三七五
 今促畫熊……………三三〇
 今跋提河之減度……………三二一
 今宵旅宿在詩家……………二二一
 王子晉之昇仙……………三六三
 王尹橋傾雁齒斜……………三六三
 王弘使立晚花前……………四〇三
 王尚書之運府麗則麗……………三九八
 王喬一去雲長斷……………三九四
 王朗八葉之孫……………三六四
 王勣鄉霞鬢浪脆……………三七一

心通上下往來船……………三七一
 心期片月欲爲媒……………一六六
 心應乘興棹舟人……………三三〇
 心爲恩使……………三九五
 文章分得鳳凰毛……………二六三
 文章を魯の二十篇に味はふ……………三五九
 文章按繆白駒景……………一八
 文を好む世……………三三三
 之れを水と謂はんと欲すれば……………一三三
 之れを花と謂はんと欲すれば……………一三三
 之れを兼ねたるものは此の地なり……………三三三
 之れを兼ねたるものは我が君也……………三三三
 之れを巨海の泪露を納るゝに喩ふ……………三三〇
 中天の月に逗留することなかれ……………三三八
 中殿燈殘竹裏音……………二七
 中に就きて陽斷つことは是れ秋の天……………一六八
 巴峽秋深……………二五三
 巴猿一叫……………二七五
 巴猿三叫……………二五四

巴の字を書きて地勢を知り……………一〇六
 引十分分蕩其彩……………一八二
 引秋生手裏……………一五九
 切々暗窓下……………二〇五
 分於紫桂之林……………二九一
 代岸風兮長忘……………一四
 仁流秋津洲之外……………三三三
 太公望之週周文……………三三三
 少於樂天三年……………三三三
 公孫弘身服布被……………三三三
 毛寶龜歸寒浪底……………四〇三
 丹竈頂成仙室靜……………二九三
 片黛纒成曉月纖……………三七七
 句曲の會に先だつこと三朝……………三三三
 手を三百盃の後に分たんと欲す……………三三〇

五畫

四十五尺浪白……………三三八
 四五梁山粧雨色……………二〇一
 四時冬日最凋年……………二六
 四時零落三分減……………二二三
 四時獨誇溫和之天……………二二三

四海安危照掌内……………三〇〇
 四樂と言ふべし……………二六八
 三とは言はじ……………二七五
 玉匣三更冷漢雲……………二七五
 玉案拋林鳥獨啼……………二九三
 玉辰日臨文鳳見……………三三三
 玉斲暖兮溫泉溢……………一五六
 玉磬聲思管絃奏……………三三三
 未知英雄之所……………三三八
 未知麒麟之所蟠也……………三三八
 未到常樂之門……………三三三
 未叙別緒依依之恨……………三三三
 未多遮得上樓人……………二八
 未拋疑於上弦之月懸……………二〇三
 未遁春花夢裡名……………四〇一
 未だ常樂の門に到らず……………三三三
 世上風波老不禁……………三三八
 世推其仁……………三三四
 世事推之蕭心……………一〇四
 世事從今口不言……………三三四
 世俗の皆空なるを覺る……………三〇五
 白片落梅浮澗水……………二二三
 白玉裝成頃嶺梅……………二四

白珠秋寫水精盤……………三六三
 白雲不著下山來……………三三八
 白頭獨憶君……………三三八
 白頭夜禮佛名經……………三三五
 白霧山深鳥一聲……………三三五
 石上題詩拂綠苔……………三三七
 石火光中寄此身……………三三〇
 石床留洞嵐空拂……………三三三
 石に觸るゝ春の雲……………三三〇
 は枕の上に生じ……………三三〇
 石に濺ぐ飛泉は……………一九九
 雅琴を弄す……………一九九
 石に礙りて遅く來……………一七七
 れば心竊に待つ……………一七七
 水消田地蘆雖短……………三九五
 水消浪洗舊苔巖……………三九六
 水消見水多於地……………三三三
 水消漢主應疑蜀……………三三三
 冰封水面開無浪……………三三三
 以西方爲望……………三三〇
 以秋施與太應難……………一八六
 以佛神通爭酌盡……………三三四
 以爲到岸之途……………三三五
 可憐九月初三夜……………三二七
 可憐多景似春花……………三二二

可獨終身數相見……………三三三
 去而不返……………三三三
 去衣曳浪霞應濕……………三三六
 外人不識承恩處……………三三六
 外物獨醒松澗色……………三三六
 生衣欲待家人着……………三三三
 生計拋來……………三三八
 生者必滅……………三三〇
 立於庭上頭爲鶴……………三三〇
 立登師傳……………三三〇
 北斗星前橫旅雁……………三三〇
 北陸豈亦詩國……………三三二
 仙方之雪魄色……………三三六
 仙白風生空簸雪……………三三六
 仙郎靜翫禁園間……………三三三
 仙源を辨へず何れ……………一〇五
 の處にか尋ねん……………一〇五
 他日遂迷秦虎口……………三三五
 叩絃來往月明中……………三二六
 叩凍負來寒谷月……………三二五
 只思風烟之可翫……………三三五
 叫漢遙驚孤枕夢……………三二五
 正是當吾鬢白時……………一九四
 布政之庭……………三三三

平沙渺渺……………三七八
 由來感思在秋天……………三七八
 令知皇唐大和歲……………三三三
 出紫闥而東望……………三三七
 失路於黃砂積之裏……………三三五
 且南暮北……………三三五
 玄多素雪之寒朝……………三三〇
 半日の客となると雖……………三三二

六畫

百千萬莖薺青……………三三八
 百千萬劫菩提種……………三三〇
 百王理亂懸心中……………三三〇
 百步亂風……………三三〇
 百里奚乞食於道路……………三三三
 百般攀折一時情……………三三三
 此一兩句可重詠……………三三二
 此火應鑽花樹取……………三三二
 此花非是人間種……………三三二
 此花開後更無花……………三三二
 此夜清明玉不如……………三三五
 此の夕の好きに……………一七四
 勝るはなし……………一七四

耳に滿つる者は……………三九九
 樵歌牧笛の聲……………三九九
 耳倦秦城調畫箏……………三九九
 多見栽花悅目壽……………三九九
 多時縱醉驚花下……………三九九
 多被當時節物牽……………三九九
 多くは樓に上る……………三九九
 人を遮り得ず……………三九九
 名を聞いて戯れに借……………三九九
 老を契らんと欲す……………三九九
 同李陵之入胡……………三九九
 同類を相求むる……………三九九
 に感ずるは……………三九九
 合浦應迷舊日珠……………三九九
 向晚簾頭生白露……………三九九
 亦是齊帝寵愛……………三九九
 第八之子也……………三九九
 亦當晴猶殘……………三九九
 地脉和味……………三九九
 地是龍門趁水登……………三九九
 朱買臣の衣を穿つ……………三九九
 朱雀院之新家也……………三九九
 朱檻の前に逍遙す……………三九九
 有色易分殘雪底……………三九九
 有時當戶危身立……………三九九
 有理世安樂之音……………三九九

有閑居泰適之叟……………三三三
 在衆醜而永異……………三三〇
 舟中浪上……………三三〇
 舟を明月映の……………三二五
 邊に停めて……………三二五
 守家一犬迎人吠……………三三〇
 匡廬山之杏未開……………三二九
 兩三行雁點雲聲……………三二九
 帆開青草湖中去……………三二九
 吏部侍郎職侍中……………三二九
 因君鞭撻子孫多……………三二九
 早晚笙聲歸故溪……………三二九
 色ありて分ち易……………三二六
 し残雪の底……………三二六

七畫

見天臺山之高巖……………三三八
 見此爭無一句詩……………三二九
 言不暗生消骨火……………三二九
 言語巧偷鸚鵡舌……………三三三
 言ふ莫れ秋の後に遂……………三三八
 に空とならんと……………三三八
 谷水洗花……………三三八
 谷靜纔聞山鳥語……………三三五
 赤莢挿宮之衣……………三三八

竹竿頭上願絲多……………三六四
 竹風鳴葉月明前……………三六八
 竹班湘浦……………三三〇
 竹馬に鞭ちて顧みず……………三三二
 竹院君閑銷永日……………三二二
 竹霧曉籠衡嶺月……………三二九
 老眼早覺常殘夜……………三二五
 考翁年晚鬢相驚……………三二七
 老眼易迷殘雨裏……………三三九
 老菊衰蘭三兩叢……………一九〇
 老鶴心閑緩緩眠……………二五一
 老鶴從來仙洞鶴……………二八七
 老を送る高僧は……………三三九
 首に霜をそる……………三三九
 如今却似畫圖中……………三六五
 如振群鶴之毛……………二二九
 如曉星之轉河漢……………一八二
 好文之世……………三四三
 西方を以て望となす……………三三〇
 西母之雲欲歸……………三三四
 西京席門……………三三四
 西施顔色今何在……………三三三
 西樓月落花間曲……………三二七
 曲水雖遙……………一〇六

一曲驚楚客秋絃韻……………一九二
 池色溶溶藍染水……………三三三
 池冷水無三伏夏……………一四八
 池有浪文水盡開……………三三三
 池凍東頭風度解……………三九一
 池邊別業是何人……………三〇三
 江弄瓊花帶碧文……………三二五
 江路之征帆盡去……………二七八
 江淹一時之友……………二六四
 江從巴峽初成字……………三三三
 江都之好勁捷也……………三三八
 江霞隔浦人烟遠……………三三六
 汝と同じく歸……………三〇一
 るを得ん……………三〇一
 列子懸車不往還……………三三九
 列子の乘を送るべし……………三三六
 自吾閑寂家僮倦……………三九四
 自知其貴……………三三四
 自疑荷葉凝霜早……………三三四
 衣濕黃梅雨裡行……………三三九
 衣をうつ砧の上に……………一七三
 は俄かに怨別の……………一七三
 聲を添ふ……………一七三
 再三憐汝非他事……………三三五
 再養平臺一片霞……………三三九

耳に滿つる者は……………三九九
 樵歌牧笛の聲……………三九九
 耳倦秦城調畫箏……………三九九
 多見栽花悅目壽……………三九九
 多時縱醉驚花下……………三九九
 多被當時節物牽……………三九九
 多くは樓に上る……………三九九
 人を遮り得ず……………三九九
 名を聞いて戯れに借……………三九九
 老を契らんと欲す……………三九九
 同李陵之入胡……………三九九
 同類を相求むる……………三九九
 に感ずるは……………三九九
 合浦應迷舊日珠……………三九九
 向晚簾頭生白露……………三九九
 亦是齊帝寵愛……………三九九
 第八之子也……………三九九
 亦當晴猶殘……………三九九
 地脉和味……………三九九
 地是龍門趁水登……………三九九
 朱買臣の衣を穿つ……………三九九
 朱雀院之新家也……………三九九
 朱檻の前に逍遙す……………三九九
 有色易分殘雪底……………三九九
 有時當戶危身立……………三九九
 有理世安樂之音……………三九九

有閑居泰適之叟……………三三三
 在衆醜而永異……………三三〇
 舟中浪上……………三三〇
 舟を明月映の……………三二五
 邊に停めて……………三二五
 守家一犬迎人吠……………三三〇
 匡廬山之杏未開……………三二九
 兩三行雁點雲聲……………三二九
 帆開青草湖中去……………三二九
 吏部侍郎職侍中……………三二九
 因君鞭撻子孫多……………三二九
 早晚笙聲歸故溪……………三二九
 色ありて分ち易……………三二六
 し残雪の底……………三二六

七畫

見天臺山之高巖……………三三八
 見此爭無一句詩……………三二九
 言不暗生消骨火……………三二九
 言語巧偷鸚鵡舌……………三三三
 言ふ莫れ秋の後に遂……………三三八
 に空とならんと……………三三八
 谷水洗花……………三三八
 谷靜纔聞山鳥語……………三三五
 赤莢挿宮之衣……………三三八

赤梅檀を刻みて 尊容を摸す 三二
 身化早爲胡朽骨 三六
 身埋胡塞千重雪 三八
 身を翫すれば岸の額 四〇
 に根を離れたる草 四〇
 辰星早没夜初長 四一
 邑隣建德非行步 四二
 車前驥病驚駘逸 四三
 君子夜深聲不警 四四
 君見金翠無顔色 四五
 君是當初竹馬童 四六
 君聞關關不馨香 四七
 君と後會何れの 處か知らん 四八
 君がために衣裳 に薫すれども 四九
 君がために容飾を 事とすれども 五〇
 君に囚りて子孫を 鞭撻すること多し 五一
 吾が家の光を争ふ 五二
 吾が閑寂にして家童 の倦みたるより 五三
 含元殿角管絃聲 五四
 含自消 五五
 含雨嶺松天更霽 五六

吟亦寒玉一聲 三九
 吹を逐ひて潜に開く 四〇
 听砌飛泉轉倍聲 四一
 坐在爐邊手不龜 四二
 坐制諸侯 四三
 巫女廟花紅似粉 四四
 巫の三峽に棹さすと も未だ危しとせず 四五
 我之送人多年 四六
 我王孝行先何到 四七
 我后一日之澤 四八
 我が爲めに今朝 一盃をつくせ 四九
 但有泉聲洗我心 五〇
 但有双松當砌下 五一
 但能心靜即身涼 五二
 但見異類 五三
 但喜暑隨三伏去 五四
 但憐大庾萬株梅 五五
 何工削成青巖之形 五六
 何處庭前新別離 五七
 何處爽籟於風境 五八
 何によりてか更に吳 山の曲を覓めん 五九
 佛の神通を以つて争 つかぬみつくさん 六〇

似屈原之在楚 六一
 低翅沙鷗潮落曉 六二
 更逗留於孤雲之路 六三
 更無一事到心中 六四
 更無俗物當人眼 六五
 更闌夜靜 六六
 更隨加草德風來 六七
 沙月に當りて自 から得たり 六八
 沙長爲巖之頰 六九
 沙暖鴛鴦數翅眠 七〇
 沙頭雨染班班草 七一
 沙頭刻印鷗遊處 七二
 沙を穿つ蘆笋は 葉纒に分る 七三
 沙を鑽る草は只 三分ばかり 七四
 汲下流而得上壽 者三十餘家 七五
 汲黯譏其多許 七六
 沈辭怫悅 七七
 折柳聲新手搦煙 七八
 折梅花而挿頭 七九
 扶桑豈無影乎 八〇
 床上卷收青竹簾 八一
 床嫌短脚蓋聲聞 八二

李夫人去漢皇情 八三
 李延年之飭族 八四
 李門波高 八五
 李陵が胡に入 りしに同じ 八六
 李將軍之在家 八七
 杖穿朱買臣之衣 八八
 材取諸已 八九
 匣中開出白綿衣 九〇
 牡羊期乳歲華空 九一
 妓爐之烟讓薰 九二
 每朝聲少漢林風 九三
 別緒依依たる 恨を叙せず 九四
 歩歩初驚葛履人 九五
 狂言綺語之誤 九六
 阮籍嘯場人步月 九七
 羊太傅之早世 九八
 刑鞭浦朽螢空去 九九

八畫
 金谷醉花之地 一〇〇
 金膏一滴秋風露 一〇一
 長生殿裏春秋富 一〇二
 長安城の遠樹 を望めば 一〇三

長夜君先去 三六二
 長門園而不開 三六三
 長風浦之昇聲猶深 三六四
 長樂歌聲 三六五
 長樂鐘聲花外盡 三六六
 門柳復岸柳 三六七
 佳人盡飾於長粧 三六八
 雨打易破 三六九
 雨初白水入門流 三七〇
 雨夜幽人耳 三七一
 雨濕原憲之樞 三七二
 雨露之恩を希 はんとす 三七三
 雨を含める嶺松 は天更に霽れ 三七四
 青山有雪譜松性 三七五
 青苔色紙敷行書 三七六
 青苔地上消殘雨 三七七
 青蛾正畫 三七八
 青絲綉出陶門柳 三七八
 青嵐吹兮皓月冷 三七八
 青羅裙帶展新蒲 三七八
 非唯織色織芬芳 三七八
 周公旦者文王之子 三七八
 周伯夷饑未必賢 三七八

周郎之簪頻動 二六
 周穆新會 二七
 咎犯謝罪文公 二八
 夜向殘更寒聲盡 二九
 夜行沙厚履聲忙 三〇
 夜雨偷穿石上苔 三一
 夜雨幽濕 三二
 夜雨聞猿斷腸聲 三三
 夜夜幽聲到鷓鴣 三四
 夜長無眠天不明 三五
 夜宿極浦之波 三六
 夜深四面楚歌聲 三七
 夜寒初共守庚申 三八
 夜登庾公之樓 三九
 夜琴華表鶴吞聲 四〇
 夜雲收盡月行遲 四一
 夜遊人欲尋來把 四二
 夜鶴眠驚松月苦 四三
 夜鶴憶子籠中鳴 四四
 夜を逐ひて光多 し吳死の月 四五
 林下幽閑氣味深 四六
 林中花錦時開落 四七
 林間燬酒燒紅葉 四八

林霧校聲鶯不老 四九
 林變容輝宿雪紅 五〇
 林鷲何處吟筆柱 五一
 林を辭する舞蝶は 五二
 松伯の後に凋ま んことを契る 五三
 松高風有一聲秋 を摩すれば 五四
 松寒風破旅人夢 五五
 松影君子之德 五六
 松樹千年終是朽 五七
 松樹に倚りて以て 腰を摩するは 五八
 東平蒼之雅量 五九
 東出西流 六〇
 東岸西岸之柳 六一
 東都の履道里 六二
 東顧亦有林塘之妙 六三
 枝繁金鈴春雨後 六四
 枝を染め浪を染む 六五
 枕に落つる波の聲 は岸を分つ夢 六六
 昔初利天之安 居九十九日 六七
 昔年顧我長青眼 六八

昔爲京洛聲華客 六九
 昔聚丹鳥 七〇
 明月好同三徑夜 七一
 明月映之曉色不盡 七二
 明君の魂を惱ま さんと欲す 七三
 明明仍在 七四
 明鏡乍開隨境照 七五
 昇殿是象外之選也 七六
 河上に逡巡す 七七
 河海不厭細流 七八
 波頭謫處日晴看 七九
 空夜窸窣度後 八〇
 空階雨滴 八一
 空嶽峻嶮豈生松 八二
 空を觀ずる淨侶は 心に月をかく 八三
 空しく上陽の春を 管領する莫れ 八四
 物色自堪傷客意 八五
 牧童寒笛倚牛吹 八六
 往事渺茫都似夢 八七
 征路に赴きて 獨行く子 八八
 拂水柳花千萬點 八九

拂霜拾畫暮山雲……………三三五
 抽簪於北山之北……………三三五
 拔則秋霜三尺……………三三九
 其の磧礫を翫び玉淵を窺はざるものは……………三三八
 其の解邑に習ひて上邦を視ざるものは……………三三八
 其奈華亭鶴警何……………三一九
 泣孤城百戰之師……………三三三
 泣賣先朝舊賜筆……………三三七
 泣尋沙塞出家鄉……………三三七
 法皇の道に暗きが如し……………三四四
 姑蘇臺之露瀼瀼……………三三六
 始識春風機上巧……………三四四
 妬無情於機婦……………三三七
 近日那離獸炭邊……………三二六
 迎春乍變……………三一九
 官途自此心長別……………三二四
 宜將愁字作秋心……………一六六
 宛轉雙蛾遠山色……………三三九
 定是終身奉帝王……………三三七
 武勇を漢の四七將に拉くと雖……………三三九
 武王之弟……………三四四
 岸口風來混葉顛……………三三〇

岸白還迷松上鶴……………一七五
 岸竹枝低應鳥宿……………一五三
 岸風論力柳猶強……………三三八
 岸風に代りて長く忘れたり……………四〇七
 岸柳秋風遠塞情……………三三五
 岩泉咽兮嶺猿吟……………三四四
 到岸の途となす……………三四四
 刻赤梅檀而摸尊容……………三三二
 使君金紫稱花前……………三六一
 來而不留……………一九三
 孤花露帶殘粉……………二八七
 孤城に泣きて百たび戦ふ師……………三三七
 孤雲の路に逗留し……………三三三
 孤雲に鞭ちて志を養ふ……………三三九
 孤館宿時風帶雨……………三三四
 孤帆連水與雲消……………三二五
 知らず何れの歳月か……………三〇一
 知汝花中植善根……………一五二
 和風先導靈煙出……………三七一
 和風漫入五絃彈……………三五一
 和菜羹而噉口……………三〇二
 和琴緩調臨潭月……………三三四

命依義輕……………三六五
 命を論ずれば江の頭に繫がざる舟……………四〇〇
 初見穿水之紅艷……………三七一
 初得難遇一乘文……………三三六
 忠仁公者皇帝之祖……………三五四
 念極樂之尊一夜……………三三三
 怪むなけれ紅巾の面を遮りて咲めるを……………三三九
 花下忘歸因美景……………九
 花月一窓交音昵……………三九四
 花光焰焰火燒春……………三三一
 花色如蒸栗……………一八八
 花每春句而主不歸……………三三三
 花明上苑……………三三一
 花亭我醉送殘春……………二二
 花豈重春暮齒粧……………三三七
 花船棹入女湖春……………一八
 花開合掌不因春……………三三五
 花開香散入簾風……………一五二
 花間寬友警交語……………三一九
 花新開日初陽潤……………三二
 花梅歸根無益悔……………三三
 花落隨風鳥入雲……………三三
 花飛如錦懸濃粧……………三三三

花藥如舊……………二七七
 花黨紫鸞飄風程……………一五〇
 花を踏みては同じく惜む少年の春……………一〇二
 芳林携客醉眠花……………三三八
 芳菲の候を待たず……………九
 芝蘭の先づ敗るゝことを嘲る……………一八四
 芥鷄を闘はして長く忘れたり……………三三二
 或垂花下……………三三〇
 或添孤婦砧上……………二七
 或逐風不返……………三三九
 尙書亦天下之望也……………三三九
 炎景剩殘衣尙重……………三三三
 幸逢堯舜無爲化……………三四一
 垂釣者不得魚……………三八一
 奇大吠花聲……………三九一
 庚申夜半曙光暈……………三三八
 屈原が楚にありしに似たり……………三四九
 表裏一入再入之紅……………三三三
 孟賁をして追はしむとも……………一八六
 函谷鷄鳴……………三三六

九畫

卷を開きて己に子爲る道を知る……………三四八
 季文子妾不衣帛……………三三三
 放野群牛引犢休……………三〇一
 事事無成身也老……………三八九

春情難繫夕陽前……………三三九
 春無春色……………二八六
 春過夏蘭……………三三六
 春嬌黃珠懶柳風……………三一九
 春歸人寂寞……………二二〇
 春樹春栽秋草秋……………一九四
 春を迎へて乍ら變ず……………九
 春を留むるに關城の回を用ゐず……………一三三
 春の花の夢の裡の名を遁れず……………四〇二
 春を送るに舟車を動かすを用ゐず……………一一二
 春を留むれども春駐らず……………一一〇
 昭君若贈黃金路……………三三七
 昭君村柳翠於眉……………三二八
 昨日山中之木……………二六四
 風生竹夜窓間臥……………一四四
 風吹枯木晴天雨……………一四四
 風枝未定鳥栖難……………二二五
 風枝蕭颯欲秋聲……………二四二
 風烟の翫ぶべきを思ふ……………三三五
 風底香飛雙袖學……………二二二
 風起花蕭索……………二〇〇
 風息大虛兮……………三三八

風流未必敵於崑閬……………三四三
 風荷老葉蕭條綠……………一五一
 風從昨夜聲彌怨……………一六五
 風動清漪水面皺……………二三五
 風銜松葉雅琴清……………二〇八
 風雲易向人前暮……………二二四
 風頭岸遠客帆寒……………二八一
 風霜の犯しがたきを習ふ……………一〇二
 風柳麴塵之絲……………一〇〇
 風襟蕭灑先秋涼……………一四六
 風飄白浪花千片……………三三七
 風櫓瀟湘浪上舟……………一〇三
 風に和して漫に五絃の彈に入る……………二五
 風に臨める杪秋の樹……………二六七
 風を逐うて返らず……………二二九
 風を厭へども風定らず……………二一〇
 秋天思婦心……………二〇五
 秋水未鳴遊女佩……………三三三
 秋水見於何處……………二八〇
 秋水漲來船去速……………一七七
 秋水養河伯之民……………二七七
 秋月高懸空碧外……………二八三
 秋有秋聲……………二八六

秋房始結白芙蓉……………一三七
 秋來只爲一人長……………一七一
 秋夜待月……………三三一
 秋夜長……………一七〇
 秋風吹而先敗……………一九一
 秋風計會似空虛……………一七四
 秋風滿袂淚……………三八一
 秋風拂松疎韻落……………二五六
 秋風悵望鼎湖雲……………三四八
 秋破商客之夢……………二五四
 秋庭不拂携藤杖……………一九八
 秋景早移……………一八四
 秋悲不到貴人心……………一九八
 秋燈挑盡未能眠……………三九八
 秋驚秦嶺之雲……………二五六
 秋露梧桐葉落時……………三九八
 秋の二毛を送り來るを知らず……………一三三
 秋の月の波の中の影を觀ると雖……………四〇二
 秋の雪の洛川に廻るか疑ふ……………一三三
 秋を引いて手裏に生ず……………一五九
 秋を以て施與せんとはただ難かるべし……………一八六

秋を燒く林葉は火還つて寒し……………二四一
 泉下故人多……………三六二
 泉飛雨洗聲聞夢……………三〇七
 泉聲遙落白雲中……………二七三
 洞中栽樹鶴先知……………二九一
 洞中清淺瑠璃水……………二九六
 洞花欲落……………三三三
 洞裏移家鶴卜隣……………二九九
 洲芳杜若抽心長……………二七九
 洲蘆夜雨他鄉淚……………三三五
 洛水高低兩顆珠……………一七四
 洗來寧辨藥君臣……………一三二
 洋洋滿耳……………三三三
 若使榮期兼解醉……………二六八
 若使韶光知我意……………二二一
 若遊魚鉤而……………二六二
 出重淵之底……………二六二
 若翰鳥縷縷而墜曾雲峻……………二六二
 英雄の躡む所を知らず……………三六八
 范蠡收責……………三六九
 范蠡收責負踐……………三六八
 范蠡扁舟之泊……………二七七
 范別駕の遺文を集む……………二六四
 苔生石面輕衣短……………一四三

南山芝潤……………三五四
 南枝北枝之梅……………九五
 南翔北鶴……………三九八
 南望則有關路之長……………二九九
 南樓月下擣寒衣……………二二〇
 南樓翫月之人……………三六三
 後人立祠於嶺嶺之月……………三六三
 後會期遙……………三三〇
 相思夕上松臺立……………一六九
 相如昔挑文君得……………二五六
 看無野馬聽無鶯……………二二五
 俗人屬之夷指……………一〇四
 俗呼爲女郎……………一八八
 俗骨不可以蹈蓬萊之雲……………三六九
 便作求車之所……………三〇五
 便是吾君座下花……………一五三
 俄添怨別之聲……………一七三
 促齡良木其摧歎……………三六四
 故山無主晚雲孤……………二九五
 故能成其高……………二七四
 故能成其深……………二七四
 故事を漢武に採る……………一八一
 政を布く庭……………三三三
 紅花定昔管絃家……………二八五

紅旗風卷畫龍揚……………三三四
 紅榮黃落……………三七五
 紅葉聲乾鹿在林……………二〇七
 紅燭空餘……………二二六
 紅と雖是れは春ならず……………二六七
 執扇拋來青黛露……………二七三
 胡角一聲霜後夢……………三六七
 胡塞誰能全使節……………三三四
 胡笳未歇……………二七七
 胡馬忽嘶……………二七五
 胡雁一聲……………二五四
 背壁燈殘經宿焰……………一四二
 背獨共憐深夜月……………一〇二
 是非老之幸哉……………三七六
 是れ花の心憲臺……………一四〇
 を忘るべし……………一四〇
 是れ花の中に偏に菊を愛するにはあらず……………一八四
 是れ花の時に世尊に供らんおためなり……………一九四
 是れ禪房に熱の到ること無きにあらず……………一四七
 是れ蟬の悲しきのみにあらず客の意悲しきなり……………一五八
 柳色和烟入酒中……………二二三

柳無氣力條先動……………九三
 架上鷹閑鳥雀高……………三八八
 染枝染浪……………一三三
 皇后之父……………三五四
 皇甬謚之述百王……………三四四
 皇唐大和の歳……………三三三
 幽咽鳳凰管之裏……………二六六
 幽思不窮……………三三五
 前途程遠……………三三〇
 前頭更有蕭條物……………一九〇
 恨同伯鸞……………三九〇
 恨唯有紅顔之質……………二九八
 思魏文以翫風流……………一〇六
 思を四方の風に傷ましむ……………三四〇
 思を雁山の暮の雲に馳す……………三〇〇
 怒不関於俗人……………二七七
 扁舟に五湖に乗る……………三三七
 扁舟に棹さして名を逃る……………三九九
 咽霧山鶯啼尚少……………二一五
 睽中偷銳刺人刀……………三九一
 咸陽宮之烟片片……………二八六
 重疊烟嵐之斷處……………三二七

面月長留十五天……………三二四
 契松栢之後凋……………一八四
 皆爭於吾家之光……………一七四
 珍重紅房透翠簾……………三三二
 臥見新圖臨水障……………一四七
 城柳宮槐漫搖落……………一九八
 貞女峽空唯月色……………三九九
 客思唯從枕上生……………二二三
 室有師跡……………三三八
 甚於疾風披雲霧……………三三〇
 奔箭易迷……………二〇一
 赴征路獨行之子……………三三七
 省躬還耻相知久……………三九五

乘扁舟於五湖……………三三七
 馬相如賦只凌雲……………二六四
 馬惡衣香欲噴人……………三九九
 馬に策ちて來る時……………二〇五
 鬼を一車に載すとも何ぞ畏るゝに足らん……………元一
 高低千顆萬顆之玉……………三三三
 骨を埋むれども名を埋めず……………二六三
 凍を叩きて負ひ來る寒谷の月……………三五五

兼之者此地也……………三三三
 兼之者我君也……………三三三
 夏日思蓮……………二七一
 唐太子賓客白樂天……………二四三
 唐太子賓客白樂天……………二六七
 唐樽高推入水烟……………二七四
 翅似得群栖浦鶴……………三三〇
 翅を低るゝ沙鷗は潮の落つる曉……………一〇九
 晋建威將軍劉伯倫……………二六七
 晋騎兵參軍王子猷……………二四三
 時舞鬢間……………二二〇
 時ありて戸に當りて身を危めて立てり……………一四五
 時に先ちてあらかじめ養うて開くを待ちて遊ぶ……………一九四
 晩に向として簾の頭に白露を生じ……………二八八
 裁稱此君……………二四三
 桃李不言春幾暮……………二九三
 桃李淺深似勸益……………一〇七
 桃李盛也……………一〇六
 桓公任之以國……………三三三
 桂陽鑠之文辭……………三三七
 桐葉風涼欲夜天……………一六三

班女閨中秋扇色……………三三一
 班姬裁扇應誇尙……………三三九
 班婕妤團雪之扇……………一四七
 留春不用關城固……………二二
 留春春不駐……………一〇
 倚松根而摩腰……………一〇三
 倚松樹以摩腰……………一〇三
 氣味の克く調ふを期す……………一〇二
 氣調如兄……………三六八
 氣鬢風梳新柳髮……………六
 耿耿星河欲曙天……………一七〇
 耿耿殘燭背壁影……………一七〇
 書巴字而知地勢……………一〇六
 書卷展時逢故人……………三三四
 書窓有卷相收拾……………一元
 家交江河南北岸……………三七四
 家留空作漢荒門……………三六六
 家鄉悉沒烟樹之深……………三七七
 家を守る一犬は人迎へて吠ゆ……………三〇一
 宮車一去……………三三三
 宮人の才色兼ねたるを算へ取る……………三七一
 容貌似舅……………三六八

宴を罷むる瓊筵のほとりに……………三三八
 豈趁紅艷……………二九
 豈積雪片於床頭……………一五五
 秦甸之一千餘里……………一七一
 秦皇驚歎……………四〇三
 託一妍以始飛……………三七〇
 託縮異代之交……………三八〇
 恐歸舊里……………二九三
 恐惡衰翁首似霜……………一八八
 徐君塚上扇猶懸……………三三九
 徐詹事の舊草を撫ふ……………二六四
 烟波惟新……………二七七
 烟波夜宿一漁船……………三九五
 烟消門外青山近……………二三四
 煙添柳色看猶淺……………二五
 烟開翠扇清風曉……………一五一
 煙葉蒙籠侵夜色……………二四二
 烟霞遠近應同戶……………一〇七
 烟霞無跡昔誰栖……………二九三
 草木扶疎……………二七七
 草色拘留坐水邊……………一五
 草色雪晴初布護……………二四六
 草色晴來嬾似烟……………一九

| | | | |
|------------|-----|------------|-----|
| 草滋顏淵之巷 | 三二五 | 流水不歸 | 三三八 |
| 荒涼隣月擣衣程 | 三〇一 | 流水無心自入池 | 三三五 |
| 荒籬見露秋蘭泣 | 二八八 | 流於紅桃之浦 | 三二九 |
| 茶能散悶爲功淺 | 三六八 | 流に牽れて過くすぐ | 三〇七 |
| 送老高僧首剃霜 | 三三九 | れば手先づ遮る | 三〇七 |
| 送春不用動舟車 | 一一一 | 浪洗欲消 | 三三二 |
| 送笋未抽鳴鳳管 | 二四三 | 浸天秋水白茫茫 | 二七六 |
| 庭上蕭條錦繡林 | 二九六 | 泰山不讓土壤 | 二七四 |
| 庭上に立ちて | 三〇〇 | 穿沙蘆葉纒分 | 一一五 |
| は頭鶴たり | 三〇〇 | 竊娘堤舊獨波聲 | 三九九 |
| 庭增氣色晴砂綠 | 九七 | 病力先衰不待年 | 三七五 |
| 庫車軟轡貴公主 | 三三七 | 疾風の雲霧を披 | 三三〇 |
| 酒泉郡之民 | 二六九 | くよりも甚し | 三三〇 |
| 酒是下若村之所傳 | 二七〇 | 織者春風未疊箱 | 一一三 |
| 酒を嗜みて酒徳の頌 | 二六七 | 峯に御まれたる曉の月 | 三〇〇 |
| を作りて世に傳ふ | 二六七 | は窓の中より出づ | 三〇〇 |
| 酒を嗜みて酒功の | 二六七 | 躬を省みて還りて | 三九五 |
| 贊を作りて以て | 二六七 | 相知ることの久 | 三九五 |
| 之れに繼ぐ | 二六七 | しきを耻づ | 三九五 |
| 酒に對する長年の人 | 二七〇 | 旅店猶局 | 三三〇 |
| 海岸孤村日霽時 | 二七〇 | 孫弘閑閑無閑客 | 三三三 |
| 海賦篇中似宿流 | 一五五 | 埋骨不埋名 | 二六二 |
| 浮雲掩而忽昏 | 一九二 | 隼擊霜林破錦機 | 二〇二 |
| 浮藻聯翩 | 二六三 | 袁司徒之家雪應路達 | 三五六 |
| 浮世を以て後會を期 | 三三三 | 扇を擧げて之れを喩す | 三〇八 |
| せんと欲すれば | 三三三 | 衲衣僧代綺羅人 | 三三三 |
| 眠思餘算淚先紅 | 三三八 | 魚籠遊戯 | 二七七 |
| 殷夢の後に風 | 三五五 | 鳥下綠蕪秦苑靜 | 一五六 |
| 雲たりと雖 | 三五五 | 鳥老歸時薄暮陰 | 一一一 |
| 十一畫 | | 鳥期入谷定延期 | 一一三 |
| 鳥踏梅花落已頻 | 一一五 | 鳥聲露暖漸綿蠻 | 二四六 |
| 鳥圍山月正蒼蒼 | 一七七 | 候生豫子之投身 | 三六五 |
| 麻園山月正蒼蒼 | 一七七 | 偷綻春風未扇光 | 一一三 |
| 停舟於明月映之邊 | 二七五 | 商山月落秋鬢白 | 二九四 |
| 商山月之垂眉 | 二七六 | 商聲清脆管絃秋 | 二六七 |
| 唯有羅衣染御香 | 三六九 | 唯將老年淚 | 三八一 |
| 唯嫌年髮漸皓然 | 四〇四 | 唯翫秋風未到前 | 一九九 |
| 唯別殘鶯與落花 | 一一一 | 唯だ色を織るのみにあ | 一三四 |
| 唯らず芬芳をも織る | 一三四 | 唯峰曉月出窓中 | 三〇〇 |
| 雪似鷲毛飛散亂 | 二一九 | 雪滿群山 | 二二八 |
| 雪盡梁王不召枚 | 二二三 | 雪點林頭見有花 | 二二三 |
| 雪霽望山盡入樓 | 二二三 | 情なきを機婦に妬む | 二七〇 |
| 情なきを機婦に妬む | 二七〇 | 情無くして辨へ | 二二六 |
| 難し夕陽の中 | 二二六 | 情を一座の客に寄す | 三四〇 |
| 悵望慈恩三月盡 | 一四〇 | 惆悵春歸留不得 | 一一二 |
| 惆悵春歸留不得 | 一一二 | 梅花帶雪飛琴上 | 一一三 |
| 梅花帶雪飛琴上 | 一一三 | 梅花を折りて | 一〇三 |
| 梅花を折りて | 一〇三 | 頭に挿せば | 一〇三 |
| 梅含雜舌兼紅氣 | 二二五 | 梅嶺花桃一萬株 | 二一九 |
| 梅嶺花桃一萬株 | 二一九 | 梧岫秋風一片煙 | 三四九 |
| 梧岫秋風一片煙 | 三四九 | 梧岫影中 | 一九八 |
| 梧岫影中 | 一九八 | 梯危斜照映猿聲 | 二五五 |
| 梯危斜照映猿聲 | 二五五 | 梁元昔遊 | 三四三 |
| 梁元昔遊 | 三四三 | 張良一卷之書 | 三三九 |
| 張良一卷之書 | 三三九 | 張僕射之重新才 | 三九〇 |
| 張僕射之重新才 | 三九〇 | 推爲忘年之友 | 三八〇 |
| 推爲忘年之友 | 三八〇 | 採故事於漢武 | 一八一 |
| 採故事於漢武 | 一八一 | 第一第二絃索索 | 二五六 |
| 第一第二絃索索 | 二五六 | 第一傷心何處最 | 二六八 |
| 第一傷心何處最 | 二六八 | 第三第四絃冷冷 | 二六六 |
| 第三第四絃冷冷 | 二六六 | 第五絃聲尤掩抑 | 二六六 |
| 第五絃聲尤掩抑 | 二六六 | 笙歌夜月家々思 | 一〇一 |
| 笙歌夜月家々思 | 一〇一 | 寄情於一座之客 | 三四〇 |
| 寄情於一座之客 | 三四〇 | 寄瞻望於曉月 | 三九八 |
| 寄瞻望於曉月 | 三九八 | 窓梅北面雪封寒 | 九二 |
| 窓梅北面雪封寒 | 九二 | 寂寂閑口 | 三四三 |
| 寂寂閑口 | 三四三 | 宿釀當招邑老甜 | 一四二 |
| 宿釀當招邑老甜 | 一四二 | 望山幽月猶藏影 | 一六九 |
| 望山幽月猶藏影 | 一六九 | 望長安城之遠樹 | 三三八 |
| 望長安城之遠樹 | 三三八 | 望礙孤峰之月 | 三三一 |
| 望礙孤峰之月 | 三三一 | 得作轅皇向上人 | 三四一 |
| 得作轅皇向上人 | 三四一 | 得與汝同歸 | 一〇一 |
| 得與汝同歸 | 一〇一 | 崔季珪之小妹 | 三六八 |
| 崔季珪之小妹 | 三六八 | 嶠函を以て固 | 一八六 |
| 嶠函を以て固 | 一八六 | となすとも | 一八六 |
| となすとも | 一八六 | 理世安樂之音 | 三三三 |
| 理世安樂之音 | 三三三 | 動樹教之 | 三〇八 |
| 動樹教之 | 三〇八 | 盛夏不銷雪 | 一五九 |
| 盛夏不銷雪 | 一五九 | 釣を垂るゝ者魚を得ず | 二八一 |
| 釣を垂るゝ者魚を得ず | 二八一 | 摩陀還恐失臣忠 | 三四 |
| 摩陀還恐失臣忠 | 三四 | 牽流過手先遮 | 一〇七 |
| 牽流過手先遮 | 一〇七 | 庸才不可以攀臺閣之月 | 三六九 |
| 庸才不可以攀臺閣之月 | 三六九 | | |

| | | | |
|------------|-----|-----------|-----|
| 晚涼落鏡光知 | 一三三 | 淵變作瀨之聲 | 三三四 |
| 晚葉尚開紅躑躅 | 一三七 | 陶朱辭越之暮 | 三三一 |
| 晚鶯聲聲豫參講誦之座 | 一三六 | 陶安公之駕在眼 | 二六〇 |
| 晦跡未拋苔徑月 | 三三六 | 陶門跡絕春朝雨 | 三三七 |
| 絃を東海の東に鼓く | 三三五 | 陶家兒子不垂堂 | 一八四 |
| 絃を叩きて來往 | 二七六 | 陳孔璋詞空愈病 | 三六四 |
| 寸月明の中 | 二七六 | 陰森古柳疎槐 | 二八六 |
| 舴舺舟流夜漲灘 | 二八〇 | 陸池逐日水煙深 | 一三〇 |
| 欲謂之花 | 三三三 | 陽春曲調高難和 | 三三九 |
| 欲謂之水 | 三三三 | 莫以逗留於中天之月 | 三三八 |
| 欲分手於三百盃之後 | 三三三 | 莫以偃息於五臺之雲 | 三三八 |
| 欲以浮世期後會 | 三三三 | 莫空管領上陽春 | 一〇〇 |
| 欲宛今日新饑饉 | 三三三 | 莫言秋後遂爲空 | 一〇一 |
| 欲和豐嶺鐘聲否 | 一七九 | 莫怪紅巾遮面咲 | 三三七 |
| 欲惱明君之魂 | 三三八 | 莫使簾中子細聽 | 二五八 |
| 清冷鷓鴣盃之中 | 二六六 | 荷出池心小蓋疎 | 一四三 |
| 清唳數聲松下鶴 | 二五〇 | 逐吹潛開 | 九 |
| 淮王雞翅失留連 | 三三三 | 逐夜光多吳苑月 | 二〇〇 |
| 淮南之求神仙也 | 三四八 | 通夢夜深羅洞月 | 二九五 |
| 深更軒白月初初 | 一四四 | 逢僧談處 | 三〇五 |
| 深洞開風老檜悲 | 二八 | 逡巡於河上 | 三六七 |
| 深巷無人之處 | 三三五 | 逍遙於朱檻之前 | 二九九 |
| 淡水交情老始知 | 三三九 | 雪中放馬朝尋跡 | 三六八 |
| 淺紅嬋娟 | 二二六 | 雪月花時最憶君 | 三三九 |
| 和漢朗詠集註索引 | | | |

異氣を會して終に混じて……………二二六
 飡日精而駐年顏者五百箇歲……………二二二
 剩見金陵一月花……………二二三
 爽籟を風境に遮らんや……………二二六
 雀能穿屋……………二二八
 猜繚亂於舊拍……………二二八
 移棹者唯聞雁……………二二八
 鼓鼙於東海之東……………二二八
 將希雨露之恩……………二二九
 蛇驚劍影使逃死……………二二九
 專諸荆卿之感激……………二二九
 長積瓦溝鴛鴦色……………二二八

喧を避けて猶ほ竹窓の風に臥す……………三三六
 壺中天地乾坤外……………二八九
 堪へず紅葉青苔の地……………二九六
 寒汀鷺立……………二九七
 寒光一點竹間燈……………二九八
 寒食家應折得驚……………二九八
 寒流帶月澄如鏡……………二九八
 寒雲在昔妓樓衣……………二九七
 寒雲空滿望夫山……………二九七
 寒閨獨臥無夫婿……………二九八
 寒温を秋の雁に付け難し……………二九八
 尋跡春暮柳門塵……………二九五
 尋舊跡於魏文……………二八一
 嵇仲散之竹林幽則幽……………二九八
 嵇宅迎晴庭月暗……………二九八
 嵇康山雪逐流飛……………二九七
 嵇康の姿に喩へつべし……………二九八
 嵐陰欲暮……………二九八
 嵐に隨ふ落葉蕭瑟を含めり……………二九八
 就中腸斷是秋天……………二九八
 幾行南去之雁……………二九七
 幾處花堂……………二九五

強吳滅兮有荆棘……………二八六
 彭蠡秋聲鴨引來……………二八一
 惡利口之覆邦家……………二八八
 惡卷珠簾晚着釵……………二八一
 惠茂筑波山之陰……………二八二
 渭濱之波壘面……………二八二
 渭に飲ふ龍昇りて雲残らず……………二八二
 渡口郵船風定出……………二八二
 湖水連天雁點遙……………二八二
 渺渺復渺渺……………二八二
 猶已衰之齡也……………二八二
 猶成誤於下流之水急……………二八二
 猶暗法皇之道……………二八二
 猶溼渭於漢聘之初……………二八二
 猶愛朝雲出馬鞍……………二八二
 都府樓纒看瓦色……………二八二
 階底薔薇入夏開……………二八二
 晴後青山臨牖近……………二八二
 晴に當りて猶殘る……………二八二
 曾非種處思元亮……………二八二
 曾波之眼新嬌……………二八二
 朝天之門を改めず……………二八二
 朝有紅顏誇世路……………二八二

朝毎に聲少し漢林の風……………二〇〇
 朝候日高冠額拔……………二八四
 朝踏落花相伴出……………二八四
 期氣味之克調……………二〇一
 期せず夜漏の初めて分るゝ後……………二五九
 棹巫三峽未爲危……………二九一
 棹於扁舟而逃名……………二八九
 棹歌一曲釣漁翁……………二八九
 棹を移すものたゞ雁を聞く……………二八一
 柁欄葉戰水風涼……………二五〇
 款多誤綻暮春風……………二八九
 幾年我幾何……………二八二
 爲君黨衣裳……………二九六
 爲君事容飭……………二九六
 爲我今朝盡一盃……………二九六
 爲是花時供世尊……………二九四
 無情難辨夕陽中……………二九六
 無意故園任脚行……………二四五
 無勝於此夕之好……………二七四
 琴商改曲吹烟後……………二八九
 琴詩酒友皆拋我……………二七九

十二畫

十三畫

華山有馬踏猶露……………二四六
 華亭の鶴の警をいかんせん……………二一九
 菅禮部孤見我新……………二八〇
 菊爲重陽胃雨閉……………二八一
 菓則上林苑之所獻……………二七〇
 菰蘆杓酌春濃酒……………二八〇
 榮葵を和して口に駁るは……………二〇一
 皓皓不消……………二五五
 策馬來時……………二〇五
 等閑篇詠被人知……………二五七
 裁出還迷長短製……………二二一
 裁無定樣任春風……………二二一
 裁將秋寄寒雲寒……………二二一
 紫柱の林に分る……………二九一
 紫蓋之嶺風疎……………二三四
 紫茸備奪朱衣色……………二四〇
 紫宸殿之本主也……………二八〇
 紫磨金を瑩きて兩足を禮す……………三二一
 紫鷺白鷗……………二九八
 紫塵嬾蔽人拳手……………二九八
 紫藤花下漸黃昏……………二二二
 紫藤花落鳥關々……………二二四

紫藤露底殘花色……………二四〇
 紫園を出で、東に望めば……………三三七
 絲を亂す野馬は草の深き春……………二〇九
 絡繹於翠簾之下……………二九八
 結綬抽簪……………三三五
 虛弓難避……………二〇二
 虛潤有聲寒溜咽……………二九五
 蜚思蟬聲滿耳秋……………二九八
 衆人皆醉……………二九八
 衆狐の腋を綴るかと思ふ……………二二九
 衆醜に在りて永く異なり……………三三七
 衆嶺曉興林頂老……………二七三
 詞海艤舟紅葉聲……………二八七
 詞託微波雖且遣……………二六六
 詞慙於人……………二六四
 詔紙無文未奉行……………二九八
 貴賤と親疎とを論ぜず……………三三三
 粧樓未下詔來添……………三七一
 粧を金屋の中に嚴しうして……………三三八
 開卷已知爲子道……………二四八
 開箱衣帶隔年香……………二四二

開落已異……………二九一
 閑居屬於誰人……………二八〇
 閑居泰適の叟……………三三三
 閑窓有月之時……………三三五
 閑思看汝花紅日……………二九四
 閑踏梧桐黃葉行……………二九八
 閑關を新花に顧みる……………二二六
 雄劍在腰……………三三九
 集范別駕之遺文……………二六四
 雁點青天字一行……………三三七
 項莊之會鴻門……………三三四
 軸軸金玉聲……………二六二
 雲收七百里之外……………二三四
 雲外聞鴻夜射聲……………三三八
 雲衣范叔羅中贈……………二〇三
 雲泥萬里眼今窮……………三九四
 雲是殘粧鬢未成……………一六五
 雲消碧落天膚解……………二三五
 雲碓無人水自舂……………二九〇
 雲攀紅鏡柔扶日……………二九八
 雲凝鼓瑟之跡……………二二〇
 黃花助彭祖之術……………二八一
 黃梢新柳出城墻……………二二三
 黃醉綠醪迎冬熟……………二二五

黃壤誰知我……………三八一
 黃纈纈林寒有葉……………二九六

亂絲野馬草深春……………二〇九
 傷思於四方之風……………三三〇
 傾甚美……………二七〇
 嗜酒作酒德頌傳於世……………二六七
 嗜酒作酒功贊以繼之……………二六八
 嫌小人而踏高位……………二四八
 嫌殆非素論之詩……………二九八
 嫌裏錦帳長鸞麝……………三三七
 扇扇兮秋風……………二五八
 寧戚子飼牛於車下……………三三二
 嵩山表裏千重雪……………一七四
 嵩に歸る鶴舞ひて日高けて見ゆ……………二三五
 愁苦辛勤頓頓盡……………三三六
 愁腸欲斷……………三三五
 感同類於相求……………二二六
 意なくして故園脚に任せて行かん……………二四五
 愛爲吾友……………二四三
 想得江南諸父老……………三三三
 源起周年後幾霜……………二〇七

| | | | |
|-----------------------------------|-----|---------------------------|-----|
| 猿叫空山…………… | 一三 | 歲年年人不同…………… | 四〇〇 |
| 猿叫三聲啼峽深…………… | 二四 | 萬里人南去…………… | 二〇一 |
| 猿過巫陽始斷腸…………… | 二五 | 萬里而鄉園何在…………… | 一九八 |
| 鄉淚數行征戎客…………… | 一九 | 萬里東來何再日…………… | 三三 |
| 際關難追…………… | 三三 | 萬物嗟此過半凋…………… | 二二 |
| 隔樓鶯舌兩三聲…………… | 一九 | 萬物秋霜能壞色…………… | 二六 |
| 新路如今穿宿雪…………… | 一七 | 萬事之禮法雖異…………… | 三九 |
| 新豐酒色…………… | 六五 | 萬歲千秋樂未央…………… | 三九 |
| 暗思浮遊之有意…………… | 二八 | 萬機之餘…………… | 一〇六 |
| 暗動潘郎之思…………… | 三〇 | 萬點水蜜秋草中…………… | 一五三 |
| 暗遣食萍身色變…………… | 二〇七 | 落花不語空辭樹…………… | 一三五 |
| 暗聲朝日未晴程…………… | 三二 | 落花狼藉風狂後…………… | 一三六 |
| 會異氣而終混…………… | 二六 | 落枕波聲分岸夢…………… | 三〇三 |
| 楚三閭醒終何益…………… | 三二 | 落梅曲舊唇吹雪…………… | 二五八 |
| 楚王臺上夜琴聲…………… | 三二 | 落葉窓深…………… | 一九八 |
| 楚思淼沆雲水冷…………… | 一六七 | 葉展影翻當砌月…………… | 一五一 |
| 楚練新傳擣雪聲…………… | 一九 | 葉落風吹色相秋…………… | 三〇七 |
| 楊岐路滑…………… | 三一 | 著野展敷紅錦繡…………… | 一〇〇 |
| 楊柳風高雁送秋…………… | 五四 | 著緋初出紫微宮…………… | 三九四 |
| 楊貴妃歸唐帝思…………… | 一七六 | 葱嶺雲膚與雪連…………… | 四〇四 |
| 榆柳營頭萬里心…………… | 一七一 | 萱道忘憂得力微…………… | 二六八 |
| 極樂の尊を念ふ一夜…………… | 三三 | 葛稚仙の薬を踏む…………… | 一九九 |
| 歲去歲來聽不變…………… | 一五八 | 遊子猶行於殘月…………… | 二二六 |
| 歲月難從老底還…………… | 二二四 | 遊於勝地一日…………… | 三三六 |
| 遊魚の釣を銜みて 重淵の底より出 づるが若し…………… | 九 | 遊絲繚亂碧羅天…………… | 三九〇 |
| 遊絲繚亂碧羅天…………… | 三九〇 | 過三代而猶沈…………… | 三九〇 |
| 遊味文章於魯二十篇…………… | 三九 | 當天遊織碧羅綾…………… | 一〇〇 |
| 當沙月兮自得…………… | 一四七 | 當簾柳色兩家春…………… | 三〇三 |
| 當簾柳色兩家春…………… | 三〇三 | 經僧祇劫欲朝宗…………… | 三二四 |
| 經僧祇劫欲朝宗…………… | 三二四 | 經爲題目佛爲眼…………… | 二五 |
| 絳帳紅爐逐夜開…………… | 二二五 | 群源暮叩谷心寒…………… | 二七三 |
| 群鶴の毛を振ふが如し…………… | 二二九 | 聖皇自在長生殿…………… | 三〇四 |
| 詩酒春風處處情…………… | 一〇一 | 誠知老去風情少…………… | 二二九 |
| 蜀人濯文之錦燦爛…………… | 三三 | 蜀茶漸忘浮花味…………… | 一六九 |
| 跡を尋ねて春はく れぬ柳門の塵…………… | 二九五 | 跡を晦まして未だ苔 徑の月を抛たず…………… | 三三六 |
| 路を黄沙磧の裏に失ふ…………… | 二七五 | 跨樹霞纒半段餘…………… | 二一九 |
| 載鬼一車何足畏…………… | 三九一 | 臺頭有酒驚呼客…………… | 一一五 |
| 臺頭有酒驚呼客…………… | 一一五 | 臺傾滑石猶殘砌…………… | 二六 |
| 與君後會知何處…………… | 三三九 | 誤剪同心一片花…………… | 二五七 |
| 誤を下流の水急 なるに成す…………… | 二二 | 輕軒馳九陌之塵…………… | 一一二 |
| 輕漾激兮影動唇…………… | 一一三 | 銀河沙漲三千界…………… | 二一九 |
| 銀河澄朗素秋天…………… | 四三 | 銀魚腰底辭春浪…………… | 三九四 |
| 寶雁鑿書秋葉落…………… | 六四 | 雌黃自口…………… | 三三九 |
| 雌黃を點着して 天に意あり…………… | 三九 | 鳳去秦臺…………… | 三三〇 |
| 鳳池後面新秋月…………… | 二八三 | 鳳釵還悔鑲香奩…………… | 三七一 |
| 鳳凰管の裏に幽咽す…………… | 二六六 | 十五畫…………… | |
| 凜凜氷結…………… | 一七二 | 劉白若知今日好…………… | 一〇 |
| 劍佩曉移雙鳳闕…………… | 三三三 | 履踏葛稚仙之藥…………… | 一九九 |

| | | | |
|---------------------------|-----|--------------------------|-----|
| 寧非漢皇褒貴…………… | 三四七 | 榮啓期之歌三樂…………… | 三四四 |
| 無雙之弟哉…………… | 三四七 | 榮期をして兼ねて 醉を解せしめば…………… | 二六八 |
| 慈恩に悵望す三月 の盡ることを…………… | 二四〇 | 槐花雨濕新秋地…………… | 一三三 |
| 漢女施粉之鏡清聲…………… | 一三三 | 歌五噫而將去…………… | 三六〇 |
| 漢主手中吹不駐…………… | 三九 | 歌酒家々花處々…………… | 一〇〇 |
| 漢帝傷嗟…………… | 四〇三 | 瑤池便是尋常號…………… | 一七五 |
| 漢帝龍顏迷所處…………… | 三三三 | 瑤臺霜滿…………… | 二五三 |
| 漢宮萬里月前賜…………… | 三六七 | 蒼波路遠雲千里…………… | 三三五 |
| 漢高三尺之劍…………… | 三三 | 蒼苔路滑僧歸寺…………… | 二〇七 |
| 漢祖之歸沛郡…………… | 三四〇 | 蒼茫霧雨之晴初…………… | 三三七 |
| 漢家之三十六宮…………… | 一七三 | 蓋志之所之…………… | 一〇六 |
| 漢皓避秦之朝…………… | 三三一 | 兼葭水暗螢知夜…………… | 一五四 |
| 漢聘の初に涇渭たり…………… | 三三五 | 兼葭洲裏孤舟夢…………… | 一七一 |
| 漢に叫びて遙に孤 枕の夢を驚かし…………… | 二五二 | 遙見人家花使入…………… | 一三三 |
| 漸欲拂仙騎馬客…………… | 二三八 | 遙感旅宿之隨時…………… | 二八一 |
| 漸就劉伶同土風…………… | 二七〇 | 遠岸蒼蒼…………… | 二七八 |
| 漸覺世俗之皆空…………… | 三二五 | 遠帆歸處水連雲…………… | 三三四 |
| 漸薰臘雪新封裏…………… | 三三 | 疑秋雪之廻洛川…………… | 一八三 |
| 漁父晚船分浦釣…………… | 二九八 | 疑縵衆狐之腋…………… | 二二九 |
| 漁舟火影寒燒浪…………… | 二七六 | 疑を上弦の月の懸 れるに抛たず…………… | 二〇二 |
| 滿耳者樵歌牧笛之聲…………… | 二九 | 碧玉粧簪斜立柱…………… | 二〇三 |
| 滴似鮫入眼泣珠…………… | 一九九 | 碧玉寒蘆鉞脫囊…………… | 九六 |
| 撫除簪事之舊草…………… | 二六四 | 碧浪金波三五初…………… | 一七四 |
| 碧後線頭抽早稻…………… | 三〇一 | 碧落無雲稱鶴心…………… | 三三九 |
| 碧落無雲稱鶴心…………… | 三三九 | 碧瑠璃水淨無風…………… | 一九六 |
| 算取宮人才色兼…………… | 三七一 | 管絃之在長曲…………… | 三三〇 |
| 裴文籍後聞君久…………… | 三八〇 | 精明合浦珠相似…………… | 三三二 |
| 綺里季之輔漢惠…………… | 三三六 | 綺羅之三千暗老…………… | 三三三 |
| 緋を著て初めて紫 微宮より出づ…………… | 三九四 | 緋を結び簪を抽く…………… | 三三五 |
| 綾鶴衣間舞曉風…………… | 三九四 | 翠竹烟中暮鳥聲…………… | 一四〇 |
| 翠帳紅閣…………… | 三七四 | 翠簾の下に絡繹たり…………… | 二九九 |
| 翠嶺をふみて西 に顧みれば…………… | 三七七 | 翠黛紅顏錦繡粧…………… | 三六七 |
| 聞名戲欲契偕老…………… | 一八八 | 聞得園中養花艶…………… | 三九八 |
| 聞道陸張昔下隣…………… | 三〇三 | 聞夢夢驚…………… | 二二七 |
| 閣を離るゝ鳳の翔は 檻によりて舞ふ…………… | 一三六 | 臺頭有酒驚呼客…………… | 一一五 |

影落盃中五老峰……………二九
 德化未必光于黃炎……………三四三
 潭心月泛交枝桂……………三三〇
 潭荷葉動是魚遊……………一五三
 潭融可算藻中魚……………一七五
 潘安仁之外姪……………三六八
 澗戶鳥歸……………二九八
 澄澄粉飾……………一七三
 潛增墨子之悲……………一三〇
 潯陽江色潮添滿……………二〇一
 潯水波揚左耳清……………二九四
 潯水浪闊……………三五八
 鄭大尉之溪風被人知……………三五六
 數片之紅纒殘……………一九八
 數行暗淚孤雲外……………三六八
 數拍霓裳……………二五八
 數盃溫酎雪中春……………二二三
 數聲池上月明時……………二五〇
 暮林花落鳥先啼……………二五五
 暮年初調漢龍顏……………三六五
 暮鳥栖風守廢籬……………二八七
 暮爲白骨朽郊原……………四〇一
 暮隨飛鳥一時歸……………一三五
 暴秦衰兮無虎狼……………二八六

暫借崎嶇非戴石……………三三三
 樂天より少きこと三年……………三七六
 樂盡哀來……………四〇一
 樓臺之十二長空……………三三三
 樓を下れる娃の袖は階を顧みて翻へる……………一三六
 樓を隔つる鶯舌は兩三聲……………一〇九
 種花一日自爲榮……………一五二
 種籬不信有長生……………一八五
 種籬無投暮之花……………一五三
 蓬萊王母が家に向はず……………三四一
 蓬萊洞月照霜中……………一五
 遲速不同……………九
 遲遲分春日……………一五
 遲遲鐘漏初長夜……………一七〇
 遮眼者竹烟松霧之色……………二九
 蔓草露深人定後……………一七一
 蔡征虜之末仕……………三五八
 盤根纒點臥龍文……………二四三
 綠草如今羸鹿苑……………二八五
 綠楊宜作兩家春……………三〇二
 綠樹陰前逐晚涼……………一四六
 箱を開ける衣は年を隔つる香を帯びたり……………一四二

翫其磧礫不窺玉淵者……………三六八
 蝸牛角上爭何事……………四〇〇
 誰人隴外久征戎……………一七
 誰言春色從東到……………二四
 誰追月光於屋上……………一五
 誰家碧樹……………一五
 誰家染出碧潭之色……………二七
 誰家思婦秋擣帛……………二〇
 誰破養由之射……………二四〇
 誰問粉粧……………二九
 誰教計會一時秋……………一六
 誰謂水無心……………一三
 誰謂花不語……………一三
 請君許折一枝春……………一九八
 論命江頭不繫舟……………四〇
 踏花同惜少年春……………一〇三
 踏翠嶺而西顧……………三七
 嬋娟兩鬢秋蠅翼……………三九
 醉貌如霜葉……………二六
 醉對落花心自靜……………三七
 醉鄉不去欲何歸……………三九
 醉鄉氏之國……………二六
 閨水の橋を變へず……………二六
 養得自爲花父母……………三三

魯人以爲美談……………三五
 螢日螢風……………一三
 螢紫磨金而禮兩足……………三一
 鴈飛碧落書青紙……………二〇一
 龍宴瓊筵之上……………二三八

十六畫
 凝如漢女顏施粉……………一九
 壁底吟幽月色寒……………一〇六
 壁厭空心鼠孔穿……………二〇六
 壁に背ける燈は宿を經る焰を殘し……………一四
 衛子夫之待時……………三七〇
 學抽麟角……………三九
 濃香芬郁……………二六
 濃艷臨兮波變色……………一三
 樹に跨る霞は纒に半段餘……………一九
 樹を動かして之れを教ふ……………三〇八
 樵蘇往返……………一九
 樽前勸醉是春風……………九
 燕子樓中霜月夜……………一七一
 燕丹之去日烏頭……………四〇
 燕知社日辭巢去……………一八一

燕昭王招涼之珠……………一四七
 燕姬之袖暫收……………一六
 燕寢色衰秋夜霜……………三七
 燒秋林葉火還寒……………二四一
 燈暗數行虞氏淚……………三六三
 曉入長松之洞……………三三四
 曉入梁王之苑……………二八
 曉風緩吹……………一〇八
 曉送緜山之月……………二六
 曉浪潛分枕上聲……………三〇四
 曉峽蘿深猿一叫……………二五五
 曉霜行人之夢……………二五
 曉巖飛落峽烟寒……………二七三
 曉露鹿鳴花始發……………一八九
 曉の星の河漢に轉するが如し……………一八
 遺文三十軸……………二六三
 遺愛甘棠勿剪諸……………三六四
 遺愛寺鐘敲枕聽……………二九七
 遺塵雖絕……………一〇六
 螢火亂飛秋已近……………一五四
 獨身を終ふるまで數相見るべし……………三〇三
 穆公委之以政……………三五三

蕭郎馬蹄を枉げんことを妨げず……………三九
 蕭瑟を雲衢に留めがたし……………一八
 蕭會稽之過古廟……………三八〇
 蕭蕭暗雨打窓聲……………一七〇
 蕭蕭涼風與我鬢……………一六一
 蕭索村風吹笛處……………三〇一
 蕙帶羅衣……………三五
 隣れむべし九月初三の夜……………一〇八
 隣れむべし多景春に似て花し……………二二
 憶得少年長乞巧……………一六四
 盧橘子低山雨重……………一五〇
 隨分管絃還自足……………二七
 隨風落葉含蕭瑟……………一九
 綠何更覓吳山曲……………一五
 錦帳曉開雲母殿……………二六三
 錦を織る機の中に已に相思の字を辨へ……………一七三
 錢塘去國三千里……………三九三
 餘波合力錦江聲……………一六
 霜纓於鴻臚之曉淚……………三〇
 諫鼓若深鳥不驚……………三五

翰鳥の織に縷りて會雲の峻より墜つるが若し……………三三
 頭目縱隨禪客乞……………八六
 頻驚涼風颯颯之聲……………一六
 黔中に醉はずば争でか去ることを得ん……………一七
 龍吟魚躍之伴曉啼……………一六
 龍池柳色雨中深……………二二
 龍迎新儀……………二五〇
 龍門原上土……………二六
 龍領珠投顆顆寒……………三四
 龍闕前頭薄暮山……………二八
 瓢簞屢空……………二四五

十七畫
 擣衣砧上……………一七
 擣處曉愁聞月冷……………二一
 獲落危牖壞宇……………二六
 獲麟後集世知丘……………二五
 隱逸優遊……………一九
 應言四樂不言三……………二六
 應言此處不言何……………二〇
 應在春風百草頭……………二四
 應送列子之乘……………三六
 應是花心忘憲臺……………一四〇

應喻稅康之姿……………二四〇
 檣柳誰家曝麴塵……………二八
 燭を背けては共に隣れむ深夜の月……………一〇一
 薙隴有拂晨之露……………一九
 還悲石火向風敲……………三三
 還翻翻於一月之花……………一三
 避喧猶臥竹窓風……………三六
 縱以峭函爲固……………一八
 縱令孟賁而追……………一八
 織錦機中……………一七
 聲來枕上千年鶴……………二四
 聲聲已斷花亭鶴……………二七
 聲驚明王之眠……………二八
 謝安辭功……………三九
 谿に歸る歌鶯は闇夜猶行明月地……………四〇
 関へざるを伶人に怒る……………二七
 霞光曙後股於火……………一九
 霜妨鶴唳寒無露……………三三
 霜草欲枯蟲思苦……………二〇
 霜蓬老鬢三分白……………一八
 霜鶴沙鷗皆可愛……………二〇
 霜を拂ひて拾ひつゝ暮山の雲……………三五

黛色迥臨蒼海上……………二七三
 雖一念兮必感應……………三〇〇
 雖十惡兮猶引攝……………三二〇
 雖下品應足……………三三〇
 雖三百益莫強辭……………三三三
 雖拉武勇於漢四七將……………三三九
 雖風雲於股夢之後……………三五五
 雖紅不是春……………二六七
 雖愁夕霧埋人枕……………二〇九
 雖爲半日之客……………二九二
 雖觀秋月波中影……………四〇〇
 點着雌黃天有意……………一三九

十八畫

叢蘭豈不芳乎……………一九一
 叢邊怨遠風聞暗……………二〇六
 歸嵩鶴舞日高見……………二二五
 歸谿歌鸞……………二二三
 藏月入懷中……………一九九
 瞻望を曉の月に寄す……………三九八
 斐頭竹葉經春熟……………一四三
 濺石飛泉弄雅琴……………一九九
 蕭瑟催心學雨辰……………二二九
 繚亂たるを舊拍に猜む……………二二六
 織者春風未疊箱……………一三三

十九畫

織自何絲唯暮雨……………一三三
 斷割昆吾劍不如……………三六三
 蟬鳴黃葉漢宮秋……………一六九
 舊跡を魏文に尋ぬ……………一八二
 舊遊零落半歸泉……………三三三
 舊巢爲後屬春雲……………二一七
 謹上小序……………二〇六
 謬入仙家……………二九二
 豐嶺の鐘の聲に和せんと欲するや否や……………一七九
 轉法輪之緣……………二〇九
 雙舞庭前花落處……………二五〇
 雙鬢且理春雲軟……………三七一
 雙鶴出臯披霧舞……………二三五
 雞人曉唱……………二二五
 鞭竹馬而不顧……………三三三
 鞭孤雲而養志……………三三九
 學扇喻之……………三〇八
 職列虎牙……………三三九
 鯉常趨晚曉聲微……………一六一
 韓康獨往之栖……………二七七
 魏文を思つて以て風流を飭ぶ……………二〇六
 魏宮鐘動……………二二六
 臨風杪秋樹……………二六七

二十畫

嚴粧金屋之中……………二三八
 嚴陵瀨之水……………三三五
 爐下和羹……………一〇四
 穰皇向上の人と作ることを得たり……………三三一
 蘇武之來時鶴髮……………四〇三
 蘇州船故龍頭暗……………三六一
 蘋風暖送過江春……………二〇九
 蘆洲月色隨潮滿……………四〇四
 觸石春雲生枕上……………三〇〇
 釋尊未免栴檀之烟……………四〇一
 簪を北山の北に抽んず……………三三五
 節亞顔調……………三九〇

節を促す良木は其の推けたるを歎く……………三六四
 競寸陰於十五年之間……………三三〇
 鬪芥鷄而長忘……………三三二
 露及明朝淚不禁……………一六五
 露似眞珠月似弓……………二〇八
 露菊新花一半黃……………一八三
 露重窓前綠竹低……………三三四
 露滴蘭叢寒玉白……………二〇八
 露暖南枝花始開……………二三四
 露簾清瑩迎夜滑……………二四六
 露應別淚珠空落……………一六五

廿一畫

蘭苑自慙爲俗骨……………一八五
 蘭省花時錦帳下……………二九七
 蘭榜桂……………三三五
 蘭蕙苑嵐摧紫後……………一八五
 續教啼鳥說來由……………九五
 顧問關於新花……………一六
 饑脆性躁念念乳……………二五一
 鶯鳴而羅幕猶垂……………二一五
 鶯聲誘引來花下……………二一五
 鶯未出遺賢在谷……………二一四
 鶴有乘軒……………二四六

鶴閑翅刷千年雪……………三一九
 鶴歸舊里……………二五〇
 鶴籠閑處見君子……………三三四
 鶴既鳴忠臣待且……………二一四
 鶴漸散間秋色少……………一六一
 鶴爲當來世讚佛乘之因……………三〇九

廿二畫

鄆縣村閭皆潤屋……………一八四
 鷓鴣背上……………一九八
 響徹暗天之聽……………二八三
 鷹牙米鏡聲聲脆……………二三四

廿三畫

纒望出山之清光……………三七一
 纒逢七世之孫……………二五三
 纒を鴻臚の曉の涙に霑す……………三三〇
 驛路鈴聲夜過山……………二七六
 驚風振葉香……………二九一

廿五畫

觀身岸額離根草……………四〇〇
 觀空淨侶心懸月……………三三八
 觀音寺只聽鐘聲……………三三六

廿七畫

鑽沙草只三分計……………二一九

廿八畫

鸚鵡盃の中に清冷たり……………二六六

廿九畫

驪龍の蟠まる所を知らず……………三三八

乙和歌

【あ】

あかつきのなからましかば白露の
あかしかねつゝまつむしのなく
秋風にはつかりがねぞ聞ゆなる
秋風のふくに付けてもとはぬかな
秋霧のふもとをしめてたちぬれば
秋たちて幾かもあらねどこのねぬる
あきの初を今日ぞと思へば
あきののに萩かるをのこなはをなみ
あきの野の萩の錦を古郷に
秋は猶夕まぐれこそたゞならね
あけながらやはあらんと思ひし
あさがほを何はかなしと思ふらん
あさけの風は袂すゞしも
あさ日さす峰の白ゆきむらぎえて
あさ日夕日のさすにまかせて
あさみどり春立つ空に鶯の
あしたの原は今日ぞやくめり
あしびきの山がくれなるほととぎす
あしびきの山鳥の尾のしだりをの
あしべをさしてたづ鳴きわたる

飛鳥川もみちば流るかつらぎの
あすからは若菜つませんかたをか
あすからは若菜つまんとしめし野に
あつさぞ増るとこなつの花
あのくだら三みやく三菩提の佛達
あひ見る秋の限りなきかな
あふぎの風を猶やかさまし
あふをかざりと思ふばかりぞ
あまくだりあら人がみのあひおひを
あまつかぜ雲のかよひ吹きとちよ
天つ風ふけひのうらにゐるたづの
あまつ星とそあやまたれける
あまの川扇の風にきりはれて
あまの川河瀬すゞしき七夕に
あまの川とほきわたりにあらねども
あまの子なれば宿も定めず
あまのはらふりさけ見れば春日なる
あまやさきだつ魚やさきだつ
あめがしたこそたのしかるらし
あめにもたごはさはらざらん
あやしくめにもみつなみだかな
あやなくあだの名をやたゞまし
あやなし霞立ちなくくしそ
あらたまの年たちかへるあしたより

あら玉のとしもくれなばつくりつる
あり明のこゝちこそすれさかづきの
ありあけの月をまちいでつるかな
ありつゝも君が来まさんみまぐさにせ
あるかなきかにあそぶ糸ゆふ
あるかなきかの世にもすむかな
あをやぎの糸よりかくる春しもぞ
あをやぎのえだにかゝれる春雨は
あを柳のまゆにこもれる糸なれば

【い】

いかでかは人にもとはんあやしきは
いかるがやとみの小川のたえばこそ
いくよつもりて淵となるらん
いく世つもれる雪にかあるらん
いそのかみふるき都を来て見れば
いたづらに過ぐる月日は多けれど
いつか千とせを我れは経にけん
いづくにか身をばよせまし世の中に
いつしかと君にと思ひし若菜をば
偽りのなき世なりせばいかばかり
いづらは秋の長してふ夜は
いづれか先におかんとすらん

いづれの緒よりしらべそめけん
いづれを梅とわきてをらまし
いとどむかしの秋ぞ戀しき
いとめてぬける玉かとぞ見る
いなばそよぎて秋風のふく
いにし年ねこじて植ゑし我が宿の
いにしへの野中の清水ぬるけれど
いにしへはちるをや人の惜みけん
いのちだに心にかなふものならば
いはそゞたるひの上のさ藤の
いはねばこそあれ戀しき物を
いはほととなりて苔のむすまで
今こんといひしばかりに長月の
いまは花こそ昔戀ふらし
いまははるべとさくやこのはな
今こんと誰たのめけん秋の夜を
いまひとしほの色まさりけり
いま一瞥のきかまほしきに
いまや咲くらん山吹の花
いもとわがぬるとこなつの花
いろかをも思ひはいれず梅の花
いろこそ見えね香やはかくるゝ
いろをも香をも知る人ぞ知る

【う】

うきふし毎に驚ぞなく
うぐすの聲なかりせば雪消えぬ
うち出づる波や春のはつはな
うちつけに物ぞ悲しき木の葉散る
うづら鳴くいはれの野への秋萩を
うつろはぬまに見ん人もがな
うつろはんことだにをしき秋萩を
うもれ火の下にこがれし時よりも
うらさびしくも見えわたる哉
うらやましくもすめる月哉
うれしさ昔は袖につゝみけり

【お】

大空にむれぬるたづのさしなながら
おほぞらの月の光の寒ければ
おぼつかぬ誰れとか知らん秋霧の
おもはぬ中のえさるまじきを
おもひ出づるときは山の岩つゝじ
おもひかねいもがりゆけば冬の夜
おもひの家をいかでいでまし
おもひやる心ばかりはさばらじを
おもふ心のありげなるかな
おもふ人も見つる今日哉
おもへば久しすみよしの松

【か】

かゝれる藤のさきて散る哉
かくにくまるゝをりぞかなしき
かげ見し水ぞまづ氷りける
かざしてゆかん見ぬ人のため
かすがの山にはや立ちにけり
かずさへ見ゆる秋の夜の月
かすみはれみどりの空ものどけて
かぜに消えせぬ蟹なりけり
かぜの音にぞ驚かれぬ
かぞいろはいかにあはれと思ふらん
かぞふれば我が身につもる年月を

かたみにつめる若菜なりけり 一〇五
 かの岡に草かるをのこしかなかりそ 二四七
 かはかせ寒みちどり鳴くなり 二四
 かはづなく神なみ川にかけ見えて 二九
 神無月しぐれとともにかみなびの 二〇
 かみな月ふりみふらずみ定めなき 二二
 かみなびのみ室の岸やくづるらん 二七
 からごろも打つ聲きけば月きよみ 二二
 かをとめて誰れ折らざらん梅の花 二五

【き】

きく人もなきねをのみぞ鳴く 三六
 きしのひめ松いくよ経ぬらん 二四
 昨日こそ早苗とりしかいつのまに 三〇
 きのみこそ年はくれしか春霞 二九
 きのみまでよそに思ひしあやめ草 一四
 きのみも今日も雪は降りつゝ 一五
 きみがてに任する秋の風なれば 一六
 きみがつなでは年にこそまて 一六
 きみがひくべき身とぞなりぬる 三六
 君がやどわが宿わくるかきつばた 三四
 君が代はちよにやちよにさざれ石の 三六
 君とわれいかなることを契りけん 三二
 きみなくてあれたる宿の板間より 二八

君なくて煙たえにししほがまの 二八
 きみならで誰にか見せん梅の花 二七
 きみにひかれて萬代やへん 二四
 蟋蟀すいたくな鳴きそ秋の夜の 二六

【く】

草ふかきあれたる宿のともしびの 一五
 くもの上こそ思ひやらるれ 二八
 雲のゐるこしのしら山おいにけり 二七
 くれてゆく秋のかたみにおく物は 一八

【け】

けふ白河の關はこえぬと 三七
 けふはなごしの積なりけり 一四
 けふのみと春を思はぬ時だにも 二二
 けふもくれぬときぞかなしき 三〇
 けふわが宿のつまとなる哉 一四

【こ】

こぎ行く船のあとの白浪 四〇
 極樂ははるけきほどときししかど 三六
 こゝにだにひかりさやけき秋の月 二四
 こゝろあてにをらばや折らん初霜の 一五
 こゝろのどけき人はあらじな 一〇

こぞとや云はん今年とやいはん 九
 ことのねに峰の松風かよふらし 二九
 この春ばかり朝ぎよめすな 一七
 このもとを栖とすればおのづから 三六
 この世にて菩提の種をうゑつれば 三六
 こまもすさめずかる人もなし 二四
 こよひぞ秋のもなかなりける 一七
 こよひは身にもあまりぬるかな 三九
 これを見よ人もとがめぬ戀すとて 一五
 ころもかへうき今日にもある哉 二四
 こゑの中にや秋はくるらん 二〇

【さ】

さくらかざして今日も暮しつ 一〇
 さくらがり雨はふり来ぬ同じくは 二三
 さくら散る木の下風は寒からで 二七
 さくら花春くはゝれる年だにも 二四
 さつきまつ花橋のかをかげば 一五
 さつきやみおぼつかなきに時鳥 一五
 さほの山邊をたちかくすらん 二〇
 さよふけてねざめざりせば時鳥 一五
 さをしかの朝たつをのゝあき萩に 二〇

【し】

しかりかかるをやくもるといふらん 二八
 しりなん後ぞこひしかるべき 一五
 しりぬれど又くる春はさきぬべし 三六
 しり残らん春のかたみに 一〇
 塵をだにすゑじとぞ思ふうゑしより 一四
 し代のためしに何をひかまし 一〇

【す】

しかのねながらうつしてしがな 一八
 しぐれぞ冬のはじめなりける 二二
 時雨ふるおとはすれども呉竹の 二四
 した葉のこらず紅葉しにけり 一七
 したくさる水に秋こそかよふらし 一八
 暫しだにへがたく見ゆる世の中に 三三
 しまがくれゆく舟をしぞおもふ 三六
 しら雲にはわうちかはしとぶ鳥の 一八
 しら／＼ししらけたる夜の月影に 四〇
 しら露も時雨もいたくもるやまは 一九
 白浪のよするなきさに世をつくす 三七

【す】

涼しやと草むら毎に立ち寄れば 一四
 末の露もとのしづくや世の中の 四〇

【そ】

袖ひちてむすびし水の氷れるを 九
 そらすみわたるかさゝぎの橋 一〇
 そらに知られぬ雪ぞ降りける 一七
 そらにぞ秋の山は見えける 二〇
 そらにぞ蟬の聲は聞ゆる 一八
 それとも見えず雪のふれゝば 二五

【た】

たえまに見ゆる朝がほの花 一五
 たかき屋にのぼりて見れば煙たつ 三三
 たが玉づさをかけてきつらん 二〇
 たがため錦なればか秋ぎりの 二〇
 たがぬぎかけしふぢばかまそも 一九
 たかまの山の峰の白雲 二四
 たごの浦底さへ匂ふ藤なみを 二四
 たご春の日にまかせたらなん 二四
 たつ事易き花の陰かは 二二
 たつたの川の水の濁れる 二七
 たのめつゝこぬよ數多になりぬれば 三九
 たにの氷はけふやとくらん 三三
 玉くしけふたとせあはぬ君が身を 三〇
 たまと見ろまでおける白露 二〇
 たみのかまどはにぎはひにけり 三三
 たらちねはかゝれとせしもうば玉の 三〇
 誰をかも知る人にせんたかさこの 三二
 便りあらばいかで都へつげやらん 三七

【ち】

ちとせの後は君をたのまん 三三
 ちとせまで限れる松も今日よりは 一〇

【と】

時すぎば早苗もいたく老いぬべし 三〇
 時にこそ知らぬ翁に逢ふ心地すれ 三六
 ときはなる松のみどりも春くれれば 二二

常盤なる松のなたてにあやなくも
としごとにあふとはすれど七夕の
としごとの春の別をあはれとも
年の内につくれる罪はかきくらし
としのうち春は来にけり一年を
としの思はんこともやさし
としをへて花のかぐみとなる水は
主殿のとものみやつこ心あらば

なにかわかれのかなしからまし
なにかはつゆを玉とあざむく
なにはづにさくやこの花冬ごもり
なにへだつらんみねの白雲
なにをして身の徒らに老いにけん
なのみして山は三笠もなかりけり
なびかぬ草もあらじとぞ思ふ

【ぬ】

主しらぬ香はにほひつゝ秋の野に
ぬるとも花の陰に隠れん
ぬるよの敷ぞすくなかりける
ぬれてはず山路の菊の露の間に

【ね】

ねぎごとときかず荒ぶる神だにも
ねの日してしめつる野邊の姫小松
ねの日する野べに小松のなかりせば
ねるやねりそのくだけてぞ思ふ
ねをなく蟲のなれる姿を

【の】

のりのためにぞけふはつみつる

【は】

はちすはのにごりにしまぬ心もて
はつ聲またぬ人はあらじな
はな咲く春にあふぞ嬉しき
はなちるべくも風ふかぬ世に
はななき里にすみやならへる
はなに心をつくるころかな
はなにより物をぞ思ふ白露の
はなの色にそめし袂のをしければ
はな見て暮す春ぞすくなき
はなみる人になりける哉
はなもみなりぬる宿は行く春の
はゝその紅葉霧たゝぬまは
はらひもあへず霜やおくらん
春霞立つを見すてゝ行く雁は
春霞たてるやいづこみよしのの
はる立つけふの風やとくらん
春たつといふばかりにやみ芳野の
はるの霞はたなびきにけり
はるの來るにぞ色増りける
はるの心はのどけからまし
はるの田を人にまかせて我はたゞ
はるの夜のやみはあやなし梅の花

【な】

ながきうらみは我れぞまされる
ながくし夜をひとりかもねん
なきが多くもなりにけるかな
なくなる聲のいとどはるけき
なくは昔の人や戀しき
なく一聲にあくるしのゝめ
なつ来にけりと見ゆる卯の花
なつなき年と思ひける哉
なつの夜はふすかとすれば時鳥
夏の夜をねぬに明ぬと云ひ置きし
なつはつる扇と秋の白露と
なつ山の峰のこずゑの高ければ
などか雲居にかへらざるべき
など世とともに色もかはらぬ

【の】

ひかでや千代の陰をまたまし
ひかりもそひて出でぬと思へば
ひさかたの雲の上にて見る菊は
ひとづてにこそきくべかりけれ
ひとゝせにひとよと思へど七夕の
ひとにおくるゝ人ぞしりける
ひとにはつげよあまのつりふね
ひとの心にあかれやはする
ひとのことは嬉しからまし
ひとは物をや思はざりけん
ひとめも草もかれぬと思へば
ひとりしぬればあかしかねつも
ひとをも花はさこそ見るらめ

【ふ】

ふたゝびすめるほりかはの水
ふるさと寒くなりまさるなり
ふる里とこそなりぬべらなれ
ふる白雪とともにきえなん

【ほ】

みかさの山に出でし月かも
御垣守まじのたくひにあらねども
みだれて花は綻びにける
三千歳になるてふ桃のことしより
水のおもに照る月なみを數ふれば
みてのみや人にかたらん山ざくら

【み】

まきの葉毎に置ける初霜
まささのかづらいろづきにけり
ます鏡そこなる影に向ひみて見る
またじとおもふぞ待つにまされる
まだねぬ人を空にしる哉
またも來ん時ぞと思へど頼まれぬ
またるゝものは鶯の聲
松蔭に岩井の水をむすび上げて
まつも昔しの友ならなくに

【む】

むかしかざしゝ花咲きにけり
むかしの人の袖の香ぞする
むかしの世こそ知らまほしけれ
昔をばかけじと思へどかくばかり
むすぶ泉の手さへすゞしき
睦言もまだつきなくに明けにけり

むら／＼の錦と見るさほ山の 一九七

【も】

もえ出づる春になりけるかな
 もとの心をしる人ぞくむ 二九七
 もみぢせぬときはの山にすむ鹿は 三〇八
 もみぢはよるの錦なりけり 三〇〇
 もみぢふきおろす山おろしの風 三〇三
 もしきのおほ宮人は暇あれや 三〇一
 もりの木の葉はふりにこそふれ 三〇〇

【や】

やかずとも草はもえなん春日野を 二四二
 やまかげのみぎはまさされる春風に 三〇四
 やま風にとくる氷のひまごに 二九六
 やまざくらあくまで色を見つる哉 三〇七
 やまざといかで春を知らまし 二二八
 やま里は冬ぞさびしさまさりける 三〇〇
 やま里は物のさびしき事こそあれ 三〇〇
 山さびし秋もくれぬと告ぐるかも 一八八
 やまでらの入相の音のこゑごとこに 三〇七
 やまの秋風吹きぞしぬらし 三〇〇
 やまのかひあるけふにやはあらぬ 三〇五
 やまもかすみて今朝は見ゆらん 二九四

【ゆ】

ゆきかきわけて梅の花をる 四〇四
 ゆきて見ぬ人も忍べと春の野に 一〇五
 ゆきふれば樹毎に花ぞ咲きにける 三三
 ゆきやらで山路くらしつ郭公 一五五
 ゆく年のをしくもあるかなます鏡 二四
 ゆふづくよをぐらの山になく鹿の 二〇八

【よ】

よしの山にふりにけるかな 三三
 よし野の山に雪はふりつゝ 三〇
 よそにのみ見てややみなん葛城や 三三
 よにふればことの葉しげき吳竹の 二四
 よにふれば物思ふとしはなれども 一八〇
 よのろきよりは住みよかりけり 三〇〇
 よの中にあらましかばと思ふ人 三〇五
 よの中にうしの車のなかりせば 三〇
 よの中にたえて櫻のなかりせば 二四
 よの中はとてかくても同じ事 三六
 よの中を何にたとへんあさぼらけ 四〇
 よを塞みねざめてきけばをしぞなく 二八
 萬世とみかさの山ぞよばふなる 三六

【わ】

わがおほ君のみなは忘れぬ 三五〇
 わか木の梅は花咲きにけり 二五
 わがくろかみはなでずやありけん 三〇
 わが戀は行方もしらすはてもなし 三九
 わが駒と今日にあひくるあやめ草 一四
 わがせこに見せんと思ひし梅の花 二五
 わがたつ袖に冥加あらせ給へ 三六
 わか菜つむべく野はなりにけり 三六
 わが名をさらに又やけがさん 九
 わかの浦に汐みちくれればかたをなみ 三二

わが身にすればをしき春哉 二五
 わがもとゆひの霜にぞありける 二二
 わが宿のかきねや春をへだつらん 一八
 わが宿の菊の白露今日ごとに 一三
 わが宿の花見がてらにくる人は 一五
 わがやどのやへ山吹はひとへだに 一〇
 わが宿は道もなきまであれにけり 三七
 わだのはらやそしまかけてこぎ出でぬと 三六
 われも心のうちにこそたけ 三六
 われ見ても久しくなりぬ住吉の 二四

わびしらに猿な鳴まそ足引の 二五

【を】

をぎのうはかせ萩の下露 一六
 をぎの葉ならば音はしてまし 三〇
 をぐら山ふもとの野邊の花すゝき 一六
 をとめのすがたしはしとどめん 三七
 女郎花おほかる野邊にやどりせば 一八
 をみなへし見るに心はなぐさまで 一八
 をれるばかりにおける霜かな 一九

二 新撰朗詠集索引

寸陰景裏……………四六
土宜酒熟酌秋竹……………四七
子期之隣……………四七
子月齊名傳早艷……………四三
弓驚斜遊三更月……………四三

四 畫

不唯我愛人來愛……………四七
不知細葉誰裁出……………四七
不似流俗之樹……………四六
不醉爭辭溫樹下……………四六
不厭時時猿一叫……………四六
不知洛浦神皇之交會歟……………四七
不謝巫山一片雲……………四七
不知陽台朝雲之未歸歟……………四六
不歡其醜……………四七
不容何病……………四七
不醉奈何吳坂楚嶺之寒風……………四三
不隔墻垣不愧貧……………四六
不待秋風……………四七
不厭顯陽之高……………四六
不言桃李之責心……………四三
不知轉入此中來……………四二
不明不暗隴隴月……………四二

月上軒而飛光……………四七
月老春羅之洞……………四九
月殘露結之朝……………四六
月下故情夜淚催……………四三
月知溪靜尋常入……………四四
月落暗開蘆葉秋……………四六
月沈蘋藻銀鈎影……………四三
月照藤花影上階……………四三
月明洛水再沈珠……………四三
月落高歌御柳陰……………四四
五日に逢ふごとに……………四二
五月菖蒲素得名……………四二
五柳門煙最長……………四七
五柳先生之通普……………四六
五馬嘶而欲去……………四五
五萬四千之土壤……………四六
五夜漏聲催曉箭……………四三
五柳の曉雲の孫……………四三
水流金谷……………四四
水似吳娃吹弄箏……………四二
水近應驚海岸香……………四七
水に臨む館は……………四八
水寫右軍三日會……………四二
水亂羅文鏡座流……………四七

水衣黏後浪難縫……………四二
水煙半濕綺羅冷……………四二
今年聲似去年聲……………四四
今宵織女渡天河……………四六
今夜清光此處多……………四八
今來忝避人間暑……………四四
今左丞相之訪寂公……………四一
今より便ち是れ家山の月……………四元
今聖主之親舅左丞相……………四三
日下壁而沈彩……………四六
日遠論非同日論……………四七
日を礙ふる林の間は……………四三
日長夜短懶晨興……………四二
日催鳥羽炎暉去……………四三
日落松巖野鶴留……………四五
日暖初乾漢々沙……………四八
天門山之傳新名也……………四三
天台嶺前……………四五
天津橋頭殘月前……………四五
天津花麗粧還冷……………四三
天津月下渡殘春……………四元
心事結風功不就……………四七
心通上下往來船……………四七
心地早銷方寸火……………四六

心灰不及爐中火……………四九
巴峽猿聲催客淚……………四八
巴の字によつて……………四三
巴峽雨中……………四八
巴山歌月遠行人……………四四
中夜八十之火……………四〇
中殿曙香從吹染……………四〇
木鴈一篇須記取……………四四
木落秋還岸暗春……………四四
丹霞を剪つて……………四六
丹霞之洞高開……………四五
井を拜せしかば奔流……………四八
井邑家々父母君……………四八
六十餘回看未飽……………四八
六龍西幸水浴々……………四四
牛漢の西に轉ずるを……………四二
牛休門萩花寒處……………四六
牛喘丙吉之前……………四七
王船儀分未出……………四八
父老を賞して以て筑を……………四五
夫差以敗……………四七
分つべし一擧の鶴の……………四四
火是帶煙繡柳後……………四五
太公之釣垂絲……………四七

引樽遙過萬里雲……………四五
及之於深水……………四九
犬吠園林葉落聲……………四六
勾踐朝也……………四七
句同唐帝專房女……………四八
方士年年欲採粧……………四三
文路春行看不足……………四九

五 畫

白髮鏡中慙勿老……………四七
白首七旬殘日少……………四七
三湘愁髮逢秋色……………四六
白日昇天一擧情……………四八
白雪花繁空撲地……………四七
白露如珠月似鈎……………四三
白氏書中收夏部……………四三
白鬢髯容見多愁……………四九
白鷺斜飛遠水長……………四六
白蘋洲樣岸相傳……………四三
白雲破處洞門開……………四二
白双を抜いて以て萬に……………四六
舞ふ……………四六
白首に臨んで始て知りぬ……………四三
玉樓風裏聽吹笙……………四五

玉池露冷芙蓉淺……………四五
玉容寂寞淚欄干……………四七
玉貌自宜雙黛翠……………四七
玉樓鐘動奏清音……………四四
玉山唯有雪消情……………四〇
玉階に望んで餘喘す……………四七
四禪夜闌……………四九
四九三十六之天……………四五
四五月交雲外語……………四三
四十五尺之泉曝布……………四五
四十六時三月盡……………四三
四五株楊柳雨色……………四六
四海を一瞬に撫づ……………四九
可憐油老狎恩情……………四六
可祖顔子之洞……………四七
可憎病鶴半夜驚人……………四七
可憐松蟬雨混并……………四四
石響寒泉秋眼泣……………四五
石崇之門客長辭……………四四
石髮返來風未櫛……………四一
石を戀ひては唯念ふ……………四四
石橋路上千峯月……………四八
左僕射臣之伯父也……………四七
左據函谷二嶂之岨……………四二

仙洞無人鶴一雙……………四五
仙人秋駕隔圓乘……………四六
仙に登つて半日……………四三
仙雞誤抵曉籬霜……………四三
仙鶴是重……………四三
古渡南橫迷遠水……………四三
古渡偷穿馬踏危……………四一
古今を須叟に觀て……………四九
冬の葉の霜を待つよりも……………四六
冬缸凝兮夜何長……………四七
瓦有鴛鴦……………四七
瓦檐時誤鴛鴦冷……………四五
出高山而既寒……………四三
出從天意濕流霞……………四三
未及暮景……………四七
他生定作愛花人……………四八
句々妍詞綴色絲……………四九
主人一去幾春風……………四五
右界巖斜障首之險……………四二
只照形容難照思……………四二
汀風魚躍誤琴聲……………四六
戊巳校尉正衣冠兮……………四八
去似奔車幾轉輪……………四三
打岸寒聲晚浪香……………四三

加冷飯以莫辭……………四三
北流戎羯之鄉……………四八
本朝之延曆延喜亂子多……………四五
玄蹤を仰いで遙かに契る……………四三
生涯零落五湖秋……………四二
世事不停江水逝……………四四
乍望團扇……………四七
半染秋毫浮硯水……………四六
尼父之一望也……………四一
老住香山初到夜……………四九
老將踏霜立戎樓……………四九
老病傍人豈得知……………四四
老子莊周吾師也……………四七
老臣在座私相語……………四六
西出陽關無故人……………四三
西軒泉石北窓風……………四一
西入虎狼之國……………四八
西叢七葉勁而健……………四六
西堂人稀……………四五
西枝を折つて机に置く……………四〇
西宮南内多秋草……………四三
百谷泉聲欲暮空……………四二

六 畫

| | | | |
|-------------|-----|-------------|-----|
| 百川未有回流水 | 四七一 | 江柳影寒新雨地 | 四三五 |
| 百尺樓頭日落遲 | 四七二 | 江都之縱逸遊 | 四三六 |
| 百里奚愚於虞 | 四七三 | 江波水潔 | 四三九 |
| 百代の闕文を收めて | 四七四 | 光難盡古春消處 | 四四一 |
| 百卉盡零 | 四七五 | 光燒半秘嶺松煙 | 四四二 |
| 自然日日鳥相馴 | 四七六 | 各得一家之月 | 四四三 |
| 自供芬芳 | 四七七 | 各吟一句 | 四四四 |
| 自化冰壺之心 | 四七八 | 池水蓮傳累葉芳 | 四四六 |
| 自羨雙飛之義 | 四七九 | 池觀早荷與玉翻 | 四四七 |
| 自承陶染 | 四八〇 | 向何方而陳別緒 | 四四八 |
| 自慙揚露歸空暮 | 四八一 | 向天竺の寺の前の石上に | 四四九 |
| 色香菊老岸風芳 | 四八二 | 州民作甘棠之詠 | 四五〇 |
| 色自再入 | 四八三 | 州民縱作甘棠詠 | 四五〇 |
| 色爭霜葉辭林色 | 四八四 | 地與英靈色方黃 | 四五〇 |
| 色映新籬堤柳黛 | 四八五 | 地白猶迷停午影 | 四五〇 |
| 早臥無情看雪月 | 四八六 | 曲池秋波 | 四五〇 |
| 早晚由來屬野煙 | 四八七 | 曲水の鶯花に老いたる | 四五〇 |
| 早萎鳴復歇 | 四八八 | 汗收赤驥之溝 | 四五〇 |
| 竹葦村鷺燈映虛 | 四八九 | 汗淡周勃之背 | 四五〇 |
| 竹編客舍雨聲時 | 四九〇 | 任馬蹄而優遊 | 四五〇 |
| 有琴有酒閑中樂 | 四九一 | 任是非於春叢 | 四五〇 |
| 有歸歟之歎音 | 四九二 | 因巴字而添風情 | 四五〇 |
| 羽翼を待つて以て鳳曆を | 四九三 | 因花多覺世無常 | 四五〇 |
| 羽爵周年曲洛波 | 四九四 | 老趁身來亦避難 | 四五〇 |
| | | 老將腰疲鳳劍乖 | 四七一 |
| | | 交遊少日心如水 | 四七三 |
| | | 仲尼覆醢於子路 | 四七三 |
| | | 仰支蹤而遙契 | 四七三 |
| | | 仰膝下而流汗 | 四七三 |
| | | 仰榮今朝 | 四七三 |
| | | 如披雲霧而觀青天 | 四七三 |
| | | 安卑位 | 四七三 |
| | | 名醫道士惟銀丸 | 四七三 |
| | | 守凄清於瓦溝之中 | 四七三 |
| | | 危多葉之待霜 | 四七三 |
| | | 舟隨彭蠡鳴聲去 | 四七三 |
| | | 此處仙皇昔待風 | 四七三 |
| | | 蟲の聲を尋ねて | 四七三 |
| | | 列子がここに駕するや | 四七三 |
| | | 帆を擧げて往返するや | 四七三 |
| | | 艾髮歸衰弄月人 | 四七三 |
| | | 羊祐臨望之地 | 四七三 |
| | | 全教獨覺不觀空 | 四七三 |
| | | 亦宅洛陽而宴飲 | 四七三 |
| | | 至無定家 | 四七三 |
| | | 多勝三千世界花 | 四七三 |
| | | 而智於秦 | 四七三 |
| | | 在朝故舊醜香濃 | 四七三 |
| | | 回塘春柳 | 四六七 |
| | | 共立玉欄前 | 四六一 |
| | | 沙渚瑩米白水精 | 四四〇 |
| | | 沙鷗之眠易驚 | 四四〇 |
| | | 沙雨荷開交蓋影 | 四四八 |
| | | 沙風を遮つて婉轉す | 四一九 |
| | | 沙漠日西逆旅聲 | 四三三 |
| | | 吳強大分 | 四七四 |
| | | 吳岫雨來溪澗浴 | 四七八 |
| | | 吳郡望青風放馬 | 四七七 |
| | | 吳人劍色掛秋霜 | 四七六 |
| | | 吳人棹而高歌 | 四七九 |
| | | 身埋胡塞千重雪 | 四七〇 |
| | | 身を材と不材との間に | 四七四 |
| | | 身留細柳孤營月 | 四六八 |
| | | 身老五花風月席 | 四七五 |
| | | 身居賤職 | 四七四 |
| | | 身を處いては豈羨んや | 四七六 |
| | | 我后少年學此文 | 四六七 |
| | | 我王也萬夫之防 | 四六五 |
| | | 我聞相如膽文 | 四四九 |
| | | 我を送つて商山を過ぐ | 四三九 |

七 畫

| | | | |
|-------------|-----|------------|-----|
| 我垂霜鬢夏中秋 | 四三二 | 見其客姿 | 四六六 |
| 我が白頭翁に贈る | 四三三 | 折籬花而供佛界 | 四六〇 |
| 君已歸泉中 | 四三三 | 折西枝兮置机 | 四五〇 |
| 君不見北邙春雨 | 四三七 | 初一葉風穿骨入 | 四二五 |
| 君に勸む更に盡せ | 四三三 | 初清單衣支體輕 | 四三〇 |
| 君が爲めに通客を謝せん | 四三三 | 初疑波面孤雲宿 | 四三八 |
| 君著風情炎處冷 | 四三三 | 初陽且照 | 四三九 |
| 吾君又曆數永 | 四三三 | 更誤秋風計會新 | 四二六 |
| 吾君又胤子多 | 四三五 | 更誤沙頭片月殘 | 四三八 |
| 巫峽之水能覆舟 | 四三七 | 伯司空之繫龍門 | 四三二 |
| 巫女別粧染曉風 | 四三六 | 伯始致位相公 | 四三七 |
| 巫女昔夢慙妄想 | 四三六 | 吟空綠重老槐間 | 四三二 |
| 巫女嶺南行雨冷 | 四三一 | 吟急殘燈光正背 | 四三六 |
| 似結涓露而納秋月 | 四三〇 | 何れの方に向つてか別 | 四三三 |
| 似昔前行臨浪夕 | 四二六 | 緒を | 四三三 |
| 似面不同 | 四二六 | 何紫何紅露影秋 | 四三三 |
| 壯士衣單易水秋 | 四二六 | 呂尚磻溪之漁者 | 四三七 |
| 壯士辭燕 | 四二八 | 呂尚父之面波 | 四三七 |
| 壯日如今去不歸 | 四二九 | 言其尊儀 | 四三六 |
| 壯齒今何在 | 四二八 | 言の爲めに秋の草 | 四三七 |
| 伴鄭泉而得水路 | 四二二 | 杜康昔構容人息 | 四三〇 |
| 伴霞難盡餘花艷 | 四二二 | 阮家南北舊來隣 | 四三八 |
| 伴溪鳥而傳法音 | 四二〇 | 昏窓掩而無人 | 四三九 |
| 見紅蘭之受露 | 四二六 | 沉聞薄暮第三聲 | 四三八 |
| | | 收百代之闕文 | 四四九 |
| | | 沉湘を遶つて | 四五〇 |
| | | 忌むこと莫かれ多年の | 四六九 |
| | | 別渭水而猶疊 | 四七一 |
| | | 良人未歸 | 四七一 |
| | | 岐山今夜月 | 四三三 |
| | | 那堪漸々鐘聲暮 | 四三三 |
| | | 年此八旬行 | 四三三 |
| | | 每逢五日已成靈 | 四三二 |
| | | 低昂遂步豈由風 | 四三二 |
| | | 忍辱衣中石結緣 | 四三〇 |
| | | 合情空問影中人 | 四三三 |
| | | 李將軍之守邊 | 四三六 |
| | | 八 畫 | |
| | | 花柳城十二衢 | 四三三 |
| | | 花色春深林霧底 | 四三九 |
| | | 花承輻輪之跌 | 四三〇 |
| | | 花色鳥聲 | 四三九 |
| | | 花亭風裏 | 四三八 |
| | | 花薰東閣萬年盃 | 四三三 |
| | | 花筵晉日關亭飲 | 四三三 |
| | | 花落鶯啼携未別 | 四三三 |
| | | 花鳥縱雖期向後 | 四三三 |
| | | 花疑漢女啼粧淚 | 四一五 |
| | | 花を採つては拂ひ盡す | 四二六 |
| | | 花に因つて多く世の無 | 四七八 |
| | | 常を | 四七八 |
| | | 花を尋ねて主を問はず | 四一〇 |
| | | 花前昔會春夢短 | 四七三 |
| | | 花陽洞裏秋壇上 | 四二八 |
| | | 昔驂騏驎於吳坂 | 四七四 |
| | | 昔成王之叔父周公旦 | 四一三 |
| | | 昔伊尹有莘氏之媵臣也 | 四六七 |
| | | 昔隋煬帝之報智者 | 四六一 |
| | | 昔伯牙絕絃於鐘期 | 四七三 |
| | | 昔尼父之在陳兮 | 四七三 |
| | | 昔君烏紗帽 | 四七三 |
| | | 林風槐舊繁花久 | 四六七 |
| | | 林を卜むる鳥は夕陽の | 四三六 |
| | | 林外雪消山色靜 | 四〇九 |
| | | 林巒織着黃絲纈 | 四三〇 |
| | | 林間縱有殘花在 | 四三三 |
| | | 林梢鴈陣穿秋霧 | 四二七 |
| | | 林蘿深處趁清涼 | 四二一 |
| | | 空階雨脆月初傾 | 四三三 |
| | | 空遣春風且斷腸 | 四六九 |
| | | 空失後宮寵幸時 | 四七〇 |

| | | | | | | | |
|------------|-----|-----------|-----|------------|-----|------------|-----|
| 空假葉飛林雨盡 | 四九 | 長懸鷲峰之月 | 四六〇 | 知音の遇ひ難きことを | 四七三 | 岸を打つ寒聲は | 四三三 |
| 空嗟共會之娘 | 四七七 | 長安十二街 | 四二八 | 東叢八葉疎而且寒 | 四四六 | 岸草煙濃識水東 | 四二〇 |
| 空林獨與白雲期 | 四七〇 | 長鳴於良樂 | 四七四 | 東方五百之塵 | 四六〇 | 兩川風景同三月 | 四七五 |
| 青陽薄寒木之頂 | 四七二 | 長夜の曙けることを | 四七四 | 東阿之巧詞賦 | 四六六 | 兩三叢菊飽霜花 | 四三八 |
| 青苔院靜地空老 | 四九〇 | 悲しむ | 四七七 | 東平王之思舊宅也 | 四七三 | 兩鬢白於邊地霜 | 四六四 |
| 青巖之石削成 | 四九五 | 長恨春歸無覓處 | 四二二 | 東船西船情無言 | 四七一 | 明主十徵何謝病 | 四五六 |
| 青草湖圖波寫得 | 四三三 | 孤叢兩三莖 | 四三一 | 東籬方遇南裏主 | 四三三 | 明かならず暗からず | 四六一 |
| 青鳥を問うて音を知る | 四三三 | 孤帆飛而不留 | 四四五 | 松花之色十廻 | 四六五 | 明妃有淚寒垣秋 | 四二九 |
| 青玉燈殘 | 四四九 | 孤臥冷席 | 四七七 | 松戸入稀 | 四九九 | 明月の過ぎ易きを恨み | 四七七 |
| 青楸の霜を離る | 四七六 | 孤館夢殘怨雨秋 | 四三六 | 松墻風寒聞夜琴 | 四五七 | 孟嘗君之多樂 | 四七三 |
| 金鷄障下養爲兒 | 四七〇 | 孤竹二子之去周 | 四三六 | 松門露暗僧歸寺 | 四六二 | 孟嘗君出關之程 | 四七五 |
| 金樓宴罷月徘徊 | 四七一 | 迎佛之使飛煙 | 四九 | 松に入る風の響は | 四九九 | 夜長相對百愛生 | 四三八 |
| 金紫由來種長年 | 四七五 | 迎晴拂盡墻陰雪 | 四四四 | 松風蕭颯 | 四三三 | 夜衣漸識千山雪 | 四三八 |
| 金磬鳴而有響 | 四九五 | 其の尊儀を言せば | 四六六 | 門外煙霞任雀羅 | 四六三 | 夜深不語中庭立 | 四二〇 |
| 金井煙分薛荔疎 | 四九五 | 其の寶算を計ふれば | 四六六 | 門客建瓴亭之碑 | 四六九 | 夜添薰籠之氣 | 四二六 |
| 金風吹落玉簫聲 | 四四九 | 其の容姿を見れば | 四六六 | 門人の逮ぶことなきを | 四七三 | 忽醉數盃 | 四二一 |
| 金風吹拂青山極 | 四四五 | 其の岐嶷を論ずれば | 四六六 | 門出水屑春浪齧 | 四七七 | 忽看鳥瑟三光影 | 四二六 |
| 金殿夢驚傳好語 | 四四四 | 其の醜を歎らず | 四七四 | 征徒旆重胡關曉 | 四六四 | 波沈西日紅蕪淪 | 四二二 |
| 金谷園花片片燃 | 四二〇 | 知らず細葉は | 四二七 | 征衣過夕陽之下 | 四二九 | 波臣衣錦吹何歸 | 四三三 |
| 金殿月中看擣藥 | 四四五 | 知らず轉た此の中に | 四二二 | 岸樹日藏省葉紅 | 四三三 | 波勾遠覺吹秋水 | 四三三 |
| 長生殿閣鐘黃昏 | 四五四 | 知らず陽臺の朝雲の | 四七〇 | 岸柳綠前鶯欲認 | 四三四 | 非祖五柳曉雲孫 | 四三三 |
| 長竿昌雪白龍蟠 | 四四七 | 知らず洛浦に神皇の | 四七〇 | | | | |
| 長河暗泮孤開急 | 四四一 | | | | | | |

| | | | | | | | |
|------------|-----|-------------|-----|-------------|-----|-----------|-----|
| 非暖非寒漫漫風 | 四二一 | 念佛山僧驚舍利 | 四四一 | 秋踏仙家之雪 | 四三四 | 紅躑躅花飛失態 | 四一九 |
| 枕冷唐妃專幸裏 | 四四四 | 虎の尾を履んで | 四六八 | 秋山寂々葉零々 | 四三六 | 紅窓燈盡送嬌音 | 四一四 |
| 枕山樓入峽猿聲 | 四四八 | 妾顔秋暮孤蛾老 | 四七一 | 秋風暮虛苗之畦 | 四七四 | 紅應交白鏤梅辰 | 四一五 |
| 枕欹隣笛清商曲 | 四二八 | 雨染高和動暮雲 | 四三三 | 秋逢白月正圓時 | 四二九 | 紅衣曉簿 | 四一七 |
| 芭蕉之命易破 | 四二七 | 委倚伏於秋草 | 四四四 | 秋帳含茲明月光 | 四七六 | 紅樹重々寒雨後 | 四六三 |
| 芭蕉先有聲 | 四二六 | 忠臣何在 | 四七〇 | 秋月夜開閑案曲 | 四四九 | 紅林半落寒山透 | 四六三 |
| 芥蘗入簾 | 四二六 | 物故猶堪用 | 四三三 | 秋調白雪之聲 | 四四九 | 紅火爐前初炷燈 | 四三九 |
| 芥芳染脣 | 四三〇 | 易を讀む床の頭の | 四三三 | 秋風を待たず | 四七七 | 紅葉嵐深窓暗雨 | 四三三 |
| 武昌樓暗暮煙深 | 四二七 | 垂楊空掃舊門欄 | 四四四 | 秋霧橫峯消鴈陣 | 四五八 | 紅葉殘水岸高 | 四三八 |
| 武盡美矣 | 四二七 | 沂十萬里之濤 | 四三三 | 秋菊霜寒 | 四五六 | 紅葉又紅葉 | 四三八 |
| 枝留彩鳳桃源月 | 四二八 | 表以大花終南之山 | 四三三 | 秋を衝める水のほとりに | 四三三 | 紅林定有重青日 | 四三三 |
| 枝を辭する雪藥 | 四二二 | 拔白刃以萬舞 | 四三三 | 秋去秋來聞不改 | 四三三 | 紅蘭の露を受くるを | 四三三 |
| 妻咲張儀舌猶存 | 四二二 | 定知悵然三峽五湖之春浪 | 四三三 | 秋淺風槐一葉聲 | 四三三 | 紅袖を飛ばして以て | 四三三 |
| 妻奴未出關 | 四二二 | 邵伯止息之鄉 | 四三三 | 秋風一箭鱸魚膾 | 四三三 | 紅女之手難施其功 | 四三三 |
| 周且古風傳曉水 | 四三三 | 岫幌日暮 | 四三三 | 春夜欲明 | 四三三 | 紅粉を妓樹に | 四三三 |
| 周穆長坂之雪 | 四三三 | 河水之浴碎金 | 四三三 | 春娃眠足鴛衾重 | 四三三 | 紅蠟黏枝杏欲開 | 四三三 |
| 居席暮深 | 四三三 | 采人のかまざる | 四三三 | 春腰無力欲栖鴉 | 四三三 | 風觸松杉玉軫聲 | 四三三 |
| 居無常座 | 四三三 | 依依鶴唳猶聞 | 四三三 | 春棹容與沙涯之間 | 四三三 | 風報金商氣味幽 | 四三三 |
| 叔度動名京師 | 四三三 | 卷簾松竹雪初霽 | 四三三 | 春來日暖危心立 | 四三三 | 風扇舞腰香不盡 | 四三三 |
| 杭州道絲月行人 | 四三三 | 近愛黃家獸炭馴 | 四三三 | 春を送つて争でか得ん | 四三三 | 風力橋高錦繡明 | 四三三 |
| 爭教七夕縮爲六 | 四三三 | | | 春無跡至争尋得 | 四三三 | 風之力蓋寡 | 四三三 |
| 命を論じては還て思ふ | 四三三 | | | 春闈闕此青苔色 | 四三三 | 風吹曲岸鶯絲寒 | 四三三 |
| 泣計露珠叢底衰 | 四三三 | | | 春霞秋月 | 四三三 | 風冷纔驚戲藻魚 | 四三三 |
| 宮槐風底失何尋 | 四三三 | | | 春巖煙老 | 四三三 | 風景之最好 | 四三三 |

九 畫

| | | | | | | | |
|-----------|-----|-------------|-----|-------------|-----|-------------|-----|
| 風月依倚夢想間 | 四七三 | 則文滄動而紫鱗騰 | 四〇九 | 苔を掃つて暫らく | 四二〇 | 吟嵩山之逢鶴鶴 | 四三三 |
| 風水爲郷船作宅 | 四七一 | 則彩雲暖而黃鸝出 | 四〇九 | 苔庭木落紅無跡 | 四二〇 | 飛紅袖以飄形 | 四三三 |
| 風消黃雀之跡 | 四四六 | 則梁婆世界十善之主 | 四〇六 | 指象魏而北轅 | 四二一 | 飛鳥朝者王女也 | 四三六 |
| 風舞采玉之詞 | 四四七 | 則文王之孫長子誦之幻日 | 四〇六 | 指前途而勞思 | 四二二 | 恨無心於煙霞 | 四三三 |
| 風傳昭花之曲 | 四四九 | 是れ花の心の | 四二〇 | 指下情多楚峽流 | 四二九 | 恨明月之易過 | 四三七 |
| 風疎秋桂之峯 | 四四九 | 是れ種の氣の早く来る | 四二五 | 染着秋風一箸鱸 | 四二七 | 恨隔面於驚波萬里外 | 四三七 |
| 風雲を契つて以て | 四六六 | 是非を春の叢に任せたり | 四二四 | 染人の功を待つ | 四二六 | 客路霜乾秋韻遠 | 四三八 |
| 風聲の傳ふべきこと | 四六九 | 便是春風之裁出 | 四二六 | 思控馭於茅山 | 四二八 | 客夢驚雪我樓秋 | 四三〇 |
| 風物を記して以て | 四六九 | 便是鹽梅鼎足臣 | 四二二 | 思婦を深窓に | 四二五 | 客帆有月風千里 | 四三〇 |
| 風去茅君白鶴峯 | 四三三 | 便混商風添雅韻 | 四二二 | 南北東西不定家 | 四二七 | 盃酒を酌んで以て強ちに | 四三三 |
| 風を迎へては衣染む | 四三七 | 便採孤叢秋露種 | 四三〇 | 南黨風與南枝色 | 四二六 | 鄒枚散後平臺靜 | 四三九 |
| 風暖膏煙重卷翠 | 四三三 | 胡塞嘶花遙去馬 | 四三〇 | 南流鷗浴 | 四二六 | 洞深疑是仙方雪 | 四三七 |
| 香亂馬嘶隴寒風 | 四三八 | 胡人不敢南下 | 四二六 | 南風裁職領新粧 | 四三三 | 洲蘆浪碎鷺花白 | 四三五 |
| 香醇淺酌浮如蟻 | 四三〇 | 胡廣累世之農夫也 | 四二七 | 南門曉到東西路 | 四二九 | 衲衣易破 | 四三九 |
| 香印微煙無礙月 | 四三〇 | 胡關春暮難留雪 | 四二九 | 柳影蕭疎秋日寒 | 四三五 | 故鄉有母秋風淚 | 四三九 |
| 香煙出戶 | 四三九 | 洛陽城外 | 四二九 | 柳下惠東方朔達人也 | 四二五 | 背似有龍魚負程 | 四四一 |
| 香爐有火向西眠 | 四六一 | 洛陽月入野煙 | 四三三 | 計其寶算 | 四二六 | 范蠡長男凡草老 | 四三一 |
| 若言皇子神聰敏 | 四六七 | 洛陽月莫遲歸 | 四三三 | 計會一時不辨香 | 四二六 | 范岫辭官筆一雙 | 四三二 |
| 若尋野外和羹主 | 四六一 | 洛陽を卜めて | 四三三 | 計へんと欲す數行の鴈の | 四二五 | 後會を問うて魂を消す | 四三三 |
| 若雲夢者有八九 | 四三六 | 洛水流間橫宿雪 | 四二九 | 柳似舞腰池似鏡 | 四二五 | 省向天竺寺前石上見 | 四三六 |
| 若耶風北來賓響 | 四三五 | 幽咽泉流水下難 | 四二九 | 柳眼剪波春黛綠 | 四二五 | 屋舍大荒非舊日 | 四三五 |
| 若比人心是夷途 | 四七四 | 幽人を古屋に | 四二五 | 廻翔を蓬島に望めば | 四二八 | 星翻空拂檣花露 | 四三六 |
| 若比人心是安流 | 四七四 | 幽澗泉聲向戸飛 | 四二五 | 廻雪之袖暗薫 | 四二九 | 契風雲以復龍興 | 四三六 |
| 若非宋玉家邊女 | 四七一 | 苦行六年 | 四二〇 | 吟殺伶倫竹與絲 | 四二〇 | 茅屋無人扶病起 | 四三六 |

十 畫

| | | | | | | | |
|-----------|-----|------------|-----|-----------|-----|---------|-----|
| 建春門外雪埋春 | 四〇九 | 高老山深曉月幽 | 四二二 | 草滿銅臺 | 四二四 | 豈非暖雨之染成 | 四二六 |
| 柯亭月閑 | 四四七 | 高宴千萬處 | 四二八 | 草創主人雲歛後 | 四二七 | 豈圖左袵和親日 | 四二七 |
| 泉識淡交長有味 | 四四八 | 高野姬者公主也 | 四二八 | 馬を喪ふの老 | 四二七 | 砧添鄉淚孤營外 | 四二九 |
| 看取風流何所似 | 四三七 | 高車無山雪不消 | 四二九 | 馬臺東西遠山路 | 四二七 | 粘怨楚屈原之舍 | 四二七 |
| 面に似て同じからず | 四三六 | 夏日告朝 | 四二二 | 馬嘶反礙精神舊 | 四二七 | 袁司徒之鬢雪 | 四二七 |
| 卑位に安んず | 四七四 | 夏漏遲明聽郭公 | 四二二 | 馬蹄に任せて優遊す | 四二六 | 衰鬢山陰多歲雪 | 四二七 |
| 急於流水無迴浪 | 四三九 | 夏迎一膚之秋 | 四二三 | 馬踏輝陽桐葉行 | 四二六 | 送我過商山 | 四二九 |
| 前途を指して思を | 四三三 | 酒德頌之文 | 四二二 | 海風之吹沈香 | 四二六 | 送春爭得不慙慙 | 四二三 |
| 刺山飛泉涌出 | 四三八 | 酒軍在座 | 四二二 | 海浸城根老樹秋 | 四二六 | 柴扉日暮隨風掩 | 四三二 |
| 挑盡寒燈夜半花 | 四三三 | 酒是青州之竹 | 四二六 | 海を渡り書を傳ふ | 四二五 | 柴扉人稀緩酌蘭 | 四三二 |
| 恒娥夜夜應儼艷 | 四三一 | 酒氣薫時艶艶開 | 四二六 | 酌盃酒以強勸 | 四三三 | 孫子荆之枕揚波 | 四四四 |
| 昨日開來今落去 | 四七八 | 浮雲自後寒應暖 | 四二九 | 酌山霞之晚色 | 四三一 | 孫子夜書獨有明 | 四四〇 |
| 拜井奔流激射 | 四三八 | 浮雲富到避何方 | 四二六 | 酌上葉而滿樽 | 四二五 | 桃花獨咲一枝春 | 四七〇 |
| 城柳園梅之異種 | 四四四 | 浮藻書水字難成 | 四二五 | 峽裏猿鳴悲又清 | 四二八 | 桃顏流汗宿粧紅 | 四七〇 |
| 待羽翼以開鳳曆 | 四六六 | 浮藻を詞露に鮮かにす | 四二九 | 峽に入る泉の聲は | 四二九 | 能消忙事成閑事 | 四二五 |
| | | 浮藻花下一時春 | 四二〇 | 峽中之煙拂地 | 四二七 | 能蘊虛心獨苦寒 | 四二七 |
| | | 涼蟻忽扇物先哀 | 四二五 | 流下綠邊皆上壽 | 四二六 | 消盡雪青湖寺路 | 四二七 |
| | | 涼煖二回郷外夢 | 四二四 | 流年豈返老來身 | 四二三 | 悄々猿啼已息 | 四三八 |
| | | 涼風寫得巖松韻 | 四二七 | 流俗の樹に似ず | 四二六 | 桂月清明 | 四三三 |
| | | 秦客訪花鷺出洞 | 四二〇 | 流響於渭水之文 | 四二六 | 桂花秋白雲閑地 | 四七一 |
| | | 秦城樓閣鷺花裏 | 四二〇 | 流に落つる濃色は | 四二三 | 班姬秋扇已亡色 | 四四〇 |
| | | 秦皇泰山之雨 | 四二六 | 流水より急く | 四二三 | 班扇長襟秋不盡 | 四四〇 |
| | | 秦爵琴聲調白雪 | 四二六 | 鳥鵲橋連浪往來 | 四二六 | 留到明朝不是春 | 四四三 |
| | | 草間蟲響臨秋急 | 四二六 | 鳥鵲橋頭水盡銷 | 四二四 | 留向紛紛雪裏看 | 四四七 |

宮漏高低風北送……………四三八
 宮人懷私之願……………四三六
 梁鷄栖而遲唱……………四三七
 梁孝王之曲觀平台……………四三六
 院に入る松の聲は……………四三八
 院に滿てる地塘……………四三九
 庭松百尺歷年老……………四三九
 庭前竹撼一窓翻……………四四〇
 浪織藻龍柳岸風……………四四一
 浪文燒盡暮煙中……………四四二
 皆踏萬頃之霜……………四四二
 荆籬客醉斜吹菊……………四四三
 荷令見君應向我……………四四三
 致身材與不材問……………四四四
 浦月之影漫動……………四四四
 韋賢少子一叢殘……………四四一
 旅館無人暮雨魂……………四四二
 珠顆形容隨日長……………四四三
 眠幽人於古屋……………四四四
 氣力補性……………四四四
 竊窺隔簾談笑……………四四七
 粉閣夢驚傳好語……………四四八
 案頭則添三十行之曆日……………四四三
 荒院珠簾閑卷色……………四四七

十一畫

素髮應無更綠春……………四三四
 帶以洪河涇渭之川……………四五一
 通籍重門……………四四三
 細浪沙來填鷺跡……………四四三
 掃者而暫代筵……………四四〇
 掩絳雪於仙家……………四四二
 流年豈返老來身……………四四三
 連峯之風淺深……………四四四
 唱衰首戴殘花雪……………四四四
 剪丹霞而爲葩……………四四六
 華樹邊驚女妓啼……………四四五
 曹王園舊幾藩春……………四四八
 紫茸偏奪朱衣色……………四四〇
 淵客紆緋應自輕……………四四三
 第三伏汗誰身分……………四四五
 許由長棲於潁水之月……………四四六
 潯陽江畔夜送客……………四四三
 假唱鶴林之煙……………四四〇
 陳后閣疎曉雪深……………四四九
 乾坤洞朗照支黃……………四四九
 笛吹向……………四三七
 從今便是家山月……………四三九
 眼盡巴山一點雲……………四七〇
 晝夜和同迷漏刻……………四三九

十一畫

野煙の春の光……………四二一
 野草霜深……………四一九
 窓を隔てて夜の雨を……………四二七
 窓東早月當琴榻……………四二七
 窓前亦望千萬里之春風……………四二三
 窓對前林暗淡紅……………四二一
 窓に搖く竹の色は……………四二六
 窓下林聲帶夜蟬……………四二五
 窓前春淺竹聲寒……………四一九
 雪積陰陰暗辨梅……………四一九
 雪膚路濕霓裳重……………四一九
 雪中絕盡幽人夢……………四二八
 雪盡氷解之日……………四二〇
 問采人之不龜……………四二四
 問後會而消魂……………四二四
 問青鳥而知音……………四二五
 清泉繞屋澄心遠……………四六一
 清洛曉光鋪玉簾……………四二八
 清風展簾因時眠……………四二三
 清涼常願與人同……………四二三
 望玉階而餘喘……………四七〇
 望青秋之離霜……………四七六
 望廻翔於蓬鳴……………四七八
 望波雲鎖千條雪……………四七八

十一畫

望牛漢之西轉……………四二二
 梨園弟子白髮新……………四二二
 梨花一枝春帶雨……………四七〇
 梨花園中冊作妃……………四七〇
 欲計數行鴈弟兄……………四四五
 欲迷歸路隱雲秋……………四二六
 欲認度關之馬……………四七八
 斜岸之雪遠近……………四三四
 斜薰春砌入珠簾……………四二六
 斜脚繆出……………四二五
 唯我のみ愛するにあらず……………四二七
 唯見江心秋月白……………四七一
 唯因花鳥作聰明……………四二〇
 唯歡名字入除書……………四二六
 陶君門舊秋霜鏤……………四二九
 陶君籬舊寒花悴……………四三三
 將窺過隙之駒……………四七八
 將軍守塞……………四六八
 郭細侯之春竹……………四六九
 郭を遮る寒潮は……………四二七
 蓋嶺蓋聲調白雪……………四三〇
 蓋嶺泉聲穿雪流……………四三三
 寂寞柴門人不到……………四三七
 寂寞求來谷鳥聲……………四三七

淺深猶暗千峯曉……………四三七
 淺深何水水猶結……………四〇九
 莫忌多年風月遊……………四六九
 莫嫌鬢上些々白……………四七五
 張翰搖頭喚不歸……………四三六
 張博望之到牛漢……………四三三
 採千載之遺韻……………四四九
 採花拂盡首問霜……………四七六
 終霄動故情……………四三八
 終全孤竹之潔……………四五六
 鳥思盃底晚香分……………四五〇
 魚栖鳥瑟之響……………四六〇
 高山を出で、既に寒し……………四七二
 商人棹雪歌漁浦……………四三九
 淚灑蒼梧一片煙……………四六八
 消宮東面煙波冷……………四四三
 陸惠曉之柳拂地……………四四四
 盛夏花留三伏雪……………四四三
 移榻開襟夏日長……………四四二
 富春山月當頭白……………四六九
 笙歌縹渺虛空裏……………四七三
 絃中恨起湖山遠……………四四九
 莓苔變綠林間露……………四三三
 宿禽歛翅……………四三四

素髮應無更綠春……………四三四
 帶以洪河涇渭之川……………四五一
 通籍重門……………四四三
 細浪沙來填鷺跡……………四四三
 掃者而暫代筵……………四四〇
 掩絳雪於仙家……………四四二
 流年豈返老來身……………四四三
 連峯之風淺深……………四四四
 唱衰首戴殘花雪……………四四四
 剪丹霞而爲葩……………四四六
 華樹邊驚女妓啼……………四四五
 曹王園舊幾藩春……………四四八
 紫茸偏奪朱衣色……………四四〇
 淵客紆緋應自輕……………四四三
 第三伏汗誰身分……………四四五
 許由長棲於潁水之月……………四四六
 潯陽江畔夜送客……………四四三
 假唱鶴林之煙……………四四〇
 陳后閣疎曉雪深……………四四九
 乾坤洞朗照支黃……………四四九
 笛吹向……………四三七
 從今便是家山月……………四三九
 眼盡巴山一點雲……………四七〇
 晝夜和同迷漏刻……………四三九

十一畫

花馬嘶而欲惑……………四二九
 虜身豈羨龜多智……………四七五
 責不言於桃李……………四三三
 最弟謝其系名……………四三三
 率貴臣以獻詩……………四三三
 閉閣只聽朝暮鼓……………四三三
 眞如珠上塵厭禮……………四三三
 陵園配妾月前心……………四三三
 崔嵬入室書千卷……………四三三
 深しとや爲ん……………四三三
 情を含んで空しく問ふ……………四三三
 滄飯を加へて以て辭する……………四三三
 皎潔を花表の……………四三三
 彩花を踏んで歩を失ひ……………四三三
 控馭を茅山に思へば……………四三三
 問宋人之不龜……………四三三

雲雨夢香風脆春……………四三三
 雲深聖王曾遊處……………四三三
 雲領飛泉洞裏聲……………四三七
 雲碓月暗雪有聲……………四三七
 雲鬢新梳薄似蟬……………四三〇
 雲夢の如きもの八九……………四三六
 雲を開いて玉を種ふ……………四二六
 雲霧を披いて青天を……………四二六
 寒猿抱木唯拂月……………四三三
 寒鳥啼苦漏猶深……………四三三
 寒鳴自應三危結……………四三三
 寒鞭驅去紅難駐……………四三三
 寒月曉殘……………四三三
 寒巖洗枕落泉音……………四三三
 殘菊猶開於繁霜之後……………四三三
 殘陽得聞甘重聽……………四三三
 殘澄消又明……………四三三
 殘溜滴階聲……………四三三
 粧誤峴山金骨相……………四三三
 粧閑妓樓何寂靜……………四三三
 粧繁鳥囀家園露……………四三三
 粧咲秦醫一里兒……………四三三
 猶泣雍門之微吟……………四三三

| | | | | | | | |
|---------|-----|-----------|-----|------------|-----|-------------|-----|
| 綠絲枝弱不勝鶯 | 四二七 | 碧雲星透曉煌煌 | 四四四 | 境傳方術長看雪 | 四五五 | 誰の人を情つて離憂を | 四六三 |
| 綠竹掛衣涼處憩 | 四三三 | 齊後將何充供養 | 四六一 | 誕生七步 | 四六〇 | 誰待豫樟七年之日 | 四六三 |
| 綠油剪葉浦新長 | 四三〇 | 齊僧輕步不穿苔 | 四六一 | 閨婦孤夢還妬春 | 四六八 | 誰待豫樟七年之日 | 四六三 |
| 琉璃盤底水精丸 | 四三七 | 齊桓衣色洗波聲 | 四三〇 | 僕夫待衛難籠之山欲曙 | 四五〇 | 暮に遅き親交は | 四七三 |
| 琉璃色變難補月 | 四三四 | 薜蘿色裏亂猶餘 | 四三四 | 寫得楊妃湯後廳 | 四五一 | 暮鳥歸林不宿紅 | 四七四 |
| 琉璃扉落雖相邀 | 四一六 | 薜蘿清淚珠還浦 | 四三四 | 蒲葉露低漁火濕 | 四五八 | 暮雨偷將瀧水聲 | 四七七 |
| 銀水洗除碧海吞 | 四一五 | 翡翠扇飄溪霧斷 | 四七〇 | 嘉賓喜色欺盃酒 | 四七五 | 墨客乞巧之情 | 四七六 |
| 銀漢無雲難洞曉 | 四三〇 | 翡翠簾疎亦不妨 | 四七〇 | 韶光入骨 | 四七〇 | 墨子之淚尙悲其變 | 四七五 |
| 銀河晴色曉顏清 | 四三三 | 寔妾擣衣泣南樓之月 | 四三三 | 綺羅脂粉粧無暇 | 四七〇 | 墨水澄時潭底出 | 四七一 |
| 夢蝶之翁 | 四三四 | 寔鶴怨長夢自斷 | 四三三 | 摸成任氏汗來脣 | 四七〇 | 數代戴霜 | 四七一 |
| 夢中鄉信驚秋鴈 | 四三五 | 銅梁山翠入江樓 | 四三八 | 厭はず時時の猿の | 四六〇 | 數重影底橋南絕 | 四七一 |
| 夢驚孤枕淚難乾 | 四三六 | 銅街陌柳條條翠 | 四四〇 | 閨を閉めて只聞く | 四六二 | 數聲砧冷月前襟 | 四七一 |
| 鳳筆宴酣方欲幸 | 四三六 | 賓閣南頭明月地 | 四三七 | 漁父の誨に孤けり | 四七四 | 醉はず吳坂楚嶺の寒風を | 四七五 |
| 鳳掖君誇溫樹露 | 四三六 | 賓馬繫書飛上林之霜 | 四三七 | 疑是襄王夢裏人 | 四七一 | 醉妓權聲弄管絃 | 四七五 |
| 鳳凰池上月 | 四三九 | 輕質染來 | 四三五 | 聚散隨身非出岫 | 四七四 | 醉はすんば争でか辭せん | 四七五 |
| 蒼霞夜色添銀液 | 四三七 | 輕紗漸白 | 四四五 | 黃鸝巷口鶯欲語 | 四七四 | 醉鄉國之俗 | 四七五 |
| 蒼波萬里遠天垂 | 四三七 | 壽藤高來霜印眉 | 四六一 | 楊を移して襟を | 四七二 | 潭色變來秋月後 | 四七五 |
| 蒼花日暮鬢寒霜 | 四三三 | 壽を獻じて吹き來る | 四六一 | 滿院地塘春欲迴 | 四七二 | 潭心月映金波漲 | 四七五 |
| 築路遙而難期 | 四三三 | 遙辭朔土入琴聲 | 四三三 | 滿簾霜毛送老來 | 四七二 | 樓に入る早月は | 四七五 |
| 築枯大底任園露 | 四三三 | 遙浮於水鏡之面 | 四三三 | 開鐘起問山高阜 | 四七二 | 踏彩霞而先歩 | 四七五 |
| 築を仰ぐことは | 四三三 | 漸動春花之思 | 四三三 | 誰家集裏閣秋詩 | 四七五 | 踏露路迷紅葉色 | 四七五 |
| 築花外物終須語 | 四三三 | 銜秋水上千巖冷 | 四三三 | 誰人聞其好學 | 四七五 | 夏簾清兮畫不暮 | 四七五 |
| 碧氈帳上正飄雪 | 四三三 | 翠竹秋粧任玉裝 | 四三三 | | | 憂なし喜なし世上の情 | 四七五 |
| 碧樹路深山不重 | 四三三 | 翠箔燈籠秋秋歌 | 四三三 | | | | |

十五畫

| | | | | | | | |
|-------------|-----|---------|-----|-----------|-----|------------|-----|
| 潤艶流於言泉 | 四四九 | 履虎尾不噬 | 四六六 | 蕙帳空兮夜鶴怨 | 四六六 | 嘯野煙之春光 | 四七一 |
| 湖底松搖千尺雨 | 四四六 | 遮沙風而婉轉 | 四一九 | 鴛鴦瓦冷霜花重 | 四七〇 | 滌泔授手 | 四四四 |
| 暫降蓬萊萬里之雲 | 四三三 | 賜在帝恩含湛露 | 四三三 | 鴛鴦連袂詠吟 | 四七〇 | 琴あり酒あり閑中の樂 | 四七六 |
| 暫有愁眉與柳開 | 四三七 | 嬋娟無雙 | 四三三 | 憶會湘妃廟裏雨中看 | 四七〇 | 樵歌數曲負風還 | 四六三 |
| 影泛春流之波 | 四三六 | 朝紅粉於妓樹 | 四三三 | 憶嶺鹿歸溪霧底 | 四七〇 | 養得昔令扶病雀 | 四二〇 |
| 影漫南山青濕漑 | 四三三 | 請麴俗士之駕 | 四三三 | 獨對寒窓 | 四七七 | 親故適回駕 | 四三九 |
| 論其歧嶷 | 四三三 | 稻花風起釣絲飛 | 四三三 | 獨眠不得守庚申 | 四七五 | 學禪窓下遠鐘聲 | 四三九 |
| 論命還思木不材 | 四三三 | 敵國且以子來 | 四三三 | 獨騎善馬倚鎗穩 | 四七五 | 蹄踏輕質之雪 | 四三九 |
| 鄭泉を伴つて | 四三三 | 撫四海於一瞬 | 四三三 | 遺議於雷波之戲 | 四六六 | 墻垣を隔てず | 四三九 |
| 鄭公谿北遠嵐餘 | 四三三 | | | 濃淡離分五里朝 | 四三三 | 關伽花落故園霜 | 四三九 |
| 墳樹已秋風 | 四三三 | | | 濃粧泛酒曉對霞 | 四三三 | 隨分應異 | 四三九 |
| 墳上之風靡西 | 四三三 | | | 濃輝可愛 | 四三三 | 遠郭寒潮半夜聲 | 四三九 |
| 鴈字一行驚月去 | 四三三 | | | 濃輝可愛 | 四三三 | 壁畫家家音始亂 | 四三九 |
| 劉太守之秋蒲 | 四三三 | | | 燕寢月荒欲妬春 | 四三三 | 遷喬何日雖泥寒谷之蹊 | 四三九 |
| 熟惱漸知隨念盡 | 四三三 | | | 燕夢子傳萬代風 | 四三三 | | |
| 窮秋纔留於半日之間 | 四三三 | | | 螢火幽光消不見 | 四三三 | | |
| 廣陌塵中 | 四三三 | | | 橫嶺晚雲紅慘愴 | 四三三 | | |
| 額陽の高きを屈せざりき | 四三三 | | | 窺列子之云鶴 | 四三三 | | |
| 器在利而不在大 | 四三三 | | | 橋題不信蜀龍心 | 四三三 | | |
| 蝶を夢みるの翁 | 四三三 | | | 遲暮交親雲色淡 | 四三三 | | |
| 德是北辰 | 四三三 | | | 劍戟難防老及情 | 四三三 | | |
| 歎龜山之蔽魯 | 四三三 | | | 歷々白楊聲 | 四三三 | | |
| 潯陽楓葉帶霜碎 | 四三三 | | | 唇日添行辭屢攀 | 四三三 | | |
| 賞父老以擊筑 | 四三三 | | | 凝絳雪而作裝 | 四三三 | | |

十六畫

| | | | | | | | |
|---------|-----|-----------|-----|------------|-----|-----------|-----|
| 十六畫 | | 十六畫 | | 十七畫 | | 十七畫 | |
| 履虎尾不噬 | 四六六 | 蕙帳空兮夜鶴怨 | 四六六 | 嘯野煙之春光 | 四七一 | 應曜獨留於淮陽之雲 | 四六六 |
| 遮沙風而婉轉 | 四一九 | 鴛鴦瓦冷霜花重 | 四七〇 | 滌泔授手 | 四四四 | 應對易迷 | 四六六 |
| 賜在帝恩含湛露 | 四三三 | 鴛鴦連袂詠吟 | 四七〇 | 琴あり酒あり閑中の樂 | 四七六 | 應是花心忌意台 | 四三〇 |
| 嬋娟無雙 | 四三三 | 憶會湘妃廟裏雨中看 | 四七〇 | 樵歌數曲負風還 | 四六三 | 應是爲龜氣早來 | 四三〇 |
| 朝紅粉於妓樹 | 四三三 | 憶嶺鹿歸溪霧底 | 四七〇 | 養得昔令扶病雀 | 四二〇 | 應分一舉鶴毛羽 | 四三〇 |
| 請麴俗士之駕 | 四三三 | 獨對寒窓 | 四七七 | 親故適回駕 | 四三九 | 禪侶向壇 | 四三〇 |
| 稻花風起釣絲飛 | 四三三 | 獨眠不得守庚申 | 四七五 | 學禪窓下遠鐘聲 | 四三九 | 禪衣納厚雲藏線 | 四六一 |
| 敵國且以子來 | 四三三 | 獨騎善馬倚鎗穩 | 四七五 | 蹄踏輕質之雪 | 四三九 | 禍を學ぶ窓の下の | 四六一 |
| 撫四海於一瞬 | 四三三 | 遺議於雷波之戲 | 四六六 | 墻垣を隔てず | 四三九 | | |
| | | 濃淡離分五里朝 | 四三三 | 隨分應異 | 四三九 | | |
| | | 濃粧泛酒曉對霞 | 四三三 | 遠郭寒潮半夜聲 | 四三九 | | |
| | | 濃輝可愛 | 四三三 | 壁畫家家音始亂 | 四三九 | | |
| | | 濃輝可愛 | 四三三 | 遷喬何日雖泥寒谷之蹊 | 四三九 | | |
| | | 燕寢月荒欲妬春 | 四三三 | | | | |
| | | 燕夢子傳萬代風 | 四三三 | | | | |
| | | 螢火幽光消不見 | 四三三 | | | | |
| | | 橫嶺晚雲紅慘愴 | 四三三 | | | | |
| | | 窺列子之云鶴 | 四三三 | | | | |
| | | 橋題不信蜀龍心 | 四三三 | | | | |
| | | 遲暮交親雲色淡 | 四三三 | | | | |
| | | 劍戟難防老及情 | 四三三 | | | | |
| | | 歷々白楊聲 | 四三三 | | | | |
| | | 唇日添行辭屢攀 | 四三三 | | | | |
| | | 凝絳雪而作裝 | 四三三 | | | | |

禪定水清寒谷月……………四九
 雖一念不捐……………四九
 雖關提能救……………四九
 雖有風聲之可傳……………四九
 雖孤漁父之誦……………四九
 嶺を憶ふ鹿は溪霧の……………四九
 嶺面雲開翠黛織……………四九
 嶺に横はる晚雲は……………四九
 嶺懸驛路殘雲斷……………四九
 霜毛從老……………四九
 霜猿叫而峽煙深……………四九
 霜後添來旅鴈聲……………四九
 霜輕未殺萋萋草……………四九
 霞に伴つて盡き難し……………四九
 霞秋未逢……………四九
 霞消李老青牛路……………四九
 縱事仙人誰拾地……………四九
 縱令後會能相結……………四九
 縱無醉面將桃競……………四九
 麋鹿鳴聲屢更聆……………四九
 麋鹿踏紅洞裏秋……………四九
 聲混雲鴻出寒聲……………四九
 聲々麗曲敲寒玉……………四九
 墙上秋山入酒盃……………四九

牆中風景無塵網……………四九
 隱映朝霧之斷時……………四九
 闇夜猶行明月地……………四九
 鮮浮藻於詞露……………四九
 擣自金颺秋暮冷……………四九
 鴻聲斷續暮天遠……………四九
 前北鄉心片月知……………四九
 蟋蟀聲寒初過雨……………四九
 朦朧秋月之傾處……………四九
 詔雪未歸好鳥聲……………四九
 遼陽客路千峯引……………四九
 燭を隔てては看て……………四九
 龍門我泣浪花春……………四九
 薄媚狂鷄三更唱曉……………四九
 龜山の魯を蔽せる……………四九
 謝せず巫山一片の雲……………四九
 膝下に仰いで汗を流し……………四九

魏闕天明倒曉霜……………四九
 魏徵之鏡開匣……………四九
 魏年昔浪寄春苔……………四九
 魏宮名顯三台月……………四九
 魏帝之宮人已散……………四九

臨水館連江鴈翼……………四九
 臨白首而始知……………四九
 舊宅春遊待月歸……………四九
 舊枕故衾誰與共……………四九
 歸歟の歎音有り……………四九
 歸老休臣霜後眼……………四九
 離溪不忘昔栖心……………四九
 舉帆往友秋風送……………四九
 瓊漿氣味得霜成……………四九
 簞滑隣鷄報月音……………四九
 叢蘭處處裝初開……………四九
 叢露日暮……………四九
 襟飄魯聖以思程……………四九
 壘々青塚色……………四九
 雙風北歸山寂々……………四九
 暫駐鸞輿一日蹤……………四九
 曙月銜山出雲遲……………四九
 顔子が詞を祖とす……………四九
 繞沅湘而傷楚……………四九

韻耄超歸舊谷雲……………四九
 曠日林間六月寒……………四九
 藍水應無水互思……………四九
 藥欄日晡曝秋雪……………四九

繩床欲穿……………四九
 曝布足百……………四九
 邊雲秋冷……………四九
 邊雲空愧惜金名……………四九
 願領梨園少女風……………四九
 願得東流入漢家……………四九
 願促膝於龍花三會之朝……………四九
 贈我白頭翁……………四九
 簾編翡翠……………四九
 簾を卷けば松竹……………四九
 譏を雷破の戯に……………四九
 關を度るの馬を認めん……………四九
 轉棹東西夜月隨……………四九
 轉得憂人作樂人……………四九
 繡帳粧成燈照曜……………四九

十八畫

十九畫

二十畫

蘆花又蘆花……………四九
 蘆葉春青水冷天……………四九
 嬌閨枕冷吟風曉……………四九
 嬌閨雪冷曉聲寒……………四九
 鐘聲半夜香山雨……………四九
 鐘聲日暮野煙中……………四九
 鐘儀幽而楚奏莊鳥……………四九
 鐘を聞いては起きて……………四九
 嚴絲灘波與意清……………四九
 嚴冬子熟一株金……………四九
 隴月微雲一似羅……………四九
 織拋業障水消地……………四九
 勸君更盡一盃酒……………四九
 關提なりと雖も能く……………四九
 籍を通じて重門に……………四九
 譽を渭水の文に……………四九

籬來六日未全秋……………四九
 穠雲歸洞千年駕……………四九
 護塔之鳥棲月……………四九

響絕紅霞殘檣下……………四九
 讀易床頭新月色……………四九
 鶴老歸田鬢髮新……………四九
 鶴照皐聲一舉中……………四九

巖松雪宿暗山北……………四九
 巖泉を過ぎて婆娑たり……………四九
 驚弓斜避三更月……………四九
 戀石唯念初觸色……………四九
 蘿洞雲開隱逕深……………四九
 蘿洞雲栖鳥宿林……………四九
 蘿襟蘿積冷霞客……………四九
 顯而越吟……………四九

鬢華頭鶴欲何歸……………四九
 艶流を言泉に潤……………四九
 艶色逼砌……………四九
 驚絲寒色混難尋……………四九
 籬東日月不傾西……………四九
 籬簾殘檣抽紅濕……………四九
 籬花を折つて佛界に供ず……………四九
 靈均之五願也……………四九
 籬隔乾坤豈怕霜……………四九
 籬に満てる霜毛は……………四九

觀古今於須臾……………四九

二十一畫

二十二畫

二十五畫

二十四畫

蘭岸月冷聲彌亮……………四九
 蘭蕙香邊飄不濕……………四九
 蘭臺日暮……………四九
 麝子鳴時此草香……………四九
 緜緜花寒被織風……………四九
 霽來煙綠洞底砂……………四九

灑陵原上雨初晴……………四九
 鬢霜鎖帶數莖秋……………四九
 鬢雪多於砌下霜……………四九

和歌索引

【あ】

あかつきかけてこゑのきこゆる 四三三
あかつきはかりうきものはなし 四三六
秋風になひくあさちのすゑこと 四三六
秋風はすすしくなりぬこまなへて 四三三
あきたつ日はむへもいひけり 四三三
秋のにはたおる虫のあらなくに 四三七
あきののはらにをしかなくなり 四三七
秋のよはひとをしつめてつくつくと 四三九
秋はいろいろのはなにそありける 四三九
あきはかきりとおもひしりぬる 四三三
秋山のかひにみかへりなくさるを 四三八
あさちかはらにあきかせそふく 四三九
浅茅原たままくすのうらかせに 四三五
浅茅原ぬしなきやとのさくらはな 四三五
あさまたきやへさく菊の九重に 四三一
浅緑そめてみたるあをやきの 四二七
浅緑のへのかすみはつめとも 四二八
あしかるわさをせねはなりけり 四三九
あしたつたてる川へにふく風は 四三九
あしのはに隠れてすみしつこの國の 四三六

【い】

足引のやましたみつのこかくれて 四三三
足引のやまちもみえずしらかしの 四三六
足引のやまほとときすけふとてや 四三三
東路にいりにしひとのこひしきに 四三七
あはれてふことは毎におく露は 四三三
あはれにもくれゆく年の日數かな 四三九
あはれわかればひとのためかは 四三九
あはれむかしとしのはれそする 四三七
逢坂のせきをやはるのこえつらん 四二〇
あふさかやまはきりこめてけり 四三七
あふひとからのあきのよなれは 四三六
天の川あふきのかせにきりはれて 四三九
天の原はるはことにもみゆるかな 四三九
あやめのくさのねにたてなく 四三三
有明のつきもしみつにやとりけり 四三三
有明のつれなくみえしわかれより 四三六
ありととも頼むへきかよの中を 四三三
あれたるやとおもひこそやれ 四三三

【う】

いさうちはらひわかたつみてん 四二一
いさのにゆかんはきはなみに 四三三
漁火のまかへるかほとみえつるは 四三三
いそけやさなへおひもこそすれ 四三八
徒らにすくる月日をたなはたの 四三六
いつくにか駒を止めんもみちはの 四三四
いつとも月みぬ秋はなきものを 四三九
いとかくけふをしましやは 四三三
いとをもはるのかせやとくらむ 四三七
いなおほせとりのなみたなりけり 四三六
古へのならのみやこのやへさくら 四三四
いのちとたのむせみのはかなき 四三四
岩代ののなかにたてるむすひまつ 四三三
岩つつしをりもてそみるせこかきる 四三九
いはのうへにたひねをすれはいとさむ 四二九

うきよをめくるわかみなりけり 四三六
うくひすさそふしるへにはやる 四二四
うしとても更に思ひそかへされぬ 四二七
うすくやひとのならんとおもへは 四二四
薄墨にかくたまつさとみゆるかな 四三六
うたたねによやふけぬらん唐衣 四三六
うち拂ふとこねならねは鴛鴦の 四二〇
うつこゑたかくなりまさるなり 四三八
うつろふかけやそこみゆらむ 四三〇
うはけのしももけさはさなから 四三〇
うらかなしかるあきはきにけり 四三五
うらはさやにもおけるしもかな 四三七
恨みわひほさぬ袖たにあるものを 四三七
うれしさを何に包まん唐衣 四三六

【え】

えたにもはにもゆきのふれれば 四三六

【お】

おいせぬものはわかななりけり 四二二
おいぬるはかりかなしきはなし 四三三
おきてみんとおもひしほとにかれにけり 四三三
おきのしらなみたちてこぬまに 四三六
おくしらつゆのあはれよのなか 四三六

【か】

おそくとも遂にさきぬる花みれば 四三七
落積るくちはかしたのみなしくり 四三六
おとはのやまのけさはかすめる 四二〇
音もせて操にもゆるほたるこそ 四三三
おなしよとのにひけるなりけり 四三三
おのかはかせやよさむなるらむ 四三五
おほあらしのりのしたくさしけりあ 四三三
ひて 四三三
おほあらしのりのしたくさなつくれ 四三七
は 四三七
大原やをしほのやまのこまつはら 四三六
おほろのしみつおもかはりすな 四三三
おもひいつるのなくそかなしき 四三六
おもひてもなき故郷のやまなれと 四三一
おもふとちまとるせるよは唐錦 四三七
おもひのほかにきみかきませる 四三六

かすみそはるのしるへなりける 四二五
かすみもきりもけふりとそみる 四二一
かすむゆふへにかへるかりかね 四三六
かせこそわたれあきのゆふくれ 四二七
かそことことにははさりける 四二七
數ふれはとしの残りもなかりけり 四三七
かたへすすしきかせやふくらむ 四三三
語らはん人こそなけれ山里は 四三三
庚さるふねまでしはしこととはん 四三六
かはかせのすすしくもあるかうちよす 四三三
る 四三三
かへさてぬるやこよひなるらむ 四三六
かへらんことはよのまなれとも 四三九
神無月しくればかりをみにそへて 四六一
かものうはけをおもひこそやれ 四三九
からにしきともみゆるのへかな 四三七
唐人のふねをうかへてあそふてふ 四三二
かりそめのわかれとおもへとしらかは 四三二
の 四三二
かるひとなしにしけるころかな 四三六
かわけるうへにしくれふるなり 四三七
かをたにぬすめけるのやまかせ 四三三
かきこしにみれどもあかすさくらは 四三三
な 四三三

【き】

きくほともなきひとこゑにより 四四
 きのふかも敷ふりしはしからきの 四五
 きみかためはるののいいててわかなつ 四二
 君かよにあふくま川のみつきよみ 四三
 きみかよになにはのうらもしけりあひぬ 四六
 きみかよは天の羽衣まれにきて 四七
 君かよはちよに一度ゐるちりの 四八
 きみはかりこそあとはしならめ 四九
 君ましし昔はつゆかふるさとの 五〇

【く】

くさのうへにおきこそあかせあきのよの 四一
 の
 くちしところそこひしかりける 四二
 くもちたつぬるひともなきよに 四三
 くものいつこにつきやとるらん 四四
 くものしからみなみやこすらむ 四五
 くものはたてもいろまさりけり 四六
 くもるときなくてらすへらなり 四七
 悔しくそ天つ乙女となりける 四八

暗きよりくらき道にそいりぬへき 四六〇
 くらはしの山のかひより春霞 四六一
 くらふへき駒もあやめの草もみな 四六二
 くれなゐそめのきぬにたれば 四六三
 紅にいろをはかへて梅のはな 四六四

【け】

けさしろたへにゆきはふれれと 四六五
 けさやまかはのみつまざりけり 四六六
 けふこのへにほひぬるかな 四六七
 けふこんひとをあはれとはみむ 四六八
 けふそわかせこはなかつらせよ 四六九
 けふのくるるはあかすもあるかな 四七〇

【こ】

こからしの音に時雨をききわかつて 四七一
 こけのころもをわれにかざなん 四七二
 ここにきてかしこにむすふみつのおわの 四七三
 の
 九重のうちたにあかきつきかけに 四七四
 ころあらんひとにみせはやつのくにの 四七五
 の
 心からうきたるふねにのりそめて 四七六
 こころしてふけあきののはつかせ 四七七

こころとちれるはるしなければ 四七九
 こころにえこそまかせざりけれ 四八〇
 こころのうちのすすしかるらむ 四八一
 こころもとけすむしおもへは 四八二
 こころやすくやかせにちるらむ 四八三
 ことしもあきのこころこそすれ 四八四
 こぬひとよりもうらめしきかな 四八五
 この頃はききの木末もみぢして 四八六
 このはちる宿はききわく事そなき 四八七
 こひにくちなんこそをしけれ 四八八
 こひはうらなきものにてありける 四八九
 戀佐て別れしのへをきてみれば 四九〇
 氷たにとまらぬはるのたにかせに 四九一
 こほれてにほふはなさくらかな 四九二
 こほれるなみたいまやとくらん 四九三
 こやもあらはにふゆはきにけり 四九四
 こよひはこえしあふさかのせき 四九五
 衣川みなれしひとのわかるれば 四九六
 衣なるたまともかけてしらすりつ 四九七

【さ】

さかきとるうつきになれば神山の 四九八
 さくらいろにそめしころもをぬきかへて 四九九

櫻花あかぬあまりにおもふかな 四一〇
 小波やしかのうらかせいかはかり 四一一
 さつきやみ空懐かしくにほふかな 四一二
 澤水にかはつなくなりやまふきの 四一三
 さよふかく旅の空なるかりかねは 四一四

【し】

しかこそはなけあきのやまさと 四一五
 しかのなくねにめをさましつ 四一六
 鹿のねそねさめの床に聞ゆなる 四一七
 しくれするよもしくれせぬよも 四一八
 しのふれといろにいてにけりわかこひは 四一九
 は
 しはしとなかんとりのねもかな 四二〇
 霜おかぬ袖たにさゆる冬のよは 四二一
 しらくもかかるとよまとなるまて 四二二
 しらすものはあさかほのはな 四二三
 しらぬやまににいるそかなしき 四二四
 白雪のまたふるとしの春日野は 四二五
 白妙のいもか衣にむめのはな 四二六

【す】

すきゆくあきはけにそかなしき 四二七
 すたきけん昔の人もなきやとに 四二八

住吉のきしのひめまつひとならば 四三〇
 すむひともなきやまさとの秋のよは 四三一

【せ】

せきととめぬはなみたなりけり 四三二
 せきまできぬとつけややらまし 四三三
 せみのこゑきけはかなしななつころも 四三四

【そ】

そこにそ見ゆるよろつよのかけ 四三五
 そまかはの筏のとこのうきまくら 四三六
 そらすみわたるかささぎのはし 四三七

【た】

たかそめかけしあさみとりそも 四三九
 たかまきおきしたねにかあるらん 四四〇
 たきつこころをせきそかねつる 四四一
 竹のはにあられふるよのさむけきに 四四二
 竹のよもわかよもいたくおいにしを 四四三
 たたかけするはあきのよのつき 四四四
 たたまくをしきものにそありける 四四五
 たつねつる雪のあしたのはなれこま 四四六
 たなはたの雲のころもをひきかさね 四四七

たひねのそらにいてにけるかな 四四八
 たまののみつもいまはもりこす 四四九
 たもとまでこそなみはよせけれ 四五〇
 たもとゆたかにたたましものを 四五一
 たゆけにまねくはなすすきかな 四五二

【ち】

ちきりけん心そつらき七夕の 四五三
 ちよをころにまかせつるかな 四五四
 ちらすはひとやをしまさらまし 四五五
 ちる花にせきとめらるる山川の 四五六

【つ】

つきのひかりもさひしかりけり 四五七
 つきはうきよのほかよりやゆく 四五八
 つねにすむなるつきをみぬかな 五五九
 常よりもとけかりつる春なれと 五六〇
 常よりもまたぬれそへし袂かな 五六一
 つゆにことならぬわかみと思へは 五六二
 露結ふはきかしたはやさむからん 五六三
 つゆよりけなるあさかほのはな 五六四
 つれもなき夏の草葉におくつゆを 五六五

【と】

としにひとたひあふはあふかは 四三六
としのうちにつもれるつみはかきくら
し 四四一
としのうちにはるたつことをかすかの
の 四四九
としはやまよりこゆるなりけり 四四九
としをつみてやたちわたるらむ 四四五
とまりゐてまつへき身こそ老にけり 四四四
とやまにかすみたなひきにけり 四四五
とりつなけみつの原の放れ駒 四三七

【な】

なかしともおもひそはてぬ昔より 四六六
なかつの九日ことにつむきくの 四三二
なかむるにもおもふことのなくさむ
は 四三〇
なきさよするなみたにもなし 四七五
なきわたるかりのなやみたやおちつら
む 四三七
なくむしよりもあはれなりけり 四三四
なげやなげよもきかものひきかへ
る 四三六
夏草はむすふはかりになりにけり 四三七
夏衣またひとへなるうたたねに 四三五

なつとあきとゆきかふそらのかよひち
は 四三三
なつともつきぬいはほなるへし 四三六
夏のよはうらしまの子かはこなれや 四三二
夏のはすすしきふしとなりけり 四三三
夏やまのならのはそよくゆふされは 四三三
なにかはひとにありとしられん 四三六
なにことをかはおもひのこさん 四三〇
なにはあたりのはるのけしきを 四三〇
なほこそぬれめかもやうつると 四三五
なみとともにやあきはたつらむ 四三四
なみのよるてふほたるなりけり 四三四
ならのはかしはもとつはもなし 四三二

【に】

にはかにもかせの涼しくなりぬるか 四三五

【ぬ】

ぬるよのかすとおもはましかは 四三六
ぬつつそしひてをりつる年のうちに 四三三
ぬれぬれもあけはまつみん宮城野の 四三三

【ね】

ねこめにかせのふきもこきなん 四三六
ねぬよこそかすつもりぬれ杜鵑 四三四
【の】
のかひのこまはあくかれぬらむ 四三七
のへにやこよひたひねしなまし 四三二
【は】
はかなくあけてくやしがるらむ 四三二
はつねのひとはいふへかりけれ 四三二
はなこそやとのあるしなりけれ 四三八
はなたちはなにかせやふくらん 四三三
花たにもちらてわかるる春ならば 四三三
はなにこころのあかぬかきりは 四三〇
はなのいろはかすみにこめてみせずと
も 四四四
花のかを風のとよりにたくへてそ 四四四
花みつつをしむかひなくけふくれて 四三三
はなみることにそてのぬるらむ 四三五
はなもかひなくおいにけるかな 四三一
はなよりのちはなしけれは 四三一
ははそのもりのうすくこからん 四三四
はひにのみくたく心をいかにせん 四三九
はやこたかかれちよのかけみん 四四六
春霞たてるをみればあらたまの 四三九

春霞ゑてのかはなみたちかへり 四三〇
春風にさほのこほりやとけぬらん 四四一
はるかにてらせやまのはのつき 四三六
春きてそひともとひける山里は 四三八
春雨の花のえたよりなかれこは 四三五
春のよはいこそねられねおきあつ 四四一
はるはいくかもあらしとおもへは 四三三
春はもえ秋はこかるるかまど山 四五一
はるをはあすときくそうれしき 四四二

【の】

ひくらしにみれともあかす女郎花 四三三
ひとひもなみにぬれぬひそなき 四三二
ひとよのほとにはるめきにけり 四三〇
獨りのみ眺めふるやのつまなれは 四三二
ひとりはねなんものとやはおもふ 四四一
獨りて月をなかむる秋のよは 四三〇
獨りゐてなかむるやとの萩のはに 四三七
ひとをしふのくさそおひける 四三六
姫小松おほかるのへにねのひして 四三一

【ふ】

ふかくもなつのなりにけるかな 四三三
ふかくもはるのなりにけるかな 四三二

ふくかせそおもへはつらき櫻花 四三九
ふちなみのかかれるきしのまつはおい
て 四三〇
ふままくをしきにはのゆきかな 四四〇
故郷となりしならのみやこにも 四四四
故郷のみかきのやなきはるはると 四三七
ふるさとほみしこともあらすをのえ
の 四四七
ふるしらゆきとともにきえなん 四四一

【ほ】

ほかのはるとやあすはなりなん 四三三
ほりえには玉しかましを大君の 四三六

【ま】

またうちとけぬうくひすのこゑ 四四四
まちつらん都のひとにあふさかの 四三五
まつけふをこそひくへかりけれ 四四二
まつさへいたくおいにけるかな 四四六
まつのうへになくうくひすのこゑをこ
そ 四四一
まつ人の今もきたらはいかかせん 四四〇
まつ程に夏のよいたくふけぬれば 四三二
まてといはいはいと畏し花の山 四三九

に
まもるかりほにいくよねぬらむ 四五六
まもるにとまるはならねども 四三一
【み】
みしまえに角くみわたる葦のねの 四二〇
みたやもりけふは阜になりにけり 四五六
道のへの朽木のやなきはるくれは 四二七
みつのおもにあやおりみたるはるさめ
や 四二五
みつもいろなるものにそありける 四三三
みてこそゆかめやまふじのはな 四三〇
緑なるひとつくさとそ春はみし 四三三
峯高きかすかのやまにいつるひの 四三七
みふねこかんとかねてしりせは 四三六
都にてなかめしつきのもろともに 四三五
都人ねてまつらめやほとときす 四三二
みやまいててよはにやきつるほととき
す 四三三
みやまよりおちくる水の色みてそ 四三二
みゆるはしものおけるなりけり 四三一
みよしのは春のけしきに霞めとも 四三〇
みるたひに鏡のかけのつらきかな 四二七
みわたせばひらの高ねに雪きえて 四二五

【む】

むかしをかけておちしなみたに
 むかしをこふるつまとなりけり
 むかしをしのふなみたなりけり
 むすははれたるうくひすのこゑ
 むはたまのわか黒髪に年くれて
 梅かかをよはの嵐のふきためて
 紫のくもとそみゆるふちのはな

四四四
 四四三
 四四〇
 四三〇
 四三三
 四三六
 四三〇

【め】

珍しきちよのねのひのためしには
 珍しきひかりさしそふさかつきは
 めもかれすみつつくらさん白菊の

四二二
 四二一
 四二二

【も】

もちなからこそちたひめぐらめ
 もとあらのはきやしをれしぬらん
 物おもふ宿のはきのうへのつゆ
 ものやおもふとひとのとふまて
 もみちにぬるるたもととそみる

四二二
 四二一
 四二〇
 四一七
 四一五

【や】

宿近くはなたちはなほりうつし

四二二

【を】

をかのまつかせそよりほかには
 をしみもあへすやまのはのつき
 惜めともたちも止らぬもの故に
 惜めともはるの限のけふの日の
 をのくさふしつゆやおくらむ
 をのへのまつもまたたてりけり
 女郎花かけをうつせは心なき
 小山田のおくての稻をかりほして
 をられけり紅にはふむめのはな

四二二
 四二一
 四二〇
 四一三
 四一三
 四一六
 四一三
 四一六
 四一七

よをうきはにはすむひともなし

四三三

【わ】

わかころもてにゆきはふりつつ
 わかせこかきまさぬよひの秋風は
 わか袖につゆそおくなる天の川
 わかなさへにもしりにけるかな
 わかなつむへくのはなりにけり
 わかねやのとのあくるまちけり
 わかむらさきにかてさきけん
 わかやとの櫻なれともちるときは
 わか宿の梅のたちえや見えつらん
 わきてこよひのめつらしきかな
 わしのやまへたつる雲や厚からん
 わすられかたきかにほひつつ
 忘れてもあるへきものを葦原に
 われたにもをいはてこそおもへ
 われのみと思ひしかとも高砂の
 破舟のしつみぬるみのかなしきは
 われよりさきにひとこさりけり

四二二
 四四四
 四四四
 四四七
 四四九
 四三三
 四三六
 四三〇
 四二九
 四二六
 四二九
 四二六
 四二二
 四二一
 四二〇
 四一八
 四一六
 四一五
 四一〇

【ゑ】

ゑひさめてこそうれしかりけれ

四六〇

【よ】

よしのやま雪には跡もたえにしを
 よせてかへらぬなみかとそみる
 よのかはきりあきははれしな
 よふかくききてそてそひちぬる
 よにすまは又もみにこん大原や

四四四
 四四六
 四四七
 四四八
 四四三

【ゆ】

宿りせし人のかたみにふちはかま
 山里はあきこそことになしけれ
 山里はゆきふりつみてみちもなし
 山田もる秋のかりほにおくつゆは
 山のはにいりぬる月のわれならは
 やまのみとりをなへてそむらむ
 山深みおちてつもれるもみちはの
 やまほとときすけふはまつかな

四三三
 四三七
 四四〇
 四四六
 四四五
 四四五
 四四二

ゆきつもる己か年をはしらすして
 ゆきとまる所そはるはなかりける
 ゆきのうちにはるはきにけりうくひす
 の
 雪深きみちにそしるき山里は
 行末のしるしはかりにのるこへき
 ゆふくれにさへなりにけるかな

四三二
 四三〇
 四二九
 四二四
 四四〇
 四四六
 四三三

昭和三年九月二十日印刷
昭和三年拾月廿貳日發行

(非賣品)

日本歌謠集成



著者
發行者
印刷者

高野辰之
東京市外代々木中山谷一六七
神田豐穂
東京市麴町區內山下町一ノ一
關根慶寬
東京市牛込區早稲田鶴卷町三六二

印刷所

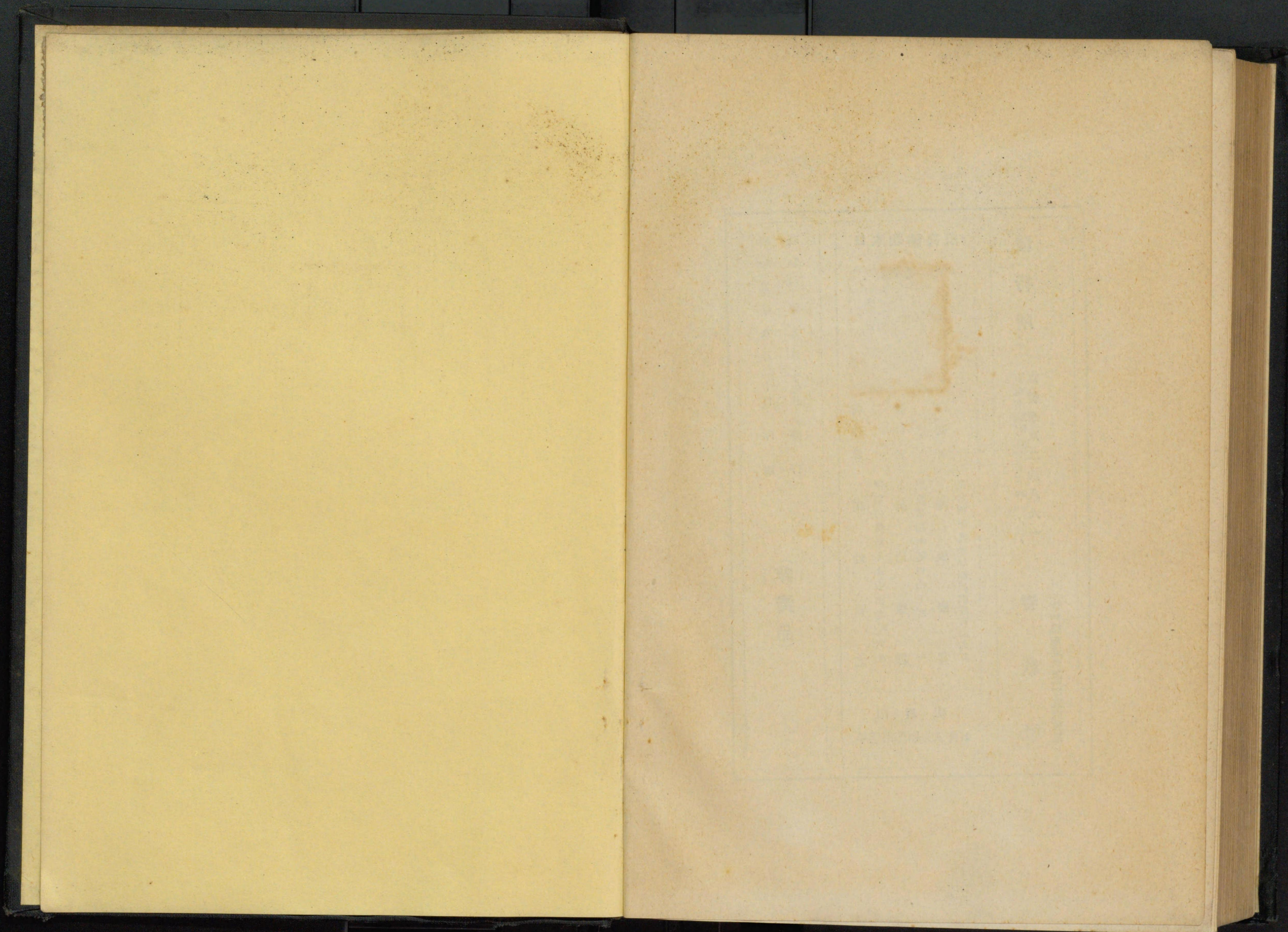
早稻田印刷株式會社

發行所

東京市麴町區內山下町一ノ一
振替東京二四八六一

春秋社

電話銀座五六五二・五六五三



584
33

